

つらく千六百八十八年の革命後の**社會の狀態**を見るに、紀綱紊亂して法令行れず、賞罰當を失し、上流社會は日に益々腐敗し、下等社會も亦た猥雜と殘暴との極に沈めり。時の大臣等、就中ロバート、ウオルポールの如きは、只管卑劣なる籠絡手段をめぐらし、賄賂を以て國會議員を操縱するを最上の政策とし、治國の能事かくの如くにして、罪るとなせりき。上の好む所、下更に甚しきものあり、すべて政治家は苞苴の受授を尋常事となすに至り、人に愛國の誠なく、節義を重ずるの念なく、宗教家を以て任ずる者も、大概は虚儀是れ事とし、人倫の大義は棄て、顧ず、敗徳を犯し醜行をなして愧づる色なかりき。政教の壞亂實に斯くの如くなりしかば、口に筆に腕に、政治上の卑劣なる鬭争不斷に行けれ、詩歌文章もまた其の一具に利用せらるゝに至れり。堂々たる文壇の名家すらも、概して此の風潮に捲かれて、或は保守黨に屬し、或は改進黨に屬し、單に一政黨の一時の主張の爲に詩文を作ること流行せり。彼のスヰフトの『ガリヴァー巡島記』、アチソンの『カト』の如きだに、一方よりいへば政治上の寓意あるが故に喝采を博せし也。彼の嘲世諷俗の詩文の流行せしも同じ精神に胚胎せしに外ならざるなり。而してさばかり**嘲世諷俗**の文の流

行せりしは、偶、以て當代の腐敗と墮落とを證するに足るなり。何となれば、諷世嘲俗の文章は、取りも直さず、自家の時代、自家の社會を侮辱したるものなるに、其の文字を讀みても、發憤せざる社會は、自家を嘲けられて、平然たる社會なり、即ち自家の虚偽、自家の耻辱を笑柄となして怪しまざる厚顏の社會なればなり。蓋し當代は個人を主とし、人身攻撃を旨とせし時代なり。又**俱樂部**、**集會類**の全盛期なりき。而して此等の小團體、小黨與は、相協力して、奎運の進歩を圖りしかといふに、さにはあらず、互に偏執し、割據して、區々たる小名利を争ひあひしに外ならず。彼の無要なる古今文學優劣論といふ閑辯論の、一時文壇を騒がせしが如き、閑文壇の痴態を表彰するに足れりといふべし。されば、學者が理を研究すといふも、真理其の者の爲に真理を攻究せしには非ず、詩文人が詩文を愛すといふも、文學其の者の爲に著作に熱中せしには非ず。宗教家の如きすら、天道又は聖教の爲にせずして、私利、私黨の爲にせし者比々是れ也。酷評すれば、十八世紀は憎怨、嘲罵、輕蔑の盛に行はれし時代也。此の故に當代の詩文人は、動もすれば、他の缺點、短所のみを評きて、其の美を看過し、警句をもて他を嘲罵するをのみ得意とせり。十八世紀は**自負自慢**

爲我利己の時代也個人としては、自家を獨り尊しとし、社會としては、當代の社會を獨り尊しとなし、時代也。尠くとも、眞摯幽玄なる詩歌の乏しかりし時代なりき。就中、其の初期に聲出せし詩人は、あしなべて韻語家即ち修辭家也、眞に詩の神髓を解し、詩人の天職を意識せしものは殆ど無し。

さもあれ、以上は主として十八世紀の醜所に就きて觀察したるなり。其の美所もまた無からんや。美所とは何ぞ。散文々學の發達是れなり。

按ずるに、第十七世紀の末に至るまでは、詩歌、即ち律語の文學は、常に英國文學の主位をしめたり、散文の文學の如きは、僅に詩歌に附隨して徐々の進歩をなし、のみ。ウイックリフの譯筆や、ベーコン、フッカーの論文や、妙は即ち妙なれども、其の詩境を論ずれば、未だチーサー、シークスピア乃至スペンサー等に及ばざること遠かりしなり。換言すれば、純文學の神髓たる想像の妙趣は、概ね常に律語を以てのみ發揮せられたりき、散文に至りては、毎にたゞ平明質直なる思想を表白するの具たるにといまれる趣ありき。然るに、この趨勢は、第十八世紀の初期より漸變し、擬古熱の盛なると共に、韻語はむしろ機械的技術となりゆき、詩歌の神髓は却りて他の散文學

即ち彼のアチソン、スウィフト等の創新なる散文中に吸收せられんとするに至りぬ。これ所謂**散文詩**小説の勃興せんとする前兆なりき。デフォーは實に此の氣運に鼓吹せられて出で、而して英國寫實小説の曙光輝きせめ、リチャードソンついで出で、所謂心理小説の胎子成り、ついで十九世紀に至りてスコット、 Dickens、 サッカレー、乃至ショールズ、エリオット出で、長足の進歩をなし、やがて英國の文學は、詩歌、散文の兩面双つながら全きを得るに至りたり。但し、其の初め西班牙に行はれし冒險譚を換骨奪胎してフィールディング、スモーレット等の爲に新小説の新途を開きし者は、佛の作家ル、サーズ (Lo Sages) なれば、佛の散文詩は英の散文詩の祖たりしこと事實なり、而も佛の批評家等は痛く英の新小説を歓迎し、頗に其の出藍の功と妙とを稱しき。

歴史的文學も亦當期に著く進歩せりき。佛、伊兩國人は、從來傳記史論の述作に名ありしかど、今日所謂歴史の本分の歐洲の文壇に實現せられし端緒は、當期の英國史家ヒューム、ギボン等に負ふ所多しといふべし。ヒュームの『英國史』、ギボンの『羅馬衰亡史』出で、後歐洲の修史事業は面目を一新せりといふも過言にあらず。

其の他、哲學、科學上の實用を旨とする論文だに、漸次其の面目を改め、ペーコンの雅潔、ロッシの質實、ドライデンの淺露、平明より進んで雅馴にして明晰、遒勁にして精緻なる一文體を成すに至りぬ。

散文文學のかく著く發達せしに反して、韻語文學の衰頽せしことは、前にもほのめかせる如くなるが、**劇詩界**の凋落に至りては、更らに一段甚しきものありき。蓋し、これより先き、一千六百六十年の王政恢復より一千七百年に至る半、四十年間、英國の劇壇は前十八年間興行を禁ぜられたりし反動にて大いに盛運を來たし、彼のコンクリーザ、オートニー等各、一派をなして斯界に樹立し、新作乏しからざりし由は第三篇の末にも叙したるが如し。然れども、その喜劇は、彼のエリザ朝に行はれし人情の上の滑稽を失ひ、單に舉動容姿の上の可笑味を主とすることとなり、隨うて清淨教徒の嫌忌を受けて禁止せらるゝに至りしかば、一千六百九十九年には歐洲中にて喜劇作者の多きに誇りたりし英國が、それより僅か十年の後には、喜劇の命脈をばたいてコリー、シッパ等の筆によりて、辛くも一縷の危きに維々に過ぎぬ有様となりき。かくて十八世紀の劇詩界には、専門の作者跡を絶ち、平凡無修養

の文士が折々に作を試むるまでのこととなりしかば、隨うてその貢獻する所甚だ少く、纔かにゴールドスミス、シニリダン等がコンクリーザ、ウィッチェリ等の作を修正して多少の脚本を綴りしに過ぎざりき。要するに、十八世紀の前半は、詩歌の暗黒時代なり、而して劇に至りては、後半に及びてだに、振興の兆を現せざりき。

第二章 アデソンとス井フト

前期の二大文學家——其の異同——アデソン——其の昇陞——其の著作

——其の特質——其の文致——ス井フト——其の生涯——其の著作——

『補物語』——『ガリゾー巡島記』——其の特質。

此の詩歌不振の時代、何れかといへば常識獨り榮え、散文最も興隆せし詞壇に、諷刺家として、評論家として、鐵中錚々の譽ありし者を誰れとかなす。曰はく、**アデソン**と**ス井フト**と、是なり。二人は實に十八世紀前半の龍虎なり。二人の相似たるは其の位置のみにあらず、博學多才にして文章を行ふに自在なる、人を啓發し感動するに妙を得たる、常に黨派心を脱すること能はざる、亦た共に殆ど其の傾向を同じうせり。而も、其の閑歴と性癖とに至りては、古來此の二家の如く相乖戻す

る者は甚だ稀也。蓋し、アチソンは當世の寵兒にして、スウィフトは當代の憎まれ兒なり。前者は多幸にして後者は薄命なり、前者は温厚にして後者は酷薄なり、前者は優雅にして後者は粗厲なり。前者は人間を愛憐し、後者は人間を憎怨し、前者は其の最も美なる時には君子の如く、後者は其の最も醜なる時には人面の悪魔の如し。

デ・セフ、アチソンは、一千六百七十二年五月、我が朝靈元天皇の寛文十二年、伊藤東涯時に三歳、ウエルトシヤに生まれき、一牧師の子なり。幼にして、其の後年の信友スチールと共に、チャーターハウスにて學業を受け、十五歳にしてオックスフォードなるクラインス、コレヂに入るに及び、夙に羅句語をもて韻語を綴りて詩名ありき。卒業の後幾ばくもなく、國王ウイリアムの徳を頌する詩を作り、其賞として一年三百磅の年俸を得たりしが、やがてまた大陸地方漫遊の旅費をも賜はりぬ。アチソンが嫺雅優美なる本性と富贍圓美なる文才とは、歐洲に於ける最も文華なる國、伊太利、佛蘭西の歴遊によりて、更に其の圓美都雅の致を加へき。

アチソンは爲人寡黙恭謙にして、何事につけても他人と争ふを好まざりき。され

ば政治論者としては改進黨自由の主義に熱中したりしにも拘らず、曾て其の反對黨をだに痛撃せしことなければ、如何なる黨派にも憎惡せらるゝに至りしことなく、改進黨大敗の秋にすらも衆議員議員に選舉せられし程なれば、改進黨全盛の際には、累進して國務尙書の高官にまでも經上りにき。こは必しもわざと主角をけづり去りて敵を作らざるやうに力めたりし故にはあらむ、其の温雅寛厚なる品性の自然にして然らしめし所なるべし。

アチソンは讀書述作の人、觀察冥想の人なりしゆゑに、其の一生の事歴は、其の著作以外には、また多く記すべきことなし。彼れは一千七百十六年に、某素封家の未亡人と結婚し、其の翌年國務尙書に擧げられ、同十九年病に罹り、ケンシントンなる邸内にて逝りぬ。時に齡四十八歳なりき。其の詳かなる傳記は、一千八百四十三年にルシー、ヘーキン Aikin が著したるを最とすべし、A Life of Addison と題したるものは是れなり。彼のマコーレーが有名なる『アチソン論』を物せしは、該書を批判せる序なりき。近きころの編述に係るものうちにも、良き傳抄からず。

アチソンが著作のうち、其の名高きが爲に若しくは眞に傑出せる價值あるた

めに、ごもかくも一讀過すべき要ある者は、ほゞ下の如し。先づ韻語の詩人としての其の伎倆を窺ふべき料は(一)其の二十二歳の作『ドライデンに寄するの歌』なり、こはドライデンを激賞せる韻語の評論とも稱すべし、但し、詩としての價値は乏しき作なり(二)伊のゾーシャルが作『Fourth Georgie』の一部分を翻譯せるもの、これ將た其の詞才を窺ふに足るのみ(三)伊國滞在中にハリファックス卿の許へ送りし書簡牘の詩(四)時の將軍マーボローが戦勝を讚美せる『ゼカムヘーン』(五)『ロザモンド』と題せる伊太利風の樂劇(六)『カトー』と題したる古劇風の悲劇などなり。此のうち『カトー』は一千七百十三年に作せし苦心の作にて、三十五夜間打通せし程に當時の劇場にては成功せしものなり。『ゼカムヘーン』の如きも、其の當時には、痛く世間を憾かし、名作なりき。

散文家、批評家としてのアヂソンの伎倆を窺ふべき著述は、一千七百〇九年に其の友スチールを藉けて執筆せし『タットラー』といへる定期刊行物に掲げたる諸雜筆、及び同十一年に同じくスチールと共に(但し此たびはちのれ其の主筆となりて)發刊せし『スペクテーター』の諸論說、記事、華文、諷刺文等なり。『スペクテーター』は

英國通俗雜誌の最古なるもの、一たると同時に、文學趣味を俗間に弘傳せし開祖なるべし。毎朝の發兌にて、六百三十五號まで續きたりき。該誌に載せたるアヂソンが文章は、眞に種々雜多なりき。堂々たる長き論文もあれば、をかき滑稽の諷刺文もあり、考證に類するや、乾燥なる取調もあれば、今の端物小説に似たる短き物語もあり、輕妙なる寓意譚もあれば、風流洒落の論說もあり、假に種々の人物を作り設けて、そを眞に實在せる人の如くに狀寫し、殆ど寫實小説を讀むが如くに思はしむる文もあれば、嚴肅なる倫理を談じて、讀者をして襟を正さしむるに足る文もあり。而して此の千變万化の論文、諷刺文、比喩談、戲文等はいづれもとり／＼に面白きなかに、取りわけて玩味べきは、サー、ローシヤ、デカヴリといふ一紳士に關する諸篇、マーザの夢と題したる寓意談、ミルトンを評論して『失樂園』に及べる長篇予が嘗て『英詩文評釋』中に訓釋せる數篇、乃至頓智滑稽をなかば遊戯的に評論したる諸篇などなるべし。

アヂソンの文章は、優美雅潔の致を極めたり。彼れの文を草するや、一語苟もせず、毎句毎節の權衡をして十分に音樂的節調に叶はしめんと苦心し、毎辭每章、一

の冗音なく、一の冗彩なく、重濁の失なく、輕浮の弊なく、婉轉滑脱のうち、高雅沈靜の概をも寓せしめんと力めたりき。其の結果、雅馴と優美とを得たりしかど、優美の極は平淡となり、平淡の極は、往々にして、平板乾枯に流れたり。筆にも、想にも、熱に乏しきはアチソンが缺點なり。テーヌはアチソンを評して曰く、彼れは說話者なり、目撃者にあらずと。げにや、アチソンは說話體の達人なり、彼れは喜怒哀樂せずして人間百般の出來事を語り得たり。テーヌはまた曰はく、アチソン等擬古文人は、作らぬ誠と鋭き創意とを重んずることをせずして、偏に麗しき排置と善美なる秩序とを愛すと。此の評は動かすべからず。アチソンは其の作(就中詩)に於ても、其の論評に於ても、餘りに規律に拘泥せり。

アチソンは専ら散文の名家として推重すべき作家なり、彼れは韻語を能せざりしにあらざれども、彼の燃ゆるが如しといふ抒情詩人的情熱無し。上は其が詩人としての聲譽を博せし處女作『カムベーン』より、下は其の得意の樂劇『ロザモンドの悲劇』勿論『カト』及び其の寓意的華文の傑作『マーザの夢』に至るまで、一として技巧的ならざるなし。是れ一は其の賞鑑の標準の高上ならず且つ創新ならざりし

にも因れど、一は擬古を第一とせし時尙の影響なり。彼れはドライデンをこよなき詩人の如く激賞せりき、其の尤も歎服せりしはドライデンが翻譯の技倆なりしが如し。要するに、アチソンの長所は、其の觀察の穩健にして精細なることと、其の措辭行文の巧妙嫺雅なることとなり。其の觀察はすべて具象的にして鑿々據る所あり、彼のペーコンの如く抽象的ならず、隨うて其の文章もまたペーコンの如く雅に失せずして俗に通じ易し。是れアチソンの特質にしてまた十八世紀文學の特質なり。

アチソンは博學多才なりしのみならず、廣く人情に通じ、世故に老いたり。彼れは人を娛樂せしむると共に、人を啓發し、警戒するを目的とせりき。現に其の傑作『スベクテートア』の如きは、大不列顛領外へ醜徳と無知とを驅逐するを主意として發せし雜誌なり。さるからに、アチソンの論文は、一として修身齊家の訓言ならざるはなく、温和なる嘲世諷俗の文字ならざるはなし。彼れは野を憎みて雅を愛し、利慾を斥けて義務を獎勵せり。されど其の論ずる所、詮ずるに、悉く現世的、實際的にして、曾て幽遠深遠なる能はざりき。其の宗教思想の如きも、また殆ど俗臭を脱

する能はずして、屢々未來世を語るも、曾て現世間の幸不幸を忘れざるなり、要するに、未來を餌として現世の善行を奨誘せんと力めたりしに外ならざるが如し。彼れは白はく、今世に於ける人の務は知るにあらざして行ふに在り。其の實踐躬行を旨としたる、如何に儒學の旨に似たるかを見るべし。又曰はく、

哲學を天上帝より取りおろして人筈に扶植したるは我が力なり、ミソクラチーズは云へりしが、我れは又その書齋、圖書館及び大學校より取りいだして普通人士の茶席、酒席に移したるは我が力なりといふを憚らず。

と、眞に然り。テイヌは此の點よりアヂソンの思想の高からざるを誹りたれども、俗を誨ふるを目的としたる通俗雑誌の記者としては、蓋し已むを得ざりし所ならんか。テイヌは曰ふ、アヂソンの修身論は、道義をして一種の流行物とならしめ、是れ瑣事にあらざると、こは其の通俗の諷戒の當代に尠少ならざる效ありしを稱するなり。

アヂソンの散文家としての盛名は、近年に至るまでも英米の文壇に轟き、隨うて『スペンテートア』の功績は、殆んど悉くアヂソン一個人の功績の如く見做され、其の信友たり、同輩たりしサーリチャード、スチールの文名は、爲に蝕盡せられたる觀ありし

が、近年に至りて批評壇に種々の反動起こりしと共に、スチールの文名大に揚がり、今の批評家中間、アヂソンを抑へてスチールを揚げ、前者の筆は洗練なるも、彫琢に過ぎて巧に失したる跡あり、スチールの文の瑕疵あるも、眞摯爛熳、天真のまゝなるに如かず、と評する者あり。げにや、アヂソンの文は雅健なれども、自然と洒脱とは、或はスチールに一步を譲るべく、而して其の警拔と創新とに至りては、遠く左に語らんとするスヰフトの下にあるべし。

或は曰はく、アヂソンが文章の大いに見るべきに至りしは、彼れがスヰフトの『捕物語』を熟讀したる後ちにありきと。或は然らん。彼の奔放自在の想像を馳せて滑稽諧謔のうち、諷刺辯難を擅にする一跡は、正しくスヰフトの創始に屬す。

當代の最も驚くべき人物として、又最も創才ある文豪として、雷名を後世に傳へたるダナサン、スヰフトは千六百六十七年(我が朝靈元天皇の寛文七年、荻生徂徠二歳、新井白石九歳)に生れて、千七百四十五年にみまかりき。(我が朝にてはこれより三十四年を経て平賀鳩溪歿したりき。)スヰフトは或は大愛蘭士愛國家など稱せらるれど、其の血統の上よりいへば、同國の首府ダブリンにて生れたりし一事

の外は、愛蘭土に何等の縁故もなく、父母共に英國の人なりき。スヰフトは不幸にして、其の出生前に父を失ひ、生まれて幾程もなきにまた母に離れ、叔父某の手に養はれて生ひたち、やゝ長じてクヰリンなるトリニチトリニチ大學に入りたりしが、數學の成績あしかりしかば、四年間修學したれども、パチエロアパチエロアとなること能はず、更に三年の間學を修めて、辛くも假得業生たる許可を得たりき。一千六百八十八年、其の叔父をも失ひければ、母かたの縁者にして時の政治上に勢力ありしサー、ウイラム、テンプルが邸に寄食せりき。そのころ、希臘の詩風に倣ひて、若干の韻語を試み、所謂“Pindaric Odes”四篇をもつして、其の親族にして當代の詩宗たりしドライデンに示しけるに、ドライデン之れを一讀して斥けり。爾來スヰフトはまた敢て詩に熱せず、専らその心を教會に向けたり、心竊かに監督長(大僧正)の地位を得んことを望みたりしなり。已にして其の主テンプルと善からず、乃ち去りて愛蘭土に赴き、コノアといふ處の牧師職に在りしが、不如意漸く加はりて、衣食の資にすらも窮するに至りしかば、止むを得ず耻を忍びて英國に歸り來り、罪を謝し、憤を吞んで、再びテンプルが邸に寄食せしが、然ゆるが如き功名心を包みたる自尊傲慢の心は爲に

益、平なる能はざりき。然るに後幾ばくもなくテンプル病逝するに及びて、幸運漸く廻り來り、スヰフトは圖らずも其の遺産の分與を得て、幾分か生計上に便益を得たり。しかのみならず、判官バークレー卿の侍僧に擧げられて愛蘭土に赴くに及びては、邸地及び莊園をも給せられ、其の名もまた漸やく世人に知らるゝに至りたり。又一千七百〇一年にはドクトルの學位を得たり。其の政治論者として公生涯に現れ、種々の政治論及び諷刺文に一世を驚倒せし仔細の事實は、今こゝに敘することをお省き、只其の傑作二三に就きて其の作家としての特質と、其の憎人主義の片影を窺ふべし。彼れが壯年の傑作は“Fable of a Tub”と“Battle of the Books”となり。但し二者共に匿名の出版なりき。

スヰフトが憎人主義は、夙に其の幼時に端を發し、其の寄食時代に發達し、其の失望と不遇とによりて増長し、遂に甚だしき狂暴と残忍とに流れたりしが、はじめて政治論壇に現はれしころは、比較的にいへば、彼れが一生の得意時代にして、才思想像は沸くが如く、識見はた方に成熟せる時なりしかば、彼れの本性を窺ふべき作は却りて此の頃の著述にあるべきなり。たゞへ其の偉大なる特質は、當時の諸著に於

いでは見るべからずとするも、其のさすがに本来の悪魔にあらずして一面愛すべき品性をも具へたりし證は、此の第一期の作に於てこそ徴すべきなれ。

『桶物語』

『Rule of a Tub』はスヰフトが傑作の随一なり。老後、みづから此の著を

評して曰はく“Good God! what a genius I had when I wrote that book!”嗚呼、我れは何等の秀才なりしぞや、彼の書物を物せしころには。評し得て的當なり。まことに是れスヰフトが才氣の旺盛せりし時の作なれば、讀む者其の落想の斬新なると其の筆致の輕妙なると其の諷刺の深刻なるとに感歎し、一たび之れを繕く時は卷を措くに忍びずして轉、其の短簡なるを惜まんとす。此の書は種々に分段せられて、説話間、岐路に入りたれば、其の實物語と名づけんよりも、むしろ一種の論文とも名くべきものなれども、本来諷刺を主腦として作りたる寓意譚なるがゆゑに、桶物語とは名けたるなるべし。桶物語とは當時水夫の間に鯨魚を避くる爲に桶を投ずるのならはしありしに因めるなりとぞ。按ふに、桶は即ち此の論文を指し、鯨は暗に當代に瀰漫したりし宗教上の懷疑主義を指し、而して本船其の物は時の英國正教會に比したるなり。蓋し、スヰフトは此の、小桶を正教會の爲に投じ、よりて以て其

の歡心を買ひ、鯨ならぬ監督長の榮職を漁獲せんと期せりしなり。物語の本文は第二段よりはじめれり。其の發端の大意に曰はく

一父あり、其の死ぬるや、其の三子ヒーター(羅馬教會に比す)マルチン(英國教會に比す)及びジャック(背國教徒に比す)に遺言して、其の家産を遺したり。然るに此の三子、世の流行に動かされて、おの／＼ほしいまゝに遺言の義を解釋し、遂には悉く家風を破り、三様の服装、三様の生活、相争うて止むこゝなし。其の中尤も穩當なるはマルチン、云々。

基督聖教の正旨を老父が遺せる衣服に比し、三種の教派を三兄弟に作り做し、其の特殊の性行を叙して、暗に三教の長短を評する所、奇想百出、滑稽滑稽が如く、筆鋒銳利、或は羅馬舊教會を罵倒し、或はカルビン宗派を嘲殺し、兼ねて全社會を諷刺し來たる、眞個有數の奇著といふべし。或はかゝる作を名けて諷刺的戯文とも名づくべし、文章はあくまでも古物語の體を模して嚴肅なれども、旨意は悉く嘲諷なればなり。但し、此の『桶物語』の妙は、其の實本文たる寓意譚其の物にはあらずして、むしろ著者の所謂岐路談にあり、こは實にあらゆる當時の専門家學者輩を諷刺冷嘲したるものにて、明かに後、ちの『ガリゾー巡島記』の先驅なり。而してこの書の出版せられしは一千七百四年のことなれど、その脱稿せしはそれより七年前なりきと

いへば第十八世紀の散文學の門戸は、まさしくスヰフトの手によりて開かれしかの觀あり。

『書籍の戦争』"Battle of the Books"もまた同じころの戯作にして、こは其の主ウ、ルヤム、テムプルの爲に著し、ものなり、即ち文學上に於ける古人と今人との優劣に關して當時の文壇に一大閑争論の起こりし時、例の得意の筆を揮ひてテムプルの説を辯護し、古人を褒め、今人を嘲りて此の作をなせり。前の『桶物語』に比ぶれば、其の旨味幾段か下りたれど、諷嘲の筆の妙はこゝにも見るべし。

さて、上にも已にいへる如く、スヰフトが半生の大目的はひとへに監督長(大僧正)の榮職を得んとするにありけるが、伴の『桶物語』の銳利激烈なる諷刺は、八面に敵を襲し、羅馬教徒、背國教徒はいふも更なり、彼れが力めて其の歡心を得んと欲せし英國教會の僧官すらも多少の悪感を抱くに至りしかば、其の宿望は遂に水泡に歸し、僅に愛蘭土なるセント、バトリック院の副監、牧師たるに甘んぜざるを得ざることゝなりぬ。按ふに、是れもスヰフトをして憎人、怨世の念を増長せしめし一因なるべし。さてまた政治上にては、はむめは時の在野黨、即ち民黨に左袒し、そが爲に筆を揮ひ

しことも屢なりしが、中ごろ變心して専ら保守黨、在朝黨を助けたりき。これ皆其の功名心を満足せしむるの階段を求めしに外ならざれば、主義として何等の確守する所あるにあらざりき。而も其の政府攻撃の筆の激烈なる、眞に驚くべきものありしなり。彼の愛蘭土國の爲に、ドレーヒヤといふ假名にて、七篇の書翰牒の論文を草し、之れをダブリンの新聞紙に掲録せしめて、一世の視聽を聳動せしが如きは、其の一例なり。こは新銅貨の發行に反抗して愛蘭土の利益を擁護せし有名の論文にして、其の諷刺冷酷を極めたり。愛蘭土の民心爲に甚しく激昂し、一時はスヰフトを其の守護神の如く崇めきといふ。其の頃スヰフト其の知人なにかしに謂つて曰はく、我れ若し一指を擧げば、英の内閣は粉塵とならんのみと、而してこは假空の大言にあらざりけりぞ。

スヰフトが眞の傑作は『ガリヴァー巡島記』なり。こは一千七百二十四年より同三十七年に至る十三年間に成れるものにて、其の五十七歳の時に着手せる作なり。此の著は、シウの評したる如く、人間全体を諷刺したる廣大の作なり、固より私憤怨の爲に個人を攻撃せる形跡もほの見ゆれど、今日の讀者より見れば、此の著

の面白味は主に其の全體の諷刺にあり、趣くとも人間の暗黒面は常にかくの如く見らるべしと信ぜらるゝ點にあり。換言すれば『ガリヴァー巡島記』は、恐らくは長永に除き去る能はざるべき、我が人間界の醜惡陋穢なる方面を餘蘊無く描破したる作なりと評すべきなり。之れを一種の小説として見れば其の寫實的結構及び其の寫實的狀寫の筆の周細精緻にして、殆ど一毫の微をも遺さざるが如きは下に小説家の章下に語らんとするデフォーが『ロビンソン・クルーソー』と伯仲の間なり。其の文辭の質樸平淡にして冷靜なるところも、また頗るデフォーの筆に似たり。但し、デフォーは、あるらしき事を多少實驗を材として、げにもあるらしく書きいだしたれど、スウィフトは世にあるまじきことを例の深刻なる想像によりて、げにもあるらしく寫し、いだせり、兩作家の技の一ならざるは、之れによりて見るべきなり。

『ガリヴァー巡島記』は前後四篇より成れり。其のうち、身長僅かに六寸弱の人種の棲める小人島の巻と、身長六十尺以上の怪物の棲める巨人島の巻とは、人間界の事物例へば、官爵、名利等の如何に些屑陋劣にして取るに足らざるか、及び人間以上の物の目より見れば、あらゆる人間の行爲、智力上及び体力上の諸行爲の如何に憫笑すべ

きものなるかを例の奇想天來の筆を以て縦横に諷刺せるものにして、二者共に同一諷刺なれども、其の諷刺の鹽梅は、さながら望遠鏡を順逆の二途に利用して山水の遠近濃淡を察すると一般の手段によりて、或は人間を優者として見せ、或は人間を劣者として見せ、或は大にし、或は小にし、以て人間の眞面目を發露し盡せるなり。さて、第三篇は、飛鳥の巻なり。こは専ら哲學者、科學者輩を嘲倒したるものにて、有名なる Langens 大學の記事の如きは、ルシヤン、ラフレ等の作意に負ふ所も趣からずといふ。さりながら、此の巻は、四篇中の劣作なるべし、諷刺や、荒みて、淺露なる戲謔に流れたればなり。尙此の巻の中には他の種々の鳥巡りあれど、くだくしければ、爰には言はず。第四篇、フーインム國の巻 (Houghlins) 即ち賢馬國の巻は、スウィフトの特質と十八世紀の暗黒面とを知らんとする者の是非に一讀すべきものなり。此の鳥國に棲める人間めく動物を (Yahoo) といふ、是れ明かに作者が滿腔の憎人主義を母として人間の醜惡を代表せんが爲めに生まれたる怪物なり。恐らくは此の一篇は所謂宗教家者流の殆ど正讀し得ざるほどに慘刻を極めたるものなり。我が『和莊兵衛』『夢想兵衛』のたぐひは、いふ迄もなく此の『巡島記』のあらずぢ

を長崎あたりの和蘭人などより耳聞して案を構へたるものならめども、其の根柢の主意は、此れと彼れと雲壤の相違あれば、到底日を同うして語るべからず。また我が國の評者のうち、或はスヰフトを鳩溪に比し、スヰフトの實かに大なるを認めながら、尙二者の文品を兄弟せんとする者あれど、これもまた失倫の月旦なり。スヰフトと鳩溪とは、甚くとも文致の上に於ては、晝夜の差別をなす者なり。前者は嚴肅にして後者は戲謔なり、彼れは澁面にして此れは冷笑なり、彼れは大氷海の如く、此れは濁れる河浪の澎湃たるが如し。

スヰフトは壯より腦病になやめりしが、一千七百四十一年以後持病漸く激しくなりゆきて、竟に同四十五年に逝りぬ。死前三年間は絶えて物いひしことなく、さながら意識なきものゝ如くなりきといふ。絶望と怨憤との間に其の心狂ひたりしなりけり。

エドモンド・ゴッス氏曰はく、十八世紀前半の偉人たるスヰフトは、後半の偉人デジョンンよりも偉なり。彼れは第一流の創新を有す。彼れの性質は炎炎たる猛火の如し、これに近づくものをして同じく燄を擧げしむるか、さなくば彼れが火力にて他

者の光を消失せしむるか、の二途あるのみ。(中略) その怒るや殘忍暴戾なると遙かに人性の上に出で、その無心なるときは、さながら猫兒の媚態するが如く、その戯謔するや虎兒の無邪氣なるに似たり。(又略) 彼れは當代第一の薄倖兒、絶望家にして、又當代第一の偉人、名士なり。彼れは悉く怪訝すべく、殆ど描倪すべからず。彼れは予盾の塊なり、世界の好奇心の目的物なり、多數人の畏避する所、少數人の熱崇する所と。評し得て餘蘊なし。本文に叙する所、彼れの生涯を悉さず、讀者恐らくは其の和らぎて媚態する由縁を解せざるべきか。此の怖ろしき悪魔王が、前後二佳人に戀愛せられ、如何に珍らしき家庭の悲劇を経験せしかは、宜しく彼れが一十七百七十年より同十三年に至るまでの私事を記せる“Journal to Stella”を始めとして、ポイル、スコット、クレイク等の詳傳に就いて之れを知るべし。アヂソン、スヰフトは十八世紀前半に於ける時文壇の驍將たると同時に、所謂小冊子の論文家の最先なるもの、錚々として、下に語るべきダンエル、デフォーとならべ稱せられ、或は羅馬の三議政官に對比せらる。すなはちアヂソンはレピダスに比すべく、スヰフトはアントニーに比すべく、デフォーはオクダギヤスに比すべし。

第三章 前半期の散文家

三九六

ス#フト、アゲソン以外の諸家——スチール——「タートル」——「スペク
テートア」——スチールの功績——シャフツベリ伯——マンドギル——
パークレー——其の他の論文家

當代散文の名家はアチソン、ス#フト、デフォーの外に、スチール、ベントレー、ミッドルト
ン、アーバズノット、アッターベリ、ボーリングクアローク、バトライ、シャフツベリ伯、マンドギ
ル、パークレー等あまたあれど、一々精説する能はざれば、こゝにはスチールより始
めてその著作と文体との概要を述べ、デフォーの事は章を改めてその寫實小説の端
緒を開きし事を述ぶると同時に語るべし。

リチャード、スチールはアチソンと同様の方面に於て、アーン女皇朝の散文壇に
一世の指導者たりし者なり。アチソンと同じ年に生まれて、一千七百九十二年に
歿しき。幼時はチャーターハウスにて、アチソンと同學の友たりしが、オックスフォード
の大學に入るに及びて、二人はその科を異にし、アチソンはクライストチャーチに入
り、スチールはマクダレン大學に入學しき。二十四歳のころ、女皇メリの葬儀を歌

Richard Steele

ひたる歌を作して某公爵より年金を得たりしことあり。一時は船長となり、また
劇の作者ともなれり。「The Lying Lover」「The Tender Husband」等の喜劇を作せしが、
「The Tender Husband」最も見るに足る、或はアチソンの添削を経たりしかも知るべ
からず。彼れはアチソンの紹介によりてス#フトと相知るに至りしが、三者の交
情はむめは甚はだ厚かりき。一千七百九九年、アチソンの條下に語りたる隔日新誌
「タートル」『The Tatler』を發行す、アチソン、ス#フト等その寄書家たりき。この
新誌は在野黨の機關にして、主として政治的なりしが、家庭、娛樂、詩歌、學術、内外時事、
雜録等の諸欄を設け、社會を教導するを其の表面の目的となせりしかば、一面今の
家庭雜誌に似通へる所ありき。二百七十一號までにて廢刊し、彼の「スペクテート
ア」代りて出でき。是れより先き、ス#フトはその政見を變更せしかば、スチールと
の友誼全く破れ、ス#フトは「タートル」を指して「世界中最惡の同伴」と罵るに至り
たり。

「スペクテートア」はアチソンとスチールとの設案に成り、ミスター、スペクテ
ートア(傍觀子)と呼べる紳士を中心として、サー、ローシャー、デカブリなどいふ人々が

一俱樂部を組織して時事を論評すといふを根本の趣向として、綴り初めたる、後の雑誌めく新誌にして、一千七百十一年三月より翌年十二月まで、日刊の號數五百五十五に及ぶまで、よく一世の視聽を聚めたりき。この中、アチソンは二百七十四部をもつし、スチールは二百三十六部に筆を執り、ジョン・ヒューズといふ人（一六七七—一七二〇）“The Siege of Danvers”といふ悲劇の傑作ありは十九部、ポープは一部を編みき。勿論、此の他にも寄書家はあまたありしこと、知るべし。翌年、スチールは更にまた『ガーヂヤン』“The Guardian”を發行せしが、スウィフトとの政見上の争ひいよく、烈しくなりしかば、遂にこれをアチソンに委ねて、自らは進んで議院に入り、かくして直ちに輸贏を決せんと試みしも、却りてスウィフトに破られて議院を逐はれ、再び筆を執りて二三の新聞紙を起し、之れに盡瘁せりしうち、ホイッグ黨凱歌を揚げ、新王ジョージ一世の代となり、アチソンは擧げられて尙書となり、スチールもドローリ、レイン座の管理者となり、且つ士爵に叙せられて再び議院に入りぬ。後ち數年にしてアチソン歿し、それより以後はスチールの著作に見るべきものなく、政治上にても何のしいだしたる事なく、漸次窮迫に陥り、十年の後、其の亡友の後を

追ひき。

スチールの性質は、その美なる側面を見れば、よくアチソンに似て、更らに一段その度を強めたるが如き趣あれど、激するときには、屢、理否の辨へなくなりて事に熱衷する癖ありしかば、兎もすれば失敗多く、アチソン程に圓滑なる生を了ふる能はざりき。さりながらこの熱心專注の性質は、彼れをして事物の缺點を見ては之れを勿論にする能はざらしめ、種々の改善的企業に従はしめたり。要するに、アチソンは成案の人にして、スチールは發企實行の人なりき。スチールはアチソンよりも毎に一步づゝ先きだちて事業に着想し、アチソンを促して之れを修正せしめ、さて共にその業を實行せし觀あり。彼れの時弊を觀るや、おほむぬ的中し、その救濟の方また概して宜しきを得たりき。當時、社會の風紀壞亂し、其の娛樂や、好尙や、浮靡荒淫にあらざれば、殘忍殺伐、世を擧げて風雅、人情の何物たるを解せず、貴公子、貴女にして目に一丁字なきも恥とせず、眞風流を談じ、眞詩文を語る者あれば、却りて迂腐の人として撥斥する傾ありき。事態の斯の如くなりし時、スチール謂へらく、かゝる士女を教導するには尋常一様の教訓を以てすべからず。彼れ等は説いて理論

に亘れば解する能はず、戒めて嚴なれば堪ふる能はざる薄志の徒なり。彼等は今や宴樂のたゞ中にあり、到底澁面を以て臨むべからず。よろしくその遊戯せる時を利用して、滑稽戲謔の顔色と言語とを以て次第に其の心理に潜入し、以て内部より感化を行ふべしと。かくの如くにして『タトラー』出で、斯くの如くにして『スベクタートア』出で、勘からず一世の風化を助けたりき。

スチールは、女思豊かにして、才氣溢るゝが如くなりしかば、其の説く所よく俚耳に入れりき。さはれ、其の喜ぶべき快活も、過ぐるときは浪靡に失し、威儀を壞り品格を損ずるに至れること間々あり、而も近世の評家等は、大抵之れを咎めずしてその天真の流露せるを稱す。

當代の論壇には、以上の諸家の外、尙あまたの散文家ありしが、皆期せずして平易通俗といふ點に重きを置けり、是れ實に十八世紀散文の特質として記憶すべき要質なり。固より人々によりて特色はありしかど、尙或はスヰフトに、或はアヂソンに、或はデフォーに、或はスチールに、多少其の摸範を求めたりし概あり、所詮此の四家の外に出づることを得たる者は殆ど空し。

リチャード、ベントレー Richard Bontley(一六六二——一七四二)はケムナブリヂ大學の出身にして、古文學に精通し、同校にて神學の教授となり、又そのトリニチー、コレッチに學長たりき。著はす所“Horace,”“Terence,”“Phaedrus,”及び“Milton,”等あり。文致は典雅明暢なり。『フィドラス』は其の傑作、『ミルトン』は其の悪作なり。

コンヤース、ミッドルトン Conyers Middleton(一六八三——一七五〇)はケムナブリヂ大學の圖書館を掌りて古文學に通じ、論壇に立ちてはベントレーの反對者中最も有力の人なりき。著書の中にては“Life of Cicero,”最も名あり。その他、宗教の歴史に關する著述若干あり、就中“A Free Inquiry into the Miraculous Powers by the Christian Church,”と題せる一書の如きは、近代に所謂合理信仰派の前驅とも見るべきものなり。文致の平明は當代第一に位せり。

ジョン、アーバンスノット John Arbuthnot(一六七〇——一七三五)は忠實なるトリー黨にして、ロンドンにて女皇アーンの侍醫となり、スヰフト、ボルフ等とも親しく交れり、中にもスヰフトとの關係は、スヰフトの月球(小スヰフト)と呼ばれたりし程にて、よくスヰフトの光を受けて反映せりき。その傑作“History of John Bull,”及び

“The Memoirs of Scribblers.”等の如きは諷刺の痛快なる點間々スギフトと甄別し難き程なり。

フランシス、アターベリ Francis Atterbury (一六七二——一七三二)はウェストミンスターWestminsterの副監牧師にして華麗なる説教文に長じ、且つ書簡をよくし、批評にも名ありき。其の文は、アチソンAtchisonを學びて未だ至らざるものなり。

子爵ボリーリング、ブローク Bolingbroke (一六七八——一七五一)は、少壯にして議會に入り、辯に於ては有名なるピットPittをして、英國前代の雄辯家中の最も秀でたるものと稱嘆せしめし程の名家なりしが、文學は、其の政治上に失敗し、逆境に陥りし後の餘業なりき。“Letters to Sir William Wyndham” “Ideal of a Patriot King.”等は其の名著なり。其の文章は、修辭上の用意の周細なるを特質としたれども、送迎頻繁なる日常の些事を評論するに修辭の餘り濃厚なるは却りて悦ばれざるためしにて、作者の苦心なかば以上は効なかりき、さりどてかゝる修辭法を要する程の題目は當時の出版物に稀有なりしかば、利器を用ふるに所なかりしなり。所詮彼れは不幸なる時代に生れ出でたりき。

Earl of Shaftesbury

シャフツベリ伯 (一六七二——一七三三)は名をアンソニー、アッシュレー、シャーパー Anthony Ashley Cooper とし、幼時は哲學者ロックLockの手に教育せられ、長じて後ちも大學に入りしことなく、廣く外國を漫遊し、歸國の後ち下院に入り、又上院にも入りしかど、政治上に於ては別に頭角をあらはししこともなかりき。その著述は集めて三冊あり、題して “Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times.” と云ふ。其の思想はブレトBretの系統を傳へ、頗る創見に富み、殊に宇宙の大調和といふことに關しては一種幽玄なる觀念を有せりき。又文學の批評に於ては、久しく一世の師表たりし趣あり。蓋し、伯は、教育は最も完全にして、好尚は最も粗野なりと稱せられし世の大學出身者にはあらずして、前にロックの直示を受け、後に大陸の風物に接し、其の至醇なる文藝、美術に親炙して、慤からぬ感化を享けたりしかば、伯が倫理說、美學說は、當代及び次代の學者、詩文人に感化を及ぼす所少なからざりき。伯が文章の巧緻精鍊、また頗る翫賞すべし。其の詞致は、その思想に似て、莊重また瑰麗なりき、ゴッス氏は、種々の點に於て、伯はオーガスタス時代のラスキンなりと評せり。

さて伯がフントの善觀説に反抗して一種の惡觀説を利己的快樂説の立脚地より唱へいだし者あり之れをバーナード・マンド井ル（一六七〇—一七三三）となす。

マンド井ルはもと和蘭の人なりしが、少きよりロンドンに移り住みて醫を業とし、夙に英文にて著作を試み、一千七百五年にはスヰフトの筆法に倣ひたる諷刺詩賦の韻語 “The Fable of the Glumming Hive” 一篇を作りぬ、こは或生計裕かなる蜜蜂の一群が一朝道徳上の訓諭を聽いて之れを實踐躬行するに及び遂に一類の不利を招き、悉く自滅するに至りし旨を叙せるものなり。かくて九年を経て同書を再刊するや、彼れは更に長き散文の解釋を附して、其の利己的惡觀説を主張したりき。文章は甚だ蕪雜ながら所信を吐くに大膽なると諷刺滑稽の富贍なるとはその長所なり。然れども平凡の常識を以て人世の半面を觀察し、これにスヰフトの冷酷を交へたるまでのものなれば、論旨淺薄にして、到底何れの點より見るもシヤフツベリの敵たるに足らざりし者なり。

ジールジ・パークレー George Berkeley（一六八五—一七五三）は名聲シヤフツ

ベリをも凌ぎたりし論客にて、メアリンのトリニチ大學の出身なり。久しき間彼の校に留まりしが、一千七百十三年ロンドンに出で、スヰフトと相知り、大陸を漫遊し、歸國の後ち副監收師となり、さて亞米利加に渡航し、歸りて監督となり、職に在ると十八年にして歿しき。著作中名高きは、一千七百三十一年に出版せし “Alciphron” を始めとして “The Theory of Vision” “The Principles of Human Knowledge” 等なり。“Alciphron” は當時の諸學說、シヤフツベリ、マンド井ル及び自然神教説の弱處を破したる問答録なり。“The Principles of Human Knowledge” はロウクの經驗説を更に一段推しひろめて人に生具の思想なき由を極端に論じたるものなり。パークレーは修辭に巧みにして其の文致の多様なりしこと實に當代に冠たり。その諷刺に於けるや、アチソン、スヰフトと肩を比ぶべき技倆あれども、彼れは敢て諷刺の一方に依倚することなかりき。彼れは奥妙の理を平かに説き、抽象の論をうるはしく述ぶるの技を有しき。彼れ狀寫すれば、その細密なることさながら畫圖の如く、彼れ對話を用ふれば、その自然なること恰も小説の如し。要するに、彼れが文筆は殆んど端倪すべからず、況んや模倣することをや。こゝに於て、その妙文もたゞ一代の異

彩たるに止まりて、後ちに一派を遺す能はざりしは惜むべきことなり。

その他の散文家には、ベンチャミン・ホーダリ Benjamin Hoadly (一六七六—一七六一) サミュエル・クラーク Samuel Clarke (一六七五—一七二九) 監督ヤコブ・ブートラー Joseph Butler (一六九二—一七五二) 等なり。其の中ブートラーには "Analogy of Natural and Revealed Religion" "Sermons" 等の名高き著述もあれど、今はすべて省きて説かず。

第四章 アレクサンダー・ポープ

詩歌の擬古時代—アレクサンダー・ポープ—生涯—著作—『批評論』—『The Rape of the Lock』—『英訳イリヤッド』—『英訳オマッセー』—『人間論』—『愚人物語』—ポープの長技

十八世紀の前半は擬古詩全盛の時代なり。當代の詩人は、主として重きを形式に置き、豫め嚴密なる詩格を設定し、専ら古詩に擬して作せしかば、其の作の相似たることさながら同模型より成れるが如きもの少なからず。さなきも、詞花言葉の巧を競ひ、只管修辭法の正しからんを欲し、古格に背くまじと勵めたりし點は、此れ彼れ殆ど一轍たり、故に擬古時代の詩歌の特質は、其の一を精檢して以て他の百千を類推するに難からざるなり。而して千種万様の剪綵の間、殊に色彩の燦然たる者

Alexander Pope

はポープが彫琢萬回の詩篇なり。されば彼れが詩の如何なるかを知悉するを得ば、所謂擬古時代の詩學と其の諸作との特質形狀は之れを知るに庶幾からんか。

アレクサンダー・ポープは一千六百八十八年五月二十一日(我が朝元禄元年)柳里恭の生誕前十八年(英國首都倫敦ロムバード街)に生まれき。父はリチン商にして家計はゆたかなりき。ポープ生まれて矮小、加ふるに駝背なりしかば、長じて後も身の長四尺に過ぎざりき。齡やう／＼五歳なりしころより既に能く詩を解せり、八歳の時家附の僧某に隨ひて羅典、希臘の文法を學びて羅典の名家スタチウスの詩一節を譯しき、蓋しスタチウスはグ्रीシユルと共に彼れが終生愛好せりし詩人なりき。十二歳、更に一の脚本めく作を物しき、其の中の人物には『イリヤッド』中の英雄、アキリーズ、ヘクトル、ユリシーズなどいふ人物あまた見えたり。ポープが初めて其の作を世に出ださんと思ひ立ちしは、外交官ウィルヤム・トラムボルと地主ウォルシとの德憑に因るといふ。トラムボル嘗てポープの詩を見て激賞して曰はく、余は他に君の如くミルトンにも匹敵すべく思はるゝ詩人あるを知らずと。ウォルシもまた嘗て曰はく、グ्रीシユルといふともポープほどの年ばえに

ては、かく巧に詩を作り得ざりしならん」と。

一千七百十年、ポーラ倫敦に出で、當時の改進黨の諸名士と交を結びぬ、蓋し、商賈も、農夫も、學者も、詩人も、相會すれば必ず政治を談ずること、當時の一流行たりしなり。翌年、有名なる『批評論』といふ詩篇をいだしぬ、デセフ、アヂソン之れを『觀察者』の紙上に賞せり。かくてスチールの紹介にて初めてアヂソンと相知りぬ。一千七百十二年、其の傑作の隨一『The Rape of the Lock』を公にせしに、世評頗る高く、其名俄然として全都に喧傳せり。翌年また『ウィンツァの森』といふ一篇を著して、デヨナサン、スヰフトに知られ、爾來二十有五年、二人の間、信書の往復絶間なかりき。同じ年スヰフトの紹介によりて、オックスフォードの公爵ロバート、ハリーリー、男爵ポーリング、アプローク、ロチェスターの監督アツターベリー等と交り、又詩人にして、巴里の公使を兼ねたりし、マッシュュー、ブライオール、醫師にして著述家を兼ねたりし博士アーバースノット、並びに詩人兼脚本家ジョン、ゲイ等と交を結びき。一千七百十五年、其の名篇『英譯イリヤッド』を世に出だしぬ。其の第五卷を譯出せしまでに、無慮九千磅の報酬を得きといふ、以て其の世に行はれしことを想見すべし。同じ頃オックスフォード

の人にしてアヂソンの友なりしトマス、チックカーといふ者、同じく『イリヤッド』の第一卷を翻譯して世に出だしぬ、而してアヂソンは、其の『觀察者』の紙上にて、いたく之れを稱揚せしかば、ポーラは己が翻譯を貶せられたらん如くに感じて、いたく怒り、大にアヂソンを誹謗し、これより相善からず。一千七百十七年、ポーラまた『エロイサよりアペラルドへの書翰』『不幸なる淑女を憶へる挽歌』の二篇を出版せり、此の二篇はポーラが人間に對する同情の度と其の抒情詩人的技倆とを窺ふべきものにして、短篇なれど頗る注意の價あり。ゴッス氏はこれより推論して、若しポーラにして一世紀前に生れたらば、劇詩家としても相當の位置を得たりしならんといへり。此の年其の父チスウィックにて死去りければ、翌年其の母を伴うてトキケンハムといふ處に移りき。こゝにて『イリヤッド』の翻譯を大成し、更に『シェイクスピア全集』の出版に従事せしが、この業はむしろ失敗の業なりき。當時の批評家リ、ヒス、シオポールド詳に此の書の缺點を發きて、きびしく編者を難せしかば、ポーラは燃ゆるが如く怨み憤り、後に彼の嘲罵の詩『恐人物語』といふを著し、折、猛烈なる復讐をなしき。『恐人物語』の中に捕らへられたるは、ひとりシオポールドのみならず、平素ポー

アと相反目せし輩は一人としてポーアが嘲罵の犠牲となりて悪人の仲間入せざるはなかりき。此の昔の出でしは一千七百二十九年の事なり。

一千七百三十三年、ポーアが母齡九十二にて世を去りぬ。ポーアは終身妻を娶らざりしに、十七年前に父を失ひたりしかば、爾後眞實の愛情をもて接せしものは、天下唯一人の老母ありしのみ。彼れは母に別るゝや眞に天涯の孤客となりぬ。彼れの狹量にして狷介なるや、唯一人の信友をだに有せざりしなり。彼れは常に自己の生涯を名づけて、一長病なりといへりき。虚弱多病の身をもて、外は攻守に違なく、内は心火の熄む違なかりしかば、齡五十を過ぐると共に、神心いたく衰へ、形容枯槁して長く命脈を保つべくも見えずなり、一千七百四十四年五月三十日に至りて遂に其の、一長病なりし生涯を脱して、溘然不歸の客となりぬ。遺言して其の屍をウイッテンハムの寺院なる父母の墓畔に葬らしめき。享年五十七。

ポーアが主なる煩惱は、名譽を得んとするにありき。トマス、アノールド曰はく、ス・フトは其の文學上の成功をもて、單に好位地を作らん踏臺とせしに過ぎざれど、ポーアはそを手段とせずして、たゞちに其の目的となしにき、即ち前者の欲望は

權力を得んとするにありて、後者の欲望は名譽を得んとするにありきと。げにポーアは名譽を得んが爲には何物をも犠牲に供せんとしたりき。若し己が名譽を傷けんとするものあれば、武器を選ぶに違なく、奮然之れにもむき、百方防戦に従ひき。テースも曰はく、彼れが筆を取る大理由は、所詮文學上の名譽を博するにあり、彼れは稱賛せられんとを願ふの外、他念なし、彼れの生涯は猶一娼婦の生涯の如し。彼の娼婦や、朝より鏡前に立ちて化粧を凝らし、又他人より挨拶の手紙を受けては、満面微笑を呈しながら、他人に對しては、挨拶を受くるほど、五月蠅きはなし、紅粉は面を汚すに過ぎず、などいふ、ポーアは恰も此の娼婦に似たりと。

才分の卓絶なる彼れの如く、勵精修鍊はた彼れの如くば、誰れか造詣するところ深からざらん。ポーアはいと幼き時にだに習はざる文字をかき寫して、書法を獨習せしほどの稀有の熱心と忍耐とを有しき。其のやゝ長ぜしや、おほそ九年が間は、林中の一茅亭に閉籠りて、潜心四圍の好景に詩想を養ひ、其のかたはら徐ろに各國の佳什を誦しき。實に獨修苦學の力によりて、古代の諸名作を解せしなり。英國の詩宗中、其の最も私淑せしは、ドライデンなりき、擬古癖は既にこゝに胚胎せ

りしなり。加ふるに其の尙少なりしや、其の友ウオルシ彼れを勵まして曰はく、我が國古より大詩人乏しからずと雖も、醇正なる大詩人は尙欠けたり、足下須からく此の醇正なる大詩人たらんことを期すべしと。所謂醇正とは、用語、修辭法等の正しく、詩形上に間然するところなきをいへるなり。ポーブ此の言に感じ、件の目的の爲に精進し、もろくの形容詞、熟語、韻律等の苟も詩形を正うし、調整和諧せしむべきものを集め、それを誦記して腦裡の秘寶とせりき。彼れ一詩篇を草すれば、少くとも二年間は机中に藏し置き、みづからも考へ、他人にも胥り、彫琢万回、殆ど原形を存せざるに至りて世に出だしき。彼れは談話中にて、かりそめにも取る可き語あれば、直に之れを紙に録しき。一想、一語と雖も徒らに逸せしめしことなし。彼れは平生其の枕頭にも文机を備へたりき、夜半思想の浮ぶことあればやがてはねおきて録し置かんためなり。其の腦中は常に作詩上の計畫にて充ちたり、談笑の間とても心中決して閑なるを得ざりき。その刻苦精勵、經營慘澹、おほむね此の類なり。其の詩篇の言々金玉を聯ね、句々錦繡を敷ける、蓋し偶然にあらざるなり。ポーブの著作は、創作、翻譯、併せて三十餘篇あり。其中重なるもの六篇、曰はく『批

評論』曰はく『The Rape of the Lock』曰はく『英譯イリヤッド』曰はく『英譯オヂシ』曰はく『人間論』曰はく『恐人物語』是れなり。其のうち

『批評論』(一千七百十一年出版、ポーブ年二十四)は、ポーブが出世作なり。こはもと首尾の貫徹せる一篇の詩にはあらず、只詩學、文批、批評等に關する隨感を記したるものなり。其の思想は、概してホレリス、アアロー等を祖述せるに外ならず。テ

ィヌは此の作を評して曰はく
是れ甚だ賢明なる教誨を集めたるものなり、而して其の缺點は餘りに平凡なる眞理なることなり、曰はく、決断に先ちて分別回想せざるべからず、曰はく、美術の法則は自然より出づ、曰はく、傲慢、無學、偏見、黨派心、嫉妬等は判断を暗くす。總べて此の類なり。蓋し、ポーブ、ドライデン、アアローなどの時代には、順序よく思想を排列し、且つ明瞭なる辭句によりて、その明白に言ひ表す必要もありしならん、されど今は其の必要去りぬ、吾人は思想を要す、思想の断片を要せず、愚小屋は造られたり、それを充たすべき實物を要す。云々。
ティヌの評は酷に過ぎたり。シィヌは贊嘆していふ、ポーブの此の作、巧緻精妙、而も氣力に乏しからず、而して其の判断は圓熟、其の詞は優美、其の韻律は能く和諧したり、云々。

『レーブ、オフ、ゼ、ロック』(一千七百十二年出版、一説には十四年)の由來は下の如

し。時の貴紳ヒ、ター卿といふあり、アラベラ、エルモア嬢と結婚の約成りけるが一日嬢の熱暈せりしを窺ひて、ふと戯に剪刀もて嬢が愛敬毛を剪り取りし事が原となりて、結婚の約破談となりし一些事あり、ポーア此の事實を捉らへて材料とし天神地祇のいと尊くいかめしきを取り入れて、かゝる些細なる好笑しき事を嚴格高尚なる英雄詩の体式をもて綴りいだしたり、是れ此の一篇なり。其の事實の瑣末なると其の詩体の嚴格なると相照らして、實に稀有の好談柄なり。

『英譯イリヤッド』(一千七百十五年より一千七百二十年迄に出版)はポーアが最も大名を博し、又最も利得を得し著述なり、されど直接又は間接にホーマーの原著を知れる者は、皆モーレル氏の評に左袒せざるを得ざるべし。

こは如何に見るもホーマーが詩の内想、外形を現したるにはあらず、それさにかげ離れたる獨立の著作として見ざるを得ず。かの古文學者ベントレーの批評は至當にして正確なり、曰はく「この作は長詩なり、されどホーマーの作にはあらず」と。げにや、ホーマーの精神も、感情も、境遇も、殆どいづれの點に於ても、ホーマーのさほ直反對なり。ホーマーは其の生涯を戶外に費したりしかば、ホーマーは實際場裏の一市人なりき。ホーマーの用語は無形の思想及び抽象の言辭をもて充ちたれども、ホーマーは無形の事物と抽象の言辭とを受け納るゝこと能はざりき。ホーマーの用語は新約全書の用語のごとく、單純直接に

して、童兒の如し、ホーマー及び其の時代は如何なるものをも直接に名くることを得ずして、常に抽象の辭を以て解説し、又は迂餘曲折して言ひ見すを常としき。(中略)ホーマーの技術は精神より發生したる單純無意識の技術、シェークスピアの所謂「自然其の物なる技術」なり、ホーマーの技術は、單に詞句と巧妙なる語法とをもつて、說話に新しき美と一層高上なる價值とを與へんことを力めたる自識的技術なり。

云々。テーマは冷然として評すらく、ホーマーの『英譯イリヤッド』は俗の好尚に應じたるものなり。英國人は單純なる希臘風の服裝のまゝにては嘆美せざりしならん、彼等は紅粉を施し、飾紐を着けたるを見てのみ満足すべし、これ時様の服裝なればそを着せしむることも必要なりと。所詮、此の著は『イリヤッド』の筋によりてポーアが自由の詩才を發揮せるものと見做すべきなり。

『英譯オデッセイ』(一千七百二十年より同二十五年までの間に出版)は『英譯イリヤッド』よりもまた一層ホーマーに遠きものと思へば當を得たるに近し。ポーアがみづから筆を執りしは、全部二十四巻の中僅かに最初の二巻に過ぎず、其餘はすべてフエンソンとルームとの代筆に成れり。

『人間論』(一千七百三十四年出版)はホーマーが其の友ホーリングブロークに宛て

たる四通の書翰の詩を一束にしたる者なり。第一の書翰は人と、宇宙との關係、第二は人と、人との關係、第三は人と、社會との關係、第四は人と、其の理想との關係、及び幸福の追求に於ける關係を説きたり。根本の思想は其の友ポリーリングプロークに負ふところ多しといふ。抽象の哲理を韻語をもて表白し、而も乾燥無味に陥らざるところポープが技倆なり。斯かる題目を韻語に綴りし理由は、韻語は散文よりも簡潔に思想を表し得るがゆゑ也と自ら言へりき。博士デジョンは評して曰はく、此の作は、天才の卓絶と、想像の華麗と、能辯の力とを見るべき好例なりとす。蓋し、智識の缺乏と感情の庸劣とを、斯くばかり巧に蔽ひたるはあらずと。評し得て皮肉なりといふべし。「人間の適當なる研究主題は人なり」といふ人口に膾炙せる格言は、實に此の篇中の一句なり。

『愚人物語』(The Dunciad) 一千七百二十九年出版、ポープ四十一歳は、前にもいへる如く、小詩人群を罵倒嘲殺せるものにて、其の趣向はドライデンの『Mac Fleanoe』より脱化したるなり。當時有名なりし批評家シオポールドと桂冠詩宗シッパードとは、此の詩篇中の兩主人公なり。篇中諷刺罵詈の最も猛烈なるは文學の女神、魯鈍の命

が催せる競技會にて、書肆が一詩人を捕へんとして競走する一段、群小作家が我れ劣らむと、吠競し、やがて涸中におちいるをかしみ、批評家等が眠を催さで二名家(シオポールドとシッパードを指す)の著を讀まんとして苦しむをかしみ等を叙したるあたりなり。シッパードは此の篇を評して、私情の目的に應用せられたるいみじき天才の最も驚歎すべき最も恐るべき一例外は醜文學筆誅を名とし、内は只管に私怨の犠牲を燒盡し、滅盡し、貪噬するを目的とせる天才的電光の一例なりといひ、トマス、アーノルドは、此の篇中に嘲罵せられたる詩人には、一人として後世に名を残すべきほどのものなし、是れ此の篇の永久に旨味を持続する能はざる所以なり。ドライデンが『Mac Fleanoe』中に捉へたる詩人は、流石にポープが捉へしものよりは高名なりき、云々といへり。テューヌは曰はく、此等の怪文學に比較すべきはひとりスウィフトの著あるのみ、されどスウィフトの著は絶望、怨世、狂忿の餘に出できとすれば、さすがに分疏の途あり、ポープに至りては何の不足なき身をもて、單に文學上の私忿によりて、斯かる怪文學を製作す、彼れはそも神經を有せざりしか、吾曹は之れを讀みて、恰も麗しき花籠の中に泥を盛れるものを見たらんが如き感を生ずと。げ

に、スウィフトは、常に公衆若しくは一團體を對手として嘲罵せしに、ボープに至りては、一として復讐的人身攻撃ならぬはなかりき。

ボープが詩の長所は、其の思想、感情の超凡なる上にはあらで、其の詩形と詞美との巧緻を盡したる上にあり、其の狀寫の巧妙なるにあり。此の點につきては、さしも峻酷なるテイヤダに、ボープは、到底、詩人たるの資格を備へたり、其の詩全體につきてにはあらず、其の断片に於て然るを見るべし。森羅万象、何物も、彼れの筆を借らば寫しがたきはあらず、一鱸魚、一鰻魚を形容して、宛然其の物を見るが如くならしむるが如きは更に言はず、スヘードのクイーン、ハートのキングだにも、彼れの筆に上れば躍然として活動す。云々と評せり。

之れを要するに、ボープは擬古思想の最高潮を代表せりしと同時に、殆ど時の詩學說の全分を其の理想そのまゝに實現したるものなり。彼の佛のフアロー、英のライマー、等一流の詩學論、修辭論を、殆どさながらに實踐し、兎も角も同代の批判家を、して一時其の口を閉ぢざるを得ざらしめしは、彼れが天才の拔群なる明證にして、其の一代に歡迎せられて詩王を以て目せられしこと、偶然にあらざるなり。自負

心の深き彼れは、夙にみづから之れを意識し、詩論に於ても、作に於ても、十八世紀詞壇の指導者たらん者は、佛に在りてはフアロー、英に在りては自家なりと自任せしに似たり。彼れは常にフアローが歩みたりし跡を追うて歩みたりき。貶していはば、彼れはフアローの摸倣者なれども、褒めていはば、終始フアローと頡頏し、競走せし趣あり。其の着眼も一なれば、其の詩論も一、其の作の種類までも相似たりき。フアロー、*"L'art Poétique"*を著して、詩中に詩法を論ずれば、ボープも直ちに之れに擬して、*"Essay on Criticism"*、即ち韻語の『批評論』を著しき。フアロー青年の詩人に誨へて、先づボーマーを學べ、といへば、ボープもやがて專念して『*イリヤード*』、『*オヂッセー*』を英譯しき。フアロー戲謔の詩筆を弄して、*"The Lutin"*に譽れを殘せば、ボープは直ちに之れに摸して、*"Rape of the Lock"*を綴りぬ。其の他、一々に比し來れば、ボープが一著、フアローに負はざるもの殆ど稀なるが如き概あり。即ち、思想に於ては、ボープは、明かにフアローの徒弟なり、小フアローたるに過ぎざりしなり。而も其の思想に於て小フアローたりし所以は、修辭上の技倆に於て出藍の實と譽とを得るの妨げとはならず、しゆゑに、ボープが詩調は、凡そ三十年間、英國の詞壇を風靡した

りき。其の擬古的法格と其の纖巧なる彫鏤とは、一面弊を醸し、には相違なければ、他面當代及び後世の詩學、修辭法に貢獻せし所趣からざりしなり。さればこそ、テームもポープが修辭的技倆を褒めて、これ擬古時代に適當なる技にして、普通思想を順序よく言ひ表はすべき方法なりといひ、且つ曰はく、當代に於ては英佛兩國民とも至高なる哲學的概念と淺近なる具象的細事との中間に位する普通平庸の理を捉へ來たるを第一の能事となし、かくして今の所謂常識の素を造り、巧に區畫を設けて此の種平庸の概念を排列し、整理し、發展せしめ、對應せしむるを是れ力めたりき。此の修辭的研鑽は、漸く諸作に浸潤し、當代の詩を擧げて不自然なる韻語的散文とならしむるに至りぬ、即ち詩は高等なる談話の一種とはなりぬ。ポープは實に此の種の詩に熟練せりし者なり。此の如き詩的散文に於ては、全世界中、ポープに匹敵すべき者あるを知らず。我がフアローすらも、遂に其の下に在るを免れざるべし。云々」と。以上の諸説によりて、ポープの功過と長短とは、ほぼ想見するに足りぬべし。

第五章 ポープと同代の諸詩人

ポープと其の前後の詩人との關係——ブラックモリアー——プライオアー——
イ——パーネル——ウインチェルシー——伯夫人

アレクサンダー、ポープの詩譽が一世の視聽を震駭したりし時に當り、一方に於ては、模倣者雲の如く起りしと共に、他方に於ては、之れに反抗せんとするの氣運も、陰に萌しつゝありき。されど、それらの事は、便宜上、後の章に譲りて、こゝにはポープと相前後して世に出でし第二流以下の詩人の上を語るべし。その中にはポープの先輩にして、ポープが感化影響を受けたりといはんよりは、寧ろ、其のはじめに於ては、多少ポープを指導するに與りて力ありし名家もあり。蓋し、ポープが圓美無瑕の詩體は、ドライデン以來此等先進諸名家が相ついで開始し來りし所を集めて大成せるものと觀て可なり。

ドライデンよりポープに至る、約三十年間の詩壇に於て、最も有名なりし醫博士
リチャード、ブラックモリアー Richard Blackmore (一六五〇—一七二九)は、オックス
フォードの出身にして、其の作詩の事に従ひしは醫を開業せし後にあり。『王子アー

サー『アーサー王』『チップ』『エリザ』及び『天地開闢』其の他若干の讚美歌、論文等の著あり、其中『天地開闢』は、アチソン及びジョンソンの激賞せし作なれど、近代の讀詩眼を以てすれば、只多少の好修辭を見いだし得べきのみ。取るべき點の乏しきことは他の作もまた然りとす。

マシュー・プライオア Matthew Prior (一六六四—一七二一) は一時は「社會詩の王」と稱せられて名高かりし作者なり。ケムブリッジの出身なり。其の作中、やゝ長篇にして見るべきものは「Alms or the Progress of Mind」及び「Solomon or the Vanity of the World」なるべし。前者はペトララーが詩風と韻法とに依りて作りたる『ヒューチ・フランス』體の冗長なる物語歌にして、後者はホープよりは寧ろドライデンに近似したる『ロイック・カブル』兼『アレクサンドリン』格の諷刺詩なり。共に其の主題の眞面目なるに似ず、風姿は戲謔に流れたり。後者の如きは虚飾を諷刺しながら、スウィフトの如く冷刻なる能はず、ジョンソンの如く峻嚴なる能はず。要するに、プライオアが文壇に貢獻せしは、主として其の短篇の作にありき。其の「Lines written in the beginning of Mezeray's History of France」は作家の頓才と諷刺の才を示し、「Child of Quality」

は其の幼年文學の技倆を表し、「Dawn Hall」は平易輕快なる三脚韻格の効能を證明せり。この詩格出で、以來、從來嚴守せられし、カブレット格の羈絆や、緩となり、十八世紀の詩歌、漸くその律格上の自由を得るに至りぬ。因に云ふ、この三脚韻格は夙にドライデンも試みたりしことあり、されどたゞ音樂用に止まりしがゆゑに、未だ廣くは知られざりき。恰好の主題を捉へて、盛に此の格を用ひはむしは主としてプライオアの功なりとす。

ジョン・ガイ John Gay (一六八八—一七三二) は、プライオア程の頓才をば具へざりしかど、技巧に於ては、はゞ彼れと同位置にありし詩人なり。家貧しかりしかば、少時は絹布商に雇はれたりしが、後ち某家の書記となり、それより始めて著作に従事し、先づ「Rural Sports」と題せる詩を作りて、時の詩王ホープに呈しき。これより先輩と相交るを得たりしかど、精進の氣力乏しかりしかば、敢て自活せんと努むることなく、又作詩に苦心することもなく、甲家より乙家へと流寓寄食して、其の間に幾多の小詩篇をもせしのみ。その轆轤流轉の窮生涯の面影は、其の劇詩「Beggars' Opera」に於て髣髴するを得べし。「The Shepherd's Week」「Trivia, or the Art of Walking the

Streets of London" "Epistles" "Elogues" 等は、マーシャル、スペンサー又はポープ、ヤングなどを模倣したる作なり。されども其の短篇には當時に珍しきばかり抒情詩の正鵠を得たるもの多し。"Black-Eyed Susan" "I was when the Seas were roaring" "Philda"などは、或は自然の情にかなひ、或は好調の樂をなし、雅趣愛すべく、掬すべし。劇詩は前に挙げたる『乞食芝居』の外に、"Aeolis and Galatea"あり。韻語の小話集には、"Fables"あり、皆その常才ならざるを見るに足る。惜むらくは、誘液鼓吹する良師を缺きしかば、その一生涯は懶惰無理想のうちにて了りぬ。

トマス、パーキル Thomas Parnell (一六七八—一七一七)はトリニチー、コレマの出身にして、始めは教會の役員なりしが、スキャフトに勧められて、一時トリー黨に入りたりし作家なり。其の作は概ね短篇なるが、その價は一ならず。"Hermit"と題したるものは、ウォルトスミス、ジョンソン等に激賞せられたりし作なれど、作者自からは、"Allegory on Man"と題したるを其の得意の作となせりき。近世の評家は、前者をば、たゞ流暢にして巧慧なる韻語に過ぎずとなす。件の二篇に次ぎて世に知られたるものは、"The Night-piece on Death"及び"Hymn to Contentment"にして、前者は

自然の景を寫せるとの巧みなる、當代に並びなく、後者はミルトンが『コーマス』の韻法に復歸して成功したるものなり。所詮、大詩人たるの素質には乏しけれども、其の作の巧緻にして、修辭上、詩律上の瑕疵少きは、よく時尙に副へりといふべし。

ウインチュルシー伯夫人 Countess Winchelsea (一六六〇—一七二〇)は、姓名をアー、フィンチと呼べりき。ポープ、よりトムソンへ遷る過渡期の詩風の先覺なり。其の初め、古希臘の名家ピンダルの體にならひて、"The Spleen"といふるを作し、引きつゝ、"The Prodigy" "Miscellaneous Poems" 悲劇 "Aristomenes" 等をものしき。此の作家は多年批評家間に遺却せられしが、彼のウァルツオスが、その "Lyrical Ballad" に添へたる有名なる論文中に、十八世紀の詩歌を属倒して、『失樂園』より、『四季の歌』に至る約三百年間に、自然の景象を眞に愛すべく寫し出せる作は、幾かにポープが『ウインツアの森』と此の伯夫人の "Nocturnal Reverie" とあるのみ、と論ぜしより、夫人が作を讀む者忽然として増加し來りぬ。蓋し、夫人は、著作の原材を常に自然の景致中に求めたりしなり、其の作 "Nocturnal Reverie" の如きは、人工の極端に馳せたる十八世紀前半の詩歌の間に立ちては、實に一種の異彩たりき。夫人が自然の描寫法は、トムソンのよりも

寫實には近かりしが、其の眞詩才に至りては、彼れに及ばざりしこと勿論なり。

第六章 ダンエル、デフォー

十八世紀文學の價值——英國小説の源流——十八世紀以前の作物語——新小説の興起——その特徴——『ロビンソン、クルソー』と上代の小説類——讀者の傾向——デフォーの傳——其の著作——『ロビンソン、クルソー』——その價值

十八世紀は、其の大體の傾向、就中、其の前半期を眼目として評價すれば、既に前段にも言へる如く、眞詩趣の萎靡し、道義の衰頹し、細巧小慧利の喜ばれし時、上下擧りて瑣々たる形式に拘泥し、區々たる小成に矜誇せし時代たるに外ならざるに似たれど、若しまた之れを他面、殊に其の後半期の趨勢に就きて通觀し、其の後の十九世紀文學に及ぼし、影響、そが呼び起こし、反動の價值、及びそが創設せし學問藝術の基礎の少小ならざりしこと等を思念すれば、或は當代を褒稱して、**近世英文學の起原期**といはんも、また必しも不妥當ならざるべきなり。新聞紙、雜誌類の起りしも、眞の史的文學の成りいでしも、眞の小説の生れいでしも、皆此の期中の事なればなり。左にまづ小説の起原を語らん。

今の所謂小説、就中寫實的小説は、はじめて英國に芽を發しきといふも、証言にあら

ず、而してそれは諸種の英文學中、最も後れて發生せしものなり。夫の中世紀に盛なりし英雄傳奇は、概して其の源を佛國に發せしなるが、それらは主として荒唐奇怪なる空想と武士的好尚とにのみ基けるものなり。所謂英雄傳奇の主人公は、さすがに彼の「マロリー」が『物語集』に見えたる王子アーサーなどの如き、純乎たる中古時代の理想人物にはあらで、いづれかといへば、シドニの『アーカヂヤ物語』に見えたる牧者的情人に近き人物なりき、即ち中古の武士的理想に近世的理想を加味せるが如き人物なりき。此の種の傳奇の佛國に發生せしは十七世紀の事なり。オノール、マルフェ Honoré d'Urfé は其の鼻祖にして、『トマルヌ』 Gomberville ラ、フイエット女史 Madame de la Fayette ス、シーテリ女史 Madame Scudéry などは、いづれも其の末流なり。ダルフェがものせし歴史傳奇は、譬へば我が文化、文政度の時代小説にひとしく、其人名、地名、事件の皮相等は、史に記せるまゝなれば、一見過去の事件を叙寫せるが如くなれど、其の實は、いづれも佛王オンリ四世時代の宮庭の豪奢、華麗等を寫したるものにて、稀には注意を惹くに足る佳處もあれど、概しては無味平淡にして散漫冗長なり。就中、其の『大サイラス物語』の如きは十冊の長きに涉り、讀者をし

てやがて厭倦に堪へざらむ。總じて此の種の諸作は其の話の筋、いつも荒唐無稽を極め、剰へ千篇概して一律なりしかば、進歩する人智は之れに甘んずる能はず、やがてちのづから一反動を生ずるに至りき。ソーレル Sorol の "Francion"、モーレンチエール Moretère の "Roman Bourgeois" の如き、又はスカロン Scaron の "Comique Roman" 『滑稽的傳奇』の如きは、いづれも此の反動の結果なりき。中にも後者は、そのころ珍しき冒險の物語にして、殊に滑稽洒落の書きぶり前代に其の類なく、且つ其の文體の卑近なること、恰も『大サイラス物語』の正反對を爲せりしかば、大に世間に歡迎せられ、新派の物語の祖先となり、やがて許多の門葉を生じき。是れ實に佛國小説の一轉機なりき。

さて前に述べし英雄的傳奇も、夙に英國に渡來して、多く模倣者を生じたりしが、スカロンの新作も、程なく英國に渡り來りて、若干の追隨者を生じたりき。例へばアラ、メン女史 (Mrs. Aphra Behn) は、チャールズ二世王の朝に、スカロンに倣ひて、或冒險談を作し、マンリー女史 (Mrs. Manley) もまたベシ夫人の擧に倣ひき。尙ほ此外にも佛國に起りて、英國に勢力を及ぼし、他の一昧あり、そは、ルサーサ (Le Sage) がものせし

"Gil Blas" "Devil on Two Sticks" となり。こは西班牙のセルヴァンテスが作『ドン・キホーテ』の脈を受けて、冒險談のうち近代の風俗人情を寫したるものにて、其の特質は滑稽と諷刺とにあり。

但し、かゝる作の行はれたりしは一時のことなり。英國民の性質は、屢々説ける如く、本來實際的なるが上に、諸種の自由制度發達して夙に自主獨立の氣風を涵養したりしかば、個々の私人生活に重きを置きて、空想をとほざけ、現實を貴び、何事をも事實の側面より研鑽するの氣習盛んなりしかば、いつまでも荒唐無稽なる傳奇類などを喜ぶべくもあらず、さればとて、或種の作物語を得て人生の面影を鑑賞せんことを欲するは、人情必然の要求なるがゆゑに、遂にはかゝる國情に適應すべき寫實文學の誕生を促し、近世小説の端やうやくに發かるゝに至りたり。

此の英國文學の革新期に當り、一方舊派の殿となりしと同時に、他方新派の魁となりし者は、實に ダンエル、デフォー 其の人なりとす。其の名著『ロビンソン・クルーソー』(一七二〇)は新小説導火線となりしものなり。之れより先きにいでしモンマス・のゼンレーが『フリットン物語』(一一四七)トマス・マローリが『アーサー物語』十

四世紀の中頃乃至トマス、モリアが『ユートロピヤ』(一五一六)ジョン、リ、が『ユーヒューニズ物語』(一五七九)フリップ、シドニが『アーカヂヤ物語』(一五八〇)ジョン、バンヤンが『天路歷程』(一六七〇)ス、非フトの『桶物語』(一七〇四)の如きは、其の趣向と文章との上にこそやゝ小説めきたるところあれ、又は頗る小説に類したるもあれ、其の精神に至りては作家が純空想の所生なり、然らざれば只漠然と世間の状態を叙寫せるのみ。或はまた倫理説又は政治論に鼻目を附したるが如きものなり、嚴密にいへば、一として實生活と個人性とを描き得たるものはあらざりしなり。デフォーが『ロビンソン、クルソー』(一七〇四)とて、今の所謂小説には遠けれど、尙其の人物と事件とを現實に有り得べきやうにものしたると間、期せずして多少性格をも寫せるとは、舊傳奇類と撰を殊にす。

『ロビンソン、クルソー』の出で、大に英國小説讀者の好奇心を惹き起こし、時は他方に於て劇詩と演劇とが著く衰退せりし時なりき。彼の十七世紀の初期に成りし脚本、乃至同世紀の末に成りし喜劇に耳目を喜ばせし觀客も、今や舞臺にては心の樂みを買ふを得ざりき。併てシェイクスピアの天才を喜び、コンクリーヴの滑

筆を賞せし上流士女も、今は劇を觀るの人たらずして書を讀むの人となりき。而して彼等の讀まんと思みし小説は、彼の西班牙及び他の中世紀の物語類の如く、只管空想を挑發するに過ぎざるが如きものにあらざれば、た佛國及び十七世紀の物語類の如く、單に日常の談話を再現して、彫琢せるが如きものにもあらずして、巧に現實の生活を描き、妙に個人の性情を寫し、或は以て處世の指導ともなり得べきものなりき。十八世紀以來今に至るまでの英國小説は、一として此の傾向に従ひ、此の需要に應じて生まれいでのものならぬはなし。さりとして舊傳奇より一躍して新小説に移るべくもあらねば、勢ひ一道の架橋を要しき。『ロビンソン、クルソー』は恰も其の橋梁たりき。

ダン、エル、デ、フォーは屠者の子にて、一千六百六十一年(我朝寛文元年、其積の生誕後六年、淺井了意在世倫敦市にて生まれき。行末牧師とならんとて、齡十四の時同市の某學校に入りしが、苦學五年にして退きぬ。此の五年の外には正しき教育をば受けざりしが、みづから力めて雜籍を耽讀し相應に博通の聞えありき。彼のモンマス公爵が宗教上の事より起りて反を謀りしや、デフォーは熱心なるプロテ

スタント宗徒なりしかば、たゞちに公爵に與せしが、事破るゝに及び遁走し、身を匿し、と數月、公爵赦せらるゝに及びてまぬかれき。其の後、コルンヒルに移りて莫大小の卸賣を業とせしが、鬱勃たる企業心に驅られて西班牙、葡萄牙に航し、しばしば商業上の冒險を試みしが、失敗し、負債に堪へずして、プリストル地方に逐電しぬ。政治上にては、熱心に民權主義を執りしかば、一千六百八十八年、オレンツ公(ウィルヤム三世)が兵を率ゐて英國に上陸せしや三四の友と共に遙に之れをオツクスフォード州に迎へき。プリストルにては、帽子商となり、活版職となり、三轉して煉化の製造に従事せしが、いづれも失敗して、大負債を醸し、再び龍動に逃れ歸りき。

プリストルに在留せしころ、『Essay on Projects』を著しぬ。こは道路改良の事、救貧銀行設立の事、保險事務の事、佛蘭西のひとしき大學設立の事、陸軍大學校の事、強募隊廢止の事、女子大學校設立の事等に關する私見とを述べたる者なり。金銭貸借法改良案さへも論じたり。又曾て軍用金徵集に關する方案を發表して、ウィルヤム三世王に知られ、一千六百九十五年、其の賞として、玻璃税局の事務官に任ぜられしが、後四年、玻璃税の廢止と共に、其の職を罷められき。當時、國內、ウィルヤム三世を正統な

る英國皇統の君ならずとして、非難する者多く、中には『異邦人』と題したる惡詩を作りて王を誹謗するものありき。デフォー乃ち王と和蘭國とを辯護するの主意にて、諷刺詩『True born Englishman』、『正統の英人』といふを世に出だしぬ。世人争うて此の詩を購讀せしかば、瞬くうちに無慮八万部を賣り盡くしきといふ。此の詩の劈頭なる、上帝が祈禱堂を建設する處、惡魔はた常に拜堂を設く、而して検査すればすなはち後者の會員ははるかに前者の數にまされりといふ主意の四句は、世の人口に膾炙せる者なり。此の詩篇に次ぎて著しぬは、『The Shortest Way with the Dissenters』、『折伏捷徑』(一七〇二)なり。此の著の中に冷語を下して曰はく、異教者を信服せしむべき良策は、彼等の耳を切り、鼻をそぎ、頸手枷臺に曝し、牢獄に幽閉するに如かずと。而も世人此の書を誤解せしかば、更に其の解説を物せり、當時の國教黨之れが爲に驚きき。下院も此れを以て甚しき誹謗の文字なりとし、デフォーを逮捕せんとしたりしかば、彼れ逸早くも其の跡をくらしぬ。さて深く潜伏して人に知られざりしが、論文の發行人と印刷者とに累を及ぼしたりと聞きて、もだしがたく、それを救はんとて自首し、二百磅の罰金を科せられ、三日の間、頸手枷臺に曝され、剩へ女王の

心とくるまで(當時ウィルヤム三世王既に崩じて女王アーンの御宇となれり)禁獄せらるべき身とはなりぬ。彼れは頸手枷臺の上にありながら刑臺を象字形のゆゑしき器械と呼びて戯れに其の頌歌をものしき。"Hymn to the Pillory" 是れなり。デフォーはニューングトンの牢獄に在りし間も決して光陰を徒消せざりき此の際彼れは其の『評論』(英國に於ける文學兼政治雜誌の嚆矢?)を創製しき。初めは毎月二回の發刊なりしが後には三回發行するとし、徹頭徹尾已れ一人にて編輯しき。是れ後に『クートラー』『ガーヂヤン』『スペクテーター』等の諸雜誌を呼び起すべき導火線となりき。(獄を出でし後も依然『評論』に筆を執り、八年間其の業を繼續しきといふ、或は十年間ともいふ)。獄中に在りしと殆ど二年、一千六百年に至りて赦され、後幾程もなく女王アーンの刺を奉じて英蘇兩國合同事件の委員となり、専ら其の事に努めしが、元より商事に長じければ兩國の貿易上の關係につきて技倆を顯し、事少からず。

一千七百十三年(五十二歳)再び其の筆によりて思はぬ災を招きし。即ち『ハノーヴル家の繼承を難するの理由』『ブリテンダル來たらば如何』『何人も思念せざる問に對する答、即ち女王陛下かくれませば如何』の三論文を草し、忌諱に觸れて禁錮せられき。

一千七百六年には『モレル夫人の幽霊』を著し、一千七百九年には『英蘇合同史』を出だし、同十五年には『家庭の師』といふ教訓の書をものしき。彼れは今や既に六十に垂とし、常人なれば氣力大概は消耗し、物の用には立つまじき年齢なれど、彼れの不屈不撓なる精神は、老いて益壯にして、一千七百十九年四月に其の名著『ロビンソン・クルソー』の第一巻を作しき。それより同八月に至りて、第二巻を、又翌年八月に至りて第三巻を出だしぬ。此の書の評判前古無比なりしかば、更に引きつゞきて三種の冒險物語を出版しぬ。"Duncan Campbell" "Memoirs of a Cavalier" "Captain Singleton" 是れなり。一千七百廿二年又た三種の書をものしき。"Moll Flanders" "History of Plague" "龍動大疫病記" "Colonel Jack" 是れなり。『龍動大疫病記』殊に名高し。又一千七百二十四年には『ロキザナ』『幸福なる夫人』及び『大武烈顛漫遊記』を作り、一千七百二十五年には『世界新航行記』『完全なる英國商人』を出だしぬ。前者は例の如き冒險物語、後者は商人必携とも稱すべきものなり。それより後ち一千七百二

十六年には『The Political History of the Devil』『悪魔の政治史』を出だし、一千七百二十七年より二十八年にかけて『The Plan of English Commerce』『英國商業策』を出だしき。

當時デフォーはストーク、ニュートンに住し、暮らし向き贅澤なりしが、収入に超えたる奢侈に耽りしたため、負債山の如く、遂には遂電して身を潜め、後にはムーアフィールド邊に卜居せしが放逸なりし六人の見思ひくりに離散して、毫も父を顧ざりしかば、此れがためにも少からず心をいたため、加ふるに老衰漸く至り、一千七百三十一年竟に溘然として七十一年の煩生涯を終へき。

デフォーを論ずるもの、何れも斷言して曰ふ、彼れは到底親み交るべき人物にあらず。彼れは口常に廉潔を唱へながら、行ふ所常に卑劣なりき、一方にてはシャコピン黨の爲に筆を執りながら、一方にては時の政府より保護金を受けてシャコピンに反するの舉動ありきと。或傳記家は彼れを評して、恐らくは未曾有最大の食言者ならんと言へり。

デフォーが文學上の著書の中、最も有名にして又最も見るべきは、言ふまでもなく

『ロビンソン、クルーソー』なり。此の書の、その作者に於けるは、猶『失樂園』のミルトンに於けるが如く、『ロビンソン、クルーソー』といへば隨うてデフォーを憶ひ起こし、デフォーといへば隨うて『ロビンソン、クルーソー』を聯念す。彼れをして英國文學史上に不朽の大名を博せしめたるものは、實に一部の『ロビンソン、クルーソー』なりとす。故に此の書の委曲を解すれば、彼れが文學的著作の全斑を推するに足るべし。

按ずるに、デフォーの時を距ること遠からざる前に、アレクサンダー、セルカルク(或はセルクレイク)といふ水夫ありしが、太平洋を航海せし中、船長ウィズ、ローチャースと争を生じ、其の結果只一人、チェアン、フェルナンデスの無人島に取り残されて、孤棲數年に及びたるが、其の後船長ローチャースに助けられて本國に歸り來りき、其の事の顛末は載せて、ローチャースが自著『世界周航記』の中にあり。デフォーが『ロビンソン、クルーソー』は此の事實に基きて構築せしものなると明かなり。例によらば、こゝに此の名作の梗概を紹介すべきなれど、又思へば、此の書のあら筋を心得ぬは世に稀なるべく、煩を厭ひて悉く略しつ。

ショーは此の書を評して曰はく

クルーソーは、あくまでも普通の人間なり、故に老若男女を問はず、彼れに同感し、彼れの喜怒哀楽を見ること、猶自己の喜怒哀楽を見るが如くす。クルーソーが智も、クルーソーが先見の明も、一として人間の普通性以上には出でず。例へば非常に辛苦して獨木舟を造りたるも、初より其の舟の重くして船印に堪へざらんを悟らざりしが如きは是れなり。されば讀者の中、百中の九十九は、我れも斯かる場合には、斯かる先見に暗き事を爲すならんと思ひて、容易くクルーソーに同感す。思ふに、年若きものに此の書を讀ましむるは、恐らくは、多少の害あるべし。此の書が、如何に多くの兒童をして水夫ならしめしが、測り知るべからず。

と。げに、此書の價值は、主人公クルーソーが奇傑の士にあらざる所にあり。彼れは常人の力量と常人の知識とを有せし人に過ぎず、而も如何なる災厄、失敗、困苦にも堪へ、常に件の力量と常識とを用ひて、自ら工夫して其の難を免れんとする所、實に萬人の同感に適す。この書が内外教育界の珍寶となりて幼年者が心力開發の好材とせらるゝは故ありといふべし。博士ヂュンソンは曰はく、「一人の手に成れる著書にして、讀者の巻を終ふるを惜しむは、『ロビンソン、クルーソー』と、『ドン、キホー

テ』と『天路歷程』とを除けば他になし」と。以て此の書のもてはやさるゝを知るべし。デフォーは一世に珍しきばかり健筆多作の人なりしかど、元來詩人、美術家の資にあらざりしが故に、その想像や觀察や、すべて實務家的にして、只管に事相の要領を逸せざらんとを眼目とせしに似たり。さればその文を草するや必しも結構、修飾を力めず、日常の座談にひとしく、任意に述べ去るを常としたり。語句の重複、句調の良否、感興の深淺などは初めより問ふ所にあらざりしなり。さもあれ、事實らしく見することには心を注ぎ、事を叙すれば、年月、日及び時刻さへももらすことなく、僅かに風ありと記すにだに必ず方角を精示せりき。かゝる蕪雜煩瑣の記叙の筆が讀者をして巻を措く能はざらしめしは驚くべきに似たれど、彼れの作を讀みて起す感興は、大方世變、人事の實感にして、毫も詩的想像より來る漂渺の興にはあらざりしなり。傳へていふ、オックスフォードの市長某深く此の書を愛讀し、暇ある毎に繰り返すを無上の樂とし、これを徹頭徹尾事實の記録なりと思ひ居りしに、或日其の友某より此の書の全く作物語なるよしを聞きて大に嘆息し、我が老後の最大快樂を奪はれきとて其の友を怨みきとなん。此の書の如何にも實らしく書き做

されたるかは此の一事にても著けし。但し、シローの言へる如く、クルーソーの如き境界に臨まば、何人も其の云爲するところクルーソーに異ならざるべし、即ちクルーソーは人間に普通なる性情のみを具へて未だクルーソーに特得なる性格を有せず。又此の書は、其の結構よりいふも、書きぶりよりいふも、美文的にあらず、即ち起伏の妙なく、省筆の奇なく、篇中一として複雑なる人事の纏綿せる箇所なく、濃厚なる人情の味はるべき箇所なし。是れ即ち此の書を眞小説と名くべからざる所以にして、隨うて又デフォーを眞小説家と稱すべからざる所以なり。

第七章 サミュエル、リチャードソン

リチャードソンの生涯——書信体の小説——著作——『パメラ』——その批評

——『クラリッサ、ハーロー』——その批評——『士爵チャールズ、克蘭マソン』

——その批評——總評

デフォーの『ロビンソン、クルーソー』は、當時に於ては、眞に斬新の作なりしが、事の實を寫すに審なるも性格の實を寫すに粗なりしかば、未だ眞の小説とはいふべからざりしに、サミュエル、リチャードソン、いづるに及びて心理小説の緒始めて發

かれたり。リチャードソンの名を著し、は、一千七百四十年以後のことにして、其の作家としての全盛期は、須からく十八世紀の第二期(即ちゴッス氏の所謂デ、ン、ン、ン、時代に屬せしむべきものたること勿論なれども、こゝには英國小説發展の大順序を同時に通覽するの便宜を思ひ、態と第一期中に攝入し、兼ねて其の他の諸小説作家、フィールチンクス、モーレット、スターン等、すべて第二期に屬せしむべき諸家を併叙したり。讀者は宜しく此の意を會してリチャードソン以下の作家は、其の年代の順序よりいへば、デ、ン、ン、ン、以後に來るべきものたることを記すべきなり。

リチャードソンが經歷は、單純なれば、格別にとり出で、叙すべきほどの事なし。彼は、僅かに其の地方の小學に送られて尋常の教育を受けしのみ。幼きより物語をなすに巧なりしかば、其の小學校に入りしや、衆童に愛せられしと、ウォルター、スコットの幼時にひとしく、常に群童に圍繞せられて種種の物語をなしきといふ。且つ其の柔和温良なる性は、自然に女性の同感を呼ぶに適し、此の未來の小説家をして夙

に婦女社會に接せしめき。而して女性の中には、夙にリチャードソンの才能を認め、て奇なる役目をなさしめしめしもあり、すなはち其の情人に艶書を送るや、或はリチャードソンをして代筆せしめ、若しは拙きを添削せしめき。按ふに、リチャードソンが特に婦人の性情に通曉せしは、一つは其の性質にや、女らしき所ありしにも因るならめど、又一つは斯かるめづらしき便宜を有したりしにも因るならん。十五歳の時、父の吩咐にて倫敦におもむき、ジョン・ワイルドといふ活版師に奉公し、七年の年期を終へて後も、尙植字方、校合方となりて五六年を過ごし、後遂にソールズベリ、コルトにてみづから業を營み、舊主人の女を娶りて妻となしき。彼れは爲人柔和廉潔なりしのみならず、頗る事務上の才能に富み、加ふるに市人としては稀有の文才を備へたりしかば、書肆皆彼れを重じ、或は書籍の索引を作らしめ、或は序文、贈呈の辭等を作らしめき。就中、書肆リフングトンとオスボルンとは彼れが書信文に巧なるを知りて、通俗用文を綴らんことを乞ひしに、リチャードソン曰はく、むしる教訓兼帯の者とせば如何と、書肆更に妙なりといふ、リチャードソンすなはち其の著にとりかゝりしが、ふと思ひつきて、若し此等書信文を互に關係あるものとして連続

せしめ、且つ成るべくまことらしく物して一篇の物語となさば、或は文學上に一新体を開くにも至るべく、兼ねては荒唐奇怪なる傳奇小説をよるこぶ讀者を宗教、道徳の方面に向かはしむる一助ともなりぬべし、と思念し、嘗て一友人より聞きし話の尙記憶に残れるを幸に、そを一篇の骨子として、遂に**書信躰の小説**をものしけり、*Pamela*一名『美德のむくい』是れなり。『パメラ』は、蓋し、シドニの『アーカチヤ物語』に見えたる女性パメラの名を借りたるなるべし。一千七百三十九年十一月十日、起稿、翌一月十日脱稿、全部二冊、一時の出版なり、リチャードソンが五十歳の處女作なりき。此の書の評判たちち全國に傳はりければ、人々争うて購讀し、就中、年少婦人の歡迎は殆ど崇拜の度に達しき。此の著はひとり俗間にもてはやされしのみならず、アレクサンダー・ポープの如きも、此の書を評して人を感化するの力、説教文二十巻にも勝るといひ、博士シユルックもまた、其の説教壇上にて、此の書を世人に推薦せしかば、發賣後一年にして五版を賣り盡し、和蘭、佛蘭西等の外國もまた相ついで之れを翻譯するに至りき。

英國從來の小説類は、前にも言へる如く、大抵其の材料を荒唐奇怪なるあるまじき

事柄に取り加ふるに作中にあらはるゝ人物も概して貴公子、貴婦人と限られ、剩へ人物の大概は現實の人間といはんよりはむしろ一種の怪物ともいふべきが多かりき。デフォーが作は、此の常套を破りて、大に新趣味をもたらしたりしが、尙其の結構に、叙寫の法に、未だ眞の小説たる體を具へず、且つ前にもいへる如く、其の人物も單に通性を具へたるのみにて、殊別の個性を現せざりき。然るにリチャードソン出るに及びて、眞成の寫實小説の端を開き、ひとり人物と事件とを實際に取れるのみならず、因縁の關係を複雑にし、心性の秘密藏を聞き、個々の人物をして殊別の性情を現せしめき、リチャードソンを以て英國小説の鼻祖なりといふは此の故なり。但し、其の餘りに煩瑣冗長なるが爲に、尋常讀者の嗜欲は、スコット、サッカレー、 Dickens、エリオット等の鹽梅せる一層甘美なる珍羞の方へ牽かるゝや、疑なしと雖も、さりとて彼の舊傳奇の陳腐爛熟なる調進に比し來たれば、其の料理の精妙なる、眞に驚くべきものあり、ひとり當代に愛玩せられしのみならず、近くば佛獨の文壇にもてはやされて、間接に佛國及び獨逸新文學の導火となりしこと、異しむに足らざるなり。リチャードソンは人のすゝめによりて後更に一千七百四十一年『バメラ』の續篇二

巻を綴りき、但し、こは前二巻に比していたく劣れり。

『バメラ』の成功の未曾有なりしによりて、著者は更に第二の作に着手し、一千七百四十八年其の傑作と稱せらるゝ『Clarissa Harlowe』を著はしき、全部七巻、こもまた書信體の小説にして、第一巻と第四巻とに訓誡の旨を述べたる文を添へたり。此の書の世に出でしや、好評『バメラ』にもまさり、年少婦人等は、其の女主人公が、ありとある災厄に遭遇せるを見て、結局如何に成ゆくらんと心を痛め、わざ／＼著者に書を送りて主人公を災厄の中より救ひ出だしてよと乞ふもの、引きも切らざりきといふ。一千七百五十四年更に第三の小説『Sir Charles Grandison』(全部六巻)を著しき。こは競争者フィールディングの死に先ちしこと一年なり。此の書は明かに失敗の作なり、上流の言語風俗に爛はざる作者が、ひとへに訓誡を眼目として、力めて上流の(而も理想の)人物を描かんとしたれば、無理なる處甚だ多し。

さるほどにリチャードソンの名聲やう／＼高く、其の信用將た他に超えしかば、遂に衆議院の印刷物を一手に引受くるの特許を得、一千七百五十四年頃には、選ばれて文房具組合の會長となり、一千七百六十年には國王の御用印刷株の一半をさへ購

ひき。ソールズベリ、コールドなる其の印刷所と倉庫とが、大なる家八棟までを取毀し、跡に建てられきといふをもつても、其の業務の盛大なりしを察すべし。一千七百五十五年までは、市中の北端なるハンマースミスに住居せりしが、同年パーソンス、グリーンなる住家に移りき。一千七百六十二年、七十二歳を一期としてみまかりぬ。先妻は之れより先き一千七百三十一年にみまかりたり、後妻は一書買の妹なりき。先妻の腹に五男一女ありて、後妻の腹に五女一男ありけり、其の中男子は悉く夭折し、女子も二人だけは早世しき、残りし四人の女等は皆よく父に事へきとぞ。

リチャードソンの著作は『バメラ』『クラリッサ』『グランヂソンの三篇あるのみ。此等皆心たゆまるゝ書信牒の小説にして、通讀せられざるを常とすれば、管々しけれど作の大筋と聰明なる評論の一斑とを擧げて、其の品質を窺ふの便に供せん。まづ『バメラ』一名『美德のむくい』の概略を言はん、或老刀自の召使に、バメラといふ清淨無邪氣なる齡三五ばかりの一少女あり、刀自の子なる若主人 Esquire B. といふものバメラの容色に迷ひ、さまざまに挑めども、心正しきバメラはなびかかん色なし。

果は怒りて、罵り、はづかしめ、或はすかし、或は物をとらせ、或は苛責し、或は幽閉し、待遇非道を極めたりき。さりながら、此の肉牒の苛責よりも、バメラに取りて一層つらかりしは、我が良心の苛責なりき。人こそは知らざれども、我が心もまた、ひそかに若主人を戀ひ慕へり、さはあれども、處女の操の清淨を犠牲にして人のもてあそびとならんとは、道心堅固なるバメラが心の許さざる所なり、さりとして正妻となり得ん望も無し、こゝに於てや、あくまでも身心の苦痛を忍び、露ばかりも誘惑に應ずるの色なし。バメラは實に今の英佛の理想的女子に似たらんよりは、はるかに我が女大學的淑女に似たる、内氣にして小心なる少女なり。さて此の間に意地悪き女性などもからまりて、バメラの災厄殆ど極點に近くちかに及びて、非道なる若主人も遂に動かすべからざるバメラの清徳に感じ、驟然其の邪なる心を改むるに至り、やがてバメラを擧げて正妻と爲すに至る。云々。

以上『バメラ』の骨組なり。篇中の書は概してバメラより其の父母に送りたるものなり。

當代の士女が、思ひがけなくも此の書に接せしや、さながら虚偽、不自然の境を脱し

て真理、自然の境に歸りたらんが如くに感じ、如何に甚しく喜悅せしかは、スコットの嘗ていへる如く(彼等が催眠と欠伸とを禁ずる能はざりきといふ)彼の荒唐無稽、蕪雜平板なる舊傳奇の一二種を繕きて相照し見ば、之れを知るに足らん。

道義の理想一變したる今日より見れば、リチャードソンが女主人公の品性が完全ならざること論を俟たざれど、又其の餘りに優柔脆弱にして凜然たる氣概に乏しきが如きは、専ら訓誨の爲に作られたる主人公として見れば、殊にうなづきがたき所なれど、之れを當代の寫實的小説の主人公として見れば、近世小説の中にだに容易く見いだしがたき妙趣あり、バメラは甚くども此の書を耽讀するの間人をしてひとへに其の無邪氣と質樸なるに同感せしめて、他を思ふに追なからしむるの魔力あり。

『クラリッサ、ハーロー』のあら筋は左の如し

豪家の女クラリッサは才色兼備、實に當代の理想的淑女なり、而して其の父、其の兄、其の姉、其叔父、皆當代に實在せし種々の悪徳をもてる不仁の人物なり。頑固專斷なる父はクラリッサを強迫して卑劣なる人に嫁せしめんす。クラリッサが之れを諾はざるより全族一致して之れを虐待す。クラリッサ遂に堪へかれて其の意中の人ラザレ

スの許に身を寄す。ラザレは輕薄無慮の徒にして、奸才子の雛形なり、其のクラリッサを愛すといふは只一時のもてあそびにせん心の心に外ならず。假面漸く墮ち來るや、彼れの非道の振舞のクラリッサを苦しむること限なし。クラリッサ、情に於ては彼れを戀ひながらも、理性は其の爲人の卑劣なるを賤しめ、結婚を拒み、竟に悲のあまり斷腸して死す。奸人ラザレは一旦英國を去りしが、後クラリッサの親戚、大佐ウォルテンと決闘して殺さる、云々。

篇中の書信はクラリッサと其の友なる一嬢との間の贈答、及びラザレと其の友ジョン、ベルフォードとの間の贈答より成れり。

此の書はリチャードソンが最傑作なりと稱せらる、そのころ、佛蘭西にて、此の小説の名聲頗る高く、デロアの如きはホーマー、ユリピチーズの著と并稱し、又ルソーは明かにこれを模倣して其の小説を作り、アルフレッド、デムーセの如きも、これ實に世界最良の小説なりと稱しき。シヨール曰はく

リチャードソンは、其の天性、境遇、ふたつながら、男性を描くよりも女性を描くに適したれども、此の篇のラザレの如きは、描寫間然すべきなく、靈妙精微、一切の文學中、稀に見る所なり。ラザレといふ名の、何れの國語にても、女殺の手管に長けたる遊治郎の變名となれるが如きは、其の人物の活けるが如くに描かれたる明證とすべし。

と。ゴッス氏は曰はく

男性に於けるも既に然り、まして女性たるクラリツサに至りては、文學中に於ける最も活動せる又最も同感を表すべき婦人の一人なり、彼の女の缺點の却りて彼の女をたふさき者とし、彼の女の弱點の却りて其の節操に勝利の冠を與へしめたる、即ちリチャードソンがクラリツサを寫すの巧妙熟練なる所以なり。(中略) 著者がラザレースの性格を寫すや、苦心大方ならざりきといふ、何となれば彼れをして純粹の惡漢と作りなせば、全篇の主意これが爲に破壊せられん、故に機惡敏捷なる人物に作りて、當時の風流紳士の雛形を現したり、且つハーロー家の親屬にして、現にクラリツサの死を目撃せし大佐モルテンをして、彼れと決闘せしめ、竟に之れを殺すこととなして應報の理を示しき云々。

『サー、チャールズ、グランヂソン』の主人公グランヂソンは、才徳兼備の紳士なり。此の作には女主人公二人あり、一人をクレメンチナといひ、一人をハリエットといふ、いづれも令徳の淑女にして共にグランヂソンを慕へり。クレメンチナはグランヂソンがハリエットと婚するに至りて、失望悲痛のあまり狂亂す。クレメンチナが狂亂のくだりは、本篇中尤も出色の文字なり。著者は、本篇中にて、決闘の非を論じたり、されば主人公グランヂソンをして他と決闘せしむるにも、其の拳法の

精妙なる能く武器を用ひずして敵の劍を奪ふとやうに作れり。ショーの批評は、能く此の篇の長短を盡せるものなり、曰はく

蓋し、リチャードソンは三小説をもて三種の階級を畫かんことを試みたり、即ち『パメラ』にては下等社會を、『クラリツサ』にては中等社會を、『グランヂソン』にては上等社會を寫さまくせり。されど、彼れは、其の教育の上よりいふも、位置の上よりいふも、上流社會に於ける思想感情に通せざりしかば、其の叙寫は多く推測より出で、不具なり、所詮、彼の大世間の風習に慣れざる、教育の不完全なる人の陥りやすき誤謬を免るゝこと能はざりき。彼れは絶えず上流の用語を描さんとして苦心せしかば、其のギクシャクとして殊更めける言語は、之れを實際と對照し來たれば、甚だ笑ふべきものなり。夫れ、上流に立てるやからは、上に模倣すべきものなければ、感動のづから虚飾を脱し、用語なども平易自然なるを例さす、然るにリチャードソンが嘆美すべきなせる人物を見るに、俗に謂ふ半可通さも稱すべきものにて、小説中に在りても、實際に在りても、厭はしきものなり。されば此の篇の中に、吾人の同感し得べきは、若干の弱點過失ありて不自然なる圓滿の弊を脱し、人間らしく見えたる人物のみ、例へばクレメンチナが狂亂の如きは、フレツチヤーの筆さしても耻づかしからず、其の哀れ深く物せられたる、グランヂソンよりもハリエットよりも一層旨味深し。リチャードソンは其の性女性に似たり、彼れが叙寫の長やかにして、綿密なるは其の自然の結果なり。ハズリットは曾て此の篇を讀みて、著者がグランヂソン夫婦が、新婚の禮衣を叙狀するに十二頁を費したりとて、咎めたるが、

後に或少女が、此のくだりこそ篇中の最も感動すべき挿話の一つなれども、現に其の全文を寫せるを見出だして驚きぬ、以て其の如何に女性に愛讀せらるゝの特色を具へたるかを知るべし。は「めりチャードソン」が此の作を編まんとせしや、其の中なる上流社會の用語に誤謬あらんことを恐れ、或貴女につきて是正を乞ひしに、誤謬矛盾餘りに甚しかりければ、遂に正誤の望を絶ちきざり。按ふに、人間、就中女性の性情を根氣よく解剖したる點に於て、又微妙なる出来事及び細密なる叙寫をいやが上に、積聚するの頗ある點に於て、并に其の感情のやゝ不健全なる點に於て、勿論國民及び時代の異なるありといへども、バルザックとリチャードソンとの間に著く相似たる所あり、云々。

要するに、リチャードソンは神經質にして誠實温厚の人や、**悒鬱病**の傾ありて滑稽の能と敏捷なる才氣とは缺如たりしかど、女性に對する異常の洞察力と一種の文才(少くともその所思を十分に表現するの技倆を有せしなり。冗長は彼れの失なりしかど、その綿々として際限なき冗筆の間、部分の描寫の、全軀の結構に照らし、てその割合を誤らざりしは多とすべし。この點に於ける彼れの技倆は、フィールディング及びスモーレットの上にある。

第八章 ヘンリ、フィールディング

リチャードソンとフィールディング——フィールディングの本領——生涯及び

著作——「ジョセフ、アンドロニス」——「アマナサン、アイルド」——「トム、ヤンクス」——「アマリヤ」——總評

粗豪磊落個人としても、作家としても、リチャードソンと直反對なりし作家を、ヘンリ、フィールディングとす。コールリッチ、嘗て一家を評して曰はく、「リチャードソンの作を讀みて後に、フィールディングの作を讀めば、暖爐もて暖められたる病室をぬけ出で、風薫る夏の初めに、廣やかなる緑野を逍遙するが如し」と。リチャードソンは哀傷し、フィールディングは戲謔す。彼れは沈鬱にしてこれは快活、彼れは常に愁へ、常に怖れ、常に懸念し、常に苦慮し、嘗て安心する能はざる神經家の如く、此は放言、笑諷、嘲罵、冷刺、念頭些の苦勞を感ぜざる多血男見なるが如し。リチャードソンは女々しき悲劇の且末に比すべく、フィールディングは荒々しき喜劇の淨丑にくらぶべし。リチャードソンは個人としては謹慎敬虔の良市人なり、フィールディングは放逸粗豪の遊蕩子也、前者は常に神明を畏敬し、後者は屢、酒色に荒みき。小説の作家としては、リチャードソンは狭けれども深く、フィールディングは廣けれども淺く、前者は専ら女性的人格を盡くに長じ、後者は廣く諸性癖を寫せり。要するに、リチャードソンは個人

としても、作家としても、終始規矩準繩によりて進退し、フィールディングは之れに反し、一舉一動、ひとへに自然の性に従へり、かるが故に、一は窮屈に狭く、一は自由にしてのびらかなり。フィールディングの作中にあらはるゝ人物は、男女老弱を問はず、皆活潑なり、皆快活なり、善く談じ、善く歩し、善く食ひ、善く飲む。就中、男性に在りては、喧嘩、口論、争鬭、刃傷は、不斷の事たり、隨うて作中の人物、一人として多少の缺點を具せざるはなし。痴愚ならざれば、頑陋なり、頑陋ならざれば、浮薄輕佻なり、浮薄輕佻ならざれば、偽矯、偽矯ならざれば、貪婪、貪婪ならざれば、多情、いづれも、道德上より謂ふときは、不具の徒なり、約言すれば、式亭三馬が戯作中の人物に、一層判然たる性格を附與せるが如きもの、是れフィールディングが最も得意とせし第二流の人物なり。また彼れが小説は、概して郊外の事に關す、リチャードソンの小説の主に、深窓及び室内の事に關せるとは、反對なり。フィールディングの作は、一面よりいへば、旅行記に類す、譬へば、我が武者修行の物語を一層世話に崩したるが如し、回毎に局面あらたまり、新事件起こり、新人物出づ、殆ど應接に遑あらず、而も一篇の主人公は、猶光る君の『源氏物語』に常住常現なるがごとく、彌次郎兵衛、喜多八の『膝栗毛』に通在せるが如く、毎

に其の間に出没し、對手變はれども、主變はらざる脚色なるが故に、首尾相つながら、脈絡相貫くを得たり。

按ふに、リチャードソンは、強ひて人性の高雅なる側面を寫さんと欲して、文に流れ、フィールディングは、只管當時の實相を模寫し來たりて、おのづから野に失したり。リチャードソンは、十八世紀の理想的人格を描かんと力め、フィールディングは、ありのままを寫すことを悦べり。小心謹直なるリチャードソンは、當時の亂倫に寒心して、殆ど笑の能力を遺却し、蕩迭磊砢なるフィールディングは、此の大自由の生活に流連して、殆ど其の涙を失はんとせり。フィールディングも、もとは多情多感の才子なり、時に自他の爲に流涕せしことなかりしには、あらず、彼れは、優かにユーモリストたるべきの資格を具して、哀傷を寫破するの筆は、た頗る見るべき者あり、されど、惜むらくは、彼れが同悲は、膚淺ならざれば、暫且、暫且ならざれば、浮泛なりき。蓋し其の落々たる氣質は、長く一事に執着して、深く沈想する能はざりしなり。要するに、武人的にして詩人的ならず、男性的にして女性的ならず、活動的にして冥想のならずる所、是れフィールディングの小説作家としての特質なり。彼れは十八世紀の大腐敗を觀るも、他

の情に脆き詩文人の如く、徒らに悲愁憂悶し、沮喪絶望するの女々しさには陥らざりしが、さりとて此の墮落に感慨して、まづみづから己れを淨うし、進んで同胞をも淨うせんなどの大なる志望を抱きしとも無し。こは其の作の滑稽的なるが故にいふにあらざり、作意の表よりいへば、彼れもまた一種の勸懲主義者の如く思はるゝがゆゑにいふなり。彼れは現に其の作「ジョセフ・アンドリュース」の序中に曰はく「悲哀嚴格の調子は却りて世をそこなふの虞あり、談話滑稽こそはむしろ人をして善良なる氣質を養成せしむるものなれど。こは或はリチャードソンが作意を嘲らん爲に、殊更に立てたる言にもあらめど、其の所謂談話が純乎たる無邪の滑稽にとまらずして、其の裏に諷刺教誨の旨毎に籠りて、會釋なく不徳弱點を指摘し、剔抉し、暗に當代を矯治せんの意のほの見ゆる以上は、彼れはた勸懲家たるの名を辭する能はざるべく、また決して辭退せんと試みざるべし。彼れは自然を愛するも、彼のシェイクスピア、ゲーテの如く無私公平に愛せしにはあらず。彼れは毎に是非善惡を批判す、即ち純粹の美術家にあらずして、アンクワサクソンの美術家なりき。されば、其の人の性格を描くや、之れを自然の勢力として描けるよりも、むしろ褒貶すべ

き世間の勢力として描けるものゝ如し。すなはちフィールディングは、心理家にして兼ねて裁判官なり、諷刺家なり、勸懲家なり。但し、嚴密にいふ時は、フィールディングをして勸懲家たらしめしは、時勢、時尙の然らしめし所なるべく、而して其の作の野に失して高雅の側面を逸したるも、ひとしく時尙の所爲とやいはん。彼れにして若し十九世紀の文壇に生まれれば、豈必ずしもかくの如く野ならんや、技倆の上よりいへば、彼れはデッケンス、サッカレー等に比して、或は優るとも劣ることば無かるべきなり。

ヘンリ、フィールディングの父はデンハイ Denhigh 伯爵が孫にして、陸軍の將官なりき、其の母はた一裁判官の女なりきといふ。一千七百〇七年四月、我が朝寶永四年、湯淺常山生誕の前年、サマーセットシャーヤなるシャーブハム、パークにて生まれき。其の父家眷もびたしく、而して經濟に拙かりしかば、家計夙に不如意となりき。ヘンリは其のはじめ、イトンの學校に入學し、後和蘭に往き、ライアンの學校に入り、法律を修むること二年、二十歳の時、學を廢して本國に歸り、作劇家となりぬ。其の初作「Love in Several Masks」は一千七百二十八年に成れり。爾後五年間に作せし

脚本都合十七篇、其の中にて“Tom Thum”と題せる滑稽劇は尤も世にもてはやされき。されど、文學上の價值よりいへば、此等は皆失敗の作と稱すべし、フィールディングは寫實小説家の鼻祖としてこそ頗る稱すべき價あれど、劇の作家としては重きを置くに足らず。彼れは、其のころ某資産家の女を娶りて、家計や、ゆたかなるを得たりしかど、性來の放蕩と奢侈との爲に、幾ばくもなく此の新家産をも蕩盡し、進退谷まるに及び、千七百三十七年、處世の方針を一變し、法學中院ミッドルテンコートに入りて法律學を學び、同四十年狀師たることを公認せられき。されども其の微薄なる所得は、家政を維持するに足らざりしかば、舊時の如く屢、新脚本に筆を染め、若しくは政治上の小論文を草し、之れを賣りてもて糊口の資とせり。其のころ、政治上に執れりし主義は、デフォー等にひとしく、民權自由の説なりき。一千七百四十二年、リチャードソンに對抗して始めて小説に筆をつけき。“History of Joseph Andrews”『ジョセフ、アンドロース物語』是れなり。蓋し、フィールディングは、彼の徹頭徹尾訓誨的にして、自然、陰鬱なるリチャードソンが作を讀みて、痛く不快を感じしや明かなり、こゝに於てや、一は此のかたはら痛さを癒やさんと欲し、一は競争の念も加はりたれば、好評噴

々たる『バメラ』を取りて、醜弄一番せんと欲し、こゝにバメラの兄ジョセフ、アンドロースといへる者を作り設け、バメラが處女の潔白を守りて若主人の戀に應ぜざりし如く、アンドロース將た青年男子の貞潔を守りて、一向に一寡婦の愛着を排斥するくだりを以て筆を起し、それより筋を轉じ、脚色を設けてバメラの作意を諷刺するうち、そゝろに詩興を催し來りて、遂に純然たる一部の滑稽小説を綴り終るに至りしなりき。『ジョセフ、アンドロース物語』はかゝる手續にて成りしなり。

著者はこの書の表紙に、セルヴンテスに模すと記し、又緒言中に「散文の滑稽叙事詩なり」と言へり。もとより偶然に成りたるにひとしき作なれば、その体裁の不整頓なると推して知るべく、著者自らもまた『バメラ』の諷刺にとて作れるなれば、已むを得ざる由を屢、ことわれり。されど篇中の人物パーソン、アダムス及びブリーチー女の如き、いづれも其の得意の人物なれば、詼諧百出して言動活けるが如く、優かに滑稽小説の一傑作たるに恥ぢず。

翌年『雜集』三冊を著せり。“A Journey from This World to the Next”『この世よりあの世への旅』及び“Mr. Jonathan Wild The Great”『大盜者ジョナサン、ワイルドの傳』の二著はこの

中に含まれたり。後者は當時の記傳家が人物の傳をもつるに當り、偉大といふ點にのみ眼を注ぎ、その善徳といふ一面をば遺却し、ひたすらに浮華溢美の辭を弄するを諷刺し、偉大なる悪人チ・ナサン、ワイルドの逸事を、わざと放大浮靡なる時機文を以て綴りたるものなり。篇中また敘事の妙文に乏しからず、作者の聞見知識の博廣なることを窺ふを得べし。この書、實は『ヂ・セフ・アンド・リュース』よりも前に脱稿せしものなりといふ、果して然らば、フィールディングが近世社會小説の祖となりし素の既にこの際に成れるを見るべし。

それより數年の間、フィールディングの消息は杳として知られざりしが、恐らくは債鬼に攻圍せられたる窮生活中にありしならんか。その間に、或政治新誌に關係し、その縁にて初めて貴族リッタートンと相知り、その人の周旋にてウエストミンスター區の警視總長となることを得たりき。リッタートンは更にまたフィールディングを眷顧扶助して、遂にその一代の傑作『The History of Tom Jones, a Foundling』(孤兒トム・ジョーンズの傳)をもつせしめき。この書小説として少くとも空前の名作なりしと衆批評家のいへるが如し。殊にその文章はフィールディングがあらゆる困苦を凌

ぎて推敲し出だし、ものにて、巧妙なり、とりわけ各篇の序詞の如きは、サクカンシー及びジョー・ルッ、エリオットさへも模倣せし程の名文なり。さて此の小説はオールチオ・ジョーといふ獨身の紳士が倫敦市より家に歸りて、不思議にも、己れが臥床の上に可憐の孤兒を發見すといふことに筋を起し、この孩兒トム・ジョーンズを主人公として綴りいだしたる長篇なり。篇中の人物中、紳士オールチオ・ジョー、紳士ウエスターン、可憐嬢ソフィヤ、卑むへきファイフィル、をかしきバートリッチ、及び作者の分身とも見るべき主人公トム・ジョーンズの如きは、この書を一讀したる者の長く忘るゝ能はざる性格なり。但し、全篇に通して無用の支離、挿話の頗る多きと、其の匆忙として不自然の收結に終れると等は、其の大なる缺點なるべし。

二年を経て『アミリヤ』(Amelia)と題せる最後の小説出でたり、女主人公アミリヤは作者が最愛の亡妻を標本として成れると疑ふべからず。この著前作に比すれば大いに活氣を減じられたれど、其の人生觀察の頗る沈着となりたる處あるより、サクカレの如きは、『トム・ジョーンズ』及び『ヂ・セフ・アンド・リュース』には反感を抱きながら、『アミリヤ』には全然たる賛意を表しき。フィールディングは、晩年善く職に努め

倫敦府内の鼠賊を誘擄して名ありき。然れども壯時の蕩逸は其の老時に報い、身心漸く衰弱せしかば、一時英國を離れて葡萄牙のリスボンに遊び、治療に手を盡しかど、つひに其の効なく、一千七百五十四年、ペイロンが激賞して“the prose Homer of human nature”（人性を描ける大叙事詩家といへる此の一作家は、齡未だ知命ならずしてみまかりき。翌年絶筆『航海日誌』出版せられき。

フィールディングの作は、決して高雅とは稱すべからざるも、常に強健にして辭々風發の概あり、人事の全豹に通ずるとリチャードソンに數倍し、滑稽洒落の文辭ながらに推敲洗鍊を重ねたりしとは、た『バラメ』の作者若しくはスモーレット等の比にあらず。英國社會小説の開山としてその名近世に高きと、所以ありといふべし。

第九章 スモーレット及びスターン

スモーレット——生涯及び著作——『ロデリック、ランドム一代記』——其の作の特質——『サムフレ、グリーンカー』——スモーレットの社會觀——人性

研究——スターン——生涯——爲人——著作の特質——文牀

リチャードソンの如き嚴格なる道念なく、フィールディングの如き縱横なる詩才なきも、

暢達の筆に世相を直寫し、以て一代に名を博し、面白き物語の作者として今尚ほ普通の讀書社會に歡迎せらるゝは、トビヤス、ジュールジ、スモーレットなり。彼れは一千七百二十一年（我朝享保六年、建部涼岱三歳）スコットランドの一名家に生まれ、祖父の手に育せられて人と成り、十二分の教育を享けたり、然るに二十歳の時祖父を失ひ、忽ち生計に困窮せしかば、乃ちまづ詩文を以て身を立てんと欲し、かねて綴り置きし處女作“*The Reginio*”（絨逆）と題せる一悲劇を懐にしてロンドン市に上りぬ。かくて此の作を名優カーリックに示し、直ちに之れによりて梨園文壇に位置を得ん、心なりしが採用せられざりしかば失望し、其のはじめ醫學を修めたりしを傳手に一軍艦附きの外科醫の助手となり、爾來まづ海外に航遊し、一時は西印度に寄留せしともありき。其のチャマイカの島にありしや、多少資産ある一女子を娶り、更に幾多の變轉を経て、一千七百四十四年、再びロンドンの都に歸り、醫術と文學とによりて身を立てんと試みき。一千七百四十八年、初めて小説の作あり、上下二卷、是れ其の傑作にして“*The Adventures of Roderik Random*”（『ロデリック、ランドム一代記』）と題せる者なり。スモーレットが特殊なる筆致及び其の長

短所は、尤もよく此の作にあらはれたり。此の作は當時流行の自叙傳小説にして、主人公は蘇國人なり、其の一代の閱歷、境遇、行爲、性質、までも、著く作家自身のに似たり、按ふに、全體の結構は、佛の名家ルサーシ(Le Sage)の著者を學び、事件及び人物は、重に自家の閱歷を本とせしならん。されば主人公ランドムが三度海外に漂遊せし狀を寫し、殊に粗朴なる水夫の生活を叙せるあたりは、宛然活畫に臨むの感あり。この作いたく時尙にかなひて、文名立どころに揚りしが、スモーレットはもと創才にあらず、又結構の妙才をも有せず、いはゞ豐饒なる見聞を自在に報告する底の文才たるに止まれり。彼れは韻語をも能くし、脚本を作り、又屢、政論乃至諷刺文を物したり。彼れが多々益、辯ずる力量は異とすべきも、その千言萬言は、一として讀者を驅りて詩的別境に入らしむるあたはずして、たゞ俗懷を悦ばしむるに足るのみ。彼れは、人性を觀察するの力より觀るも、脚色を布設するの伎倆より見るも、また美術的品位より見るも、到底リチャードソン若しくはフィールディングに及ばず。その作意、筆跡を概見するに、狡獪は之れ有るも、巧妙はいまだし、談諧は之れ有るも、諷諧はいまだしと評せざるを得ず。其の作中に見いださるゝ奇事異聞は、卑猥なら

されば、慘刻、慘刻ならざれば、奇怪なり、讀者にして、識見高ければ、屢、眉を顰めざるを得ざるべし。されば、彼れもまた一個のユーモリストなり、時に人情の琴線に觸れて、眞に他を悲喜せしむるの伎倆なきにしもあらず。たゞその多數の作中にさる妙處の寥々たるを憾むべしとなす。按ふに、これもまた時尙、時風の然らしめし所なるべければ、ひとり作家のみを咎むるは酷なるべし。一千七百五十一年『The Adventures of Peregrine Pickle』四卷を作せり、嘲諷餘りに露骨にして、淺俗の失溢れたれど、流石に簡捷にして、諷諧の妙なきにしもあらず。翌々年『The Adventures of Ferdinand, Count Fathom』を著しぬ、作者は傳奇的小説たるべき心算にて物せし由なれど、その主人公が斗屑の小人たりし爲め、傳奇風の跌宕飄逸の氣品なく、頗る不評なりき。是に於いて、スモーレットはその方面を轉じ、『ドン・キホーテ』を翻譯し、又『Critical Review』『評論』といふ定期刊行物を起しき。該誌面大半は主筆一人の筆に成りきといふ。既にして彼れは、舊怨ある某將軍を捉へ、匿名にて、諷刺の筆を揮ひたりしが、遂に發覺して罪を得、まばら獄に繋がれき。獄中にてセルヴンテスを模したる小説『The Adventures of Sir Lancelot Greaves』を物せしが、とり

出で、評するに足る作にあらず。

出獄の後、國史の編修に従事し、一千七百五十八年“Complete History of England”『英國全史』を脱稿して出版し、この書はシーザーの攻略に筆を起し、一千七百四十八年を以て畢れり。生來史家の資にあらずしが故に、この編の如きも只雜然と不確定なる事跡を臚列したるに過ぎざりしかど、近世の事を敘するに及びて其の筆意を改めしかば、記敘活動の妙あり、爲めに彼れをして當時第一二流の史家たりといふ世評を博せしめき。然るにその頃より健康漸く衰へければ、醫師と友人とを携へて大陸に歴遊すると二年、旅中“Travels in France and Italy”を著しき。この紀行文彼れが晩年の名聲を添ふるに力ある作なり。かくて以太利のシッコロンに滞在、最後の精力を集注して“Expedition of Humphrey Chinker”三卷を作しき。この書實に一世の傑作たりしなり。版成りて數週の後、溘焉としてみかまりき。時に一千七百七十一年。

『ハムフレ、クリンカー』は、全篇書信體にて成れり。主人公マッシュ、プランブルがその健康を恢復せんが爲めに、バスに行き、ロンドンに行き、蘇格土の高地に

行き、又グロースターに行きし結構などは、恰も作者が閱歷と境遇とに似たり。この一行の出來事は本篇の骨子となりしものなるが、ハムフレはプランナルに陪從せる者の隨一人に過ぎざるが故に、この作正しくは『マッシュ、プランナルの漫遊』と名づけべきなりき。概しては例の滑稽にて、輕妙の致もまた例の如くなれど、その諸人物のいづれも歴たる性格を備へたる、その筆意に人類全體に同感を寄せたる跡あるなどは注意すべし。この傾向を具ふるに及びたる際に更に數年の修練を積ましめしならば、スモーレットの進境或は大に見るべきものありしならんに、天壽を假さざりしは惜むべし。

ゴッス氏は、最も高き見地に立ちてスモーレットの小説を見れば、その不具拙劣の點として先づ目に入ると共に、その明かに一家の軀を具へて、近世の大家に少からぬ影響を與へたる跡あることも蔽ふべからず見ゆ。フィールチンクなくしてサッカレーよくサッカレーたると能はざりきとすれば、スモーレットなくしては、ヂッケンスもよくヂッケンスたること能はざりしなるべしと。それ或は然らん。

スモーレットの小説は、總評すれば、武人的ともいふべきなり、彼れが描ける社會は、之

れを十八世紀の社會として見るも、尙あまりに亂暴狼藉に過ぎたり。彼れが描く所の社會を實際の社會なりとすれば、眞に厭ふべく、怖るべき社會なり。少女若し誤りて一たび此の社會にさまよひ出づる時は或は忽ちに成女となるべき虞れあり、男子一たびこゝに出づれば、或は復た歸ることを得ざるべき恐れあり、鼻をそがれ、指を失ふが如き事は室内街頭に於ける尋常普通の爭論の結果なりしが如し。要するに、毆打殺傷は當社會に於ける不斷の出來事にして、鮮血淋漓の慘狀は常に目に觸るゝ現象なりしが如し。女性も怒れば男子の面上に鋭き爪の痕を印し、ベレクリン、ピッルの如き上流の紳士も、時々嚇怒して、會釋もなく他の紳士を痛打す。買色などは殆ど公然に行はれ、更に厭ふべき非倫の姦淫すらも行はれたりしものゝ如し。總じてスモーレットの畫ける人物は、主人公の位置に立てる者すら、私慾甚しくして殘忍なり、其の酒に耽り、情に溺るゝ點は、フィールディングの大差なしと雖も、後者のゝ如く洒落ならず、快活ならず、將た善良ならず。スモーレットの主人公は粗野にして狂暴なり、其の情甚しく熱したる場合には、甚しき破廉耻をも敢て行ふ。到底今日の讀者の深く同感する能はざる所なり。况んや主人公以下の男女に至

りては、宛然たる娼婦、マドロスに似たるもの多し。

若し、實にかゝる亂倫狼藉なる世間事相を英國十八世紀の世相なりとし、之れを活寫せるを當代の社會小説なりとし、之れを喜び讀めりし者を當時の公衆なりと思惟せば、人皆其の何故に一大革命の機運の急ぎ迫らざりしかを異しまざるを得ざるべし、然れども、由來寫實的小説は、就中諷刺の旨を含める者は、世間相の美なる側面には簡疎にして、をさゞ醜惡なる側面を誇張する者なり、彼のスモーレット等の作に現れたる卑陋と狼藉と殘忍とは、明かに英國十八世紀の醜惡なる一面を誇張せるものにして、テームの所謂其の高雅なる部分、は之れが爲に寫し洩らされたる趣あり、隨うてスウィフト、スモーレット、フィールディング等の作を、若しさながらに其の時代の實相なりきと信ずる者あらば、そは甚しく史的觀察を誤る者なりと評せざるべからず。よし假に一步を譲りて、英國十八世紀の世態は眞にかくの如くなりきとするも、尙おのづから一種の防腐劑ありて、一方には能く社會風俗の壞亂を防ぎ、他方には能く作家品性の大墮落を防ぎたりし事實あるを記せざるべからず。防腐劑とは、他無し、英國人の本性と當時漸く弘通せんとせりし**人性研究**の氣脈

となり。彼等の聰明なるものは、單に社會の外面を觀察し、實寫するのみをもて満足するものにあらず、更に進みて其の由りて來たる原因、即ち人心内の機微をも探らんとするなり。是れ彼等をして墮落の中道にして自省自誠せしむる緣たり。例へば、スモーレットの放縱と粗野とを以てして、尙彼の『ハムフレ、クリンカー』の著あり。こは小説に似て小説にあらず、種々の人物の通信に擬して、英蘇各地方に於ける人情風俗の精緻なる觀察を録せるものなり。すなはち種々の人物をして交、其の特殊なる觀察の結果を語らしめ、よりて以て其の特殊なる性格を表現し來たる名けて一種の氣質物とも稱しつべし。此の人性研究の氣脈は、早く已にチーサーの作にも見え、エリザベス時代の諸劇にも見え、ベン、ヂンソンの作にも見ゆ。之れを名けて内インナー人の研究といふ、而して個人の場合に在りては、自省と名づく。個人にして自省の念あらば、其の徳性の墮落を救ふに足るべく、社會に心性研究の風盛えて、所謂主觀的觀察流行せば、また以て其の大腐敗を防ぐに足るべし。而して英の十八世紀に最も著く此の氣脈を代表せりしものをローレンス、スターンとす。

ローレンス、スターンは一千七百十三年に生まれ、同六十八年にみまかりき

(我朝平賀鳩溪と約同時代)。その性質はその作物の奇なるが如くに奇なり、眞個時人傳中の人物と評すべし。愛蘭土の出生にして家甚だ貧しく、父の下士たりし爲め、其の部屬の變移する毎に父に隨うて諸處に流寓し以て幼時を送りき。父歿して後、母かたの親戚に扶持せられてケムナリッチの大學校に入り、三年にして業了へ出で、僧となりて教會に就職しき。こは彼れにとりては、最も不得意、不適任の職務なりしに、奇なる哉、彼れは、一千七百三十六年より同五十九年まで二十三年間、無言の田舎牧師を以て満足し、毫も他を顧みざりき。一千七百四十一年、資産ある妻を娶り、一時に窮困を免れければ、それより後は繪畫と提琴と銃獵とを是れ事とし、復た業を修めず、或は同僚の僧と争ひ、或はその妻を虐遇する等、放埒不羈に至る所なかりき。かくて千七百五十九年、齡五十六にして始めて文筆に従事し、翌年一月『トリストラム、シャムデー』『The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gent.』二卷を著しき。こは後年作者をして一世に名を成さしめし、長篇小説の發端にして、兼ねて彼れが眞生涯の端緒なりき。その第一卷は、脚色にも文章にも一奇なけれど、第二卷よりは漸く蔗境に入り、文辭また奇警、大に時人を驚しき。於是

スタインは機を外さず、先づ『Sermons of Mr. Yorick』といふ説教集を出だし、翌年更らに『トリストラム、シャンデー』の第三巻及び第四巻を著しき。文致の奇異斬新、観察の穿細深刻いよ、讀書社會の注目を牽きぬ。然るにこの頃よりスタイン漸く健康を損じければ、暫く執筆を廢してひたすら酒食を愼みしかど、快活猿の如き質とて、久しくかくてある能はず、又放縱に立振舞ひ、且つ前作の後篇五巻及び六巻を綴りなどして大いに病勢を進めしかば、竟に伊太利に轉地するの已むを得ざるに至りぬ。かくて三年を経てその第七巻及び第八巻を携へて本國に歸りき。これ本篇中の歴卷なり。さて翌年は『説教集』の續篇を出だし、翌々年は『トリストラム、シャンデー』の第九巻即ち終巻と『A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick』とを著しき。是れより先き、再び伊太利及び佛蘭西に遊びしが、歸る程もなく倫敦の寓居に於て、知己縁者もなき假居中に、病あらたまりてみまかりき。スタインが作は、おしなべて、亂雜不秩序なり、筆にも想にも矛盾の個處甚だ多く、其の人生觀粗厲ならざれば、刻薄、寛雅、温潤の致なし。然れども、其の得意なる諷諧の警句を用ひたる箇所を讀むに及びては、そいろに人をして髣髴シェイクスピアの面

影を想起せしむるもの少なからず。一言に評すれば、彼れが作は常に恰も作者その人の如く常經を脱す、容易に端倪すべからざるの概あり。
 ティヌ彼れを評して曰はく

「スタインは眞に奇才といふべし。彼れは、フライント、モンテ、インサイ、ミ明みの混合なり。恰も網膜病の患者の如し、神經の刺激甚だ激烈にして而も劇變測るべからず、忽ちにして運鈍、蹀躞、忽ちにして穿銳、透徹、時としては通常人の見る所をも見得ざるこゝあり、時としては精緻なる眼力の尙ほ及ばざる所を觀破するこゝあり。彼れは實に病的偏心偏長の質なり。僧にして兼れて蕩兒、提琴、彈きにして兼れて哲學者、母の餓死するを忍びながら死にたる驢リノを見ては酸鼻せし奇癖家。(中略) 彼れは謹嚴莊重なるものをいやしみて、偽善矯飾リノなりとし、痴呆の情態を見て可憐なりとせり。彼れの作中の僧にして奇人たるヨリックは明かに作家の半身なり。

ど。以てスタインの爲人を知るべし。ヨリックは『トリストラム、シャンデー』の假設の話説者、又彼の『センチメンタル、チャーチー』の話説者なり。すなはち作者スタインが假に此の名を被りて、例の自叙傳の筆法にて、シャンデー一家を中心として生活の内秘を叙寫せるもの、之れを『トリストラム、シャンデー』となす。篇中の主なる人物は、終始影の如く朦朧たる主人公のトリストラムにはあらで、其の父ウォルター、

シャンドンといふ商人の隠居、其の妻エリザベス、及び其の叔父トビー、シャンドン、並びに其の僕コオフレル、トリムなり。通篇ことさらに次第を錯亂し、げに畸人の物語るはかくもあらんと思はるゝやうに、奇談百出、縦横滅裂、警句險語、沸くが如し。要するに、彼れが作の第一の特質は、人物の性癖を描畫する筆の、平叙的にあらずして、暗示的なる所、即ち讀者をして言外の隱微を冥悟せしむるやうに物する點にあり、之れを劇詩的筆法といふ。而して第二の特質は、觀察の穿細なること、第三のことは、通篇何等の脚色も無きこと也。

テーマ又評して曰はく、健全なる思想の前進するや、個々の想念打ち揃ひて次第を紊さず、整々として進行す。病的思想の進行に至りては、個々の想念相排擠し、顛動亂争して、めい／＼に競進す。(中略) スターンが調子は二分間とも同様なる能はず、忽ちにして笑ひ、忽ちにして激し、忽ちにして怒罵し、忽ちにして驚愕す、慘として惻むと見れば、哄として大笑す。亂脈又亂脈、事物を顛倒し、條理を滅裂して顧みず、而もその自在に讀者を玩弄する趣は、猶操り師の偶人を弄するがごとし。彼れが尤も好みて率く操り、絲二條あり、一條は女性的愛憐といふ線にして、今一條は譏刺

諷嘲の線なり。彼れは小き蠅蟲の爲に流涕し、死にたる驢の爲に嗚咽し、若しくは籠鳥に同感して泣く、而も能く讀者をも泣かしむる力ありと。スターンが譏刺滑稽に巧なると同時に、讀者を泣かしむる悲哀の筆力あると、寔にテーマの言の如し、而も其の實は甚しき爲我者にして、忘我の清徳ありし者にあらず、眞慈仁の人にあらず。所詮、スターンは有數の奇才なるのみ。

終りに、彼れが文章につきて見ん。彼れは古人の何人の體にも據る所なかりしかど、自己の一風を開くに至りし經營は、大方ならず、殊にその晩年の作を見るに、辭辭銑鍊を重ね、句々推敲を經、詞致と節調とを兼ね具へて、而も斧鑿の痕を止めざるに至りて止めり。當時の作家は、大概特殊なる文體を用ひしかど、スターンの如くに全然創規に屬せるものは稀れなり。彼れは常に佛蘭西の諸家の文を精讀しきといへば、その筆は或はそこに胚胎せしならんか、兎も角も後の Dickens 等に資する所ありし功績は認めざるべからず。

第十章 其の他の小説家

小説發達の第一期——四名家の特質——其の他の作家——フィールゲンケ

英國小説發達史の第一期は、一千七百四十年の『バメラ』に始まりて同七十一年の『ハムフレ、クリンカー』に終りき。その間三十一年、名家の數僅かに四人に止まりしも、尙寫實の一面を開いて近代小説の導火となりしは多とせざるべからず。件の四家は精査すれば、その特質のく異なりと雖も、その間また相通同せる性質なきにあらず。其の主題の、いづれも人の性情なりしは其の一にして、其の作するに至りし動機の訓誨教導にありしは其の二なり。リチャードソンが勸懲、フィールディングが諷刺、スモーレッドの憤怒、スターンが諷諧皆其の實證たり。當時この四家を中心として小説壇に打出でたりし諸作家は、いづれもまた期せずして同様の目的と方法とを取りにき。其の中伎倆と作意とに於てや、重きを置くべき者は左の如し。

サラ、フィールディング（一七一〇——一七六八）はヘンリ、フィールディングの妹にして一千七百四十四年『David Simple』（小説）二巻を作しき。この書の結構はリチャードソンとフィールディングとの中間にあり、即ち前者の如く柔弱ならず、後者の如く粗暴

Sarah Fielding.

ならず、殊に友誼の情の切なるを寫して要を得たれど、筆力の兩家に及ばざるは勿論なり。阿兄の文名高くなりし後は、また筆を染めざりき。

リチャードソンの筆法を進めて一段哲學的たらしめしものを博士サミュエル、ジョンソンの『ラセラス物語』(“Rasselas, Prince of Abyssinia”)となす。是れ作家が窮困のうち母を喪ひ、其の葬式の費用に充てんとて、筆を執ること僅か八夜にして作りき、と傳ふる作なり。人生の希望の大かたは空だのめなる由を有形に寫し、いたしたる寓意小説なり。十八世紀の後半を代表せし一大家の人生觀を窺ふ料として永く讀まるべき運命を有す。

ジョンソンと同傾向ながらも、流石にジョンソンの如く理窟に趨らずして、先進諸家の裏を折したるが如き作は、詩人オリヴァー、ゴールドスミスの小説なり。ゴールドスミスの生涯と事業とは、別に韻語の詩人として下にトムソン、グレイ等と共に語るべければ、今は只、其の小説の上のみにつきていはんに、彼れが小説家としての名譽は、ひとへに其の唯一の傑作『The Vicar of Wakefield』のみによりて繋かれたり。此の作は其の脚色の上よりいへば、取りわけて其の下半の結構には、頗る不自

Goldsmith.

Johnson

然なる箇處も多くて批難をまぬかるゝ能はされども、其の感想の清、其の田家生活を目に見る如く、愈寫したる筆の妙、主人公ドクトル、ブルムローズといふ地方牧師の善良なる性格及び其の他の數多き人物をして、髣髴活現せしめたる靈妙の想像は長永に翫賞せらるべき價值あり。ゴールドスミスが此の作を公にせしは、一千七百六十六年(三十八歳の時)なり、即ち其の詩人としての名聲已に世に高かりし頃なりしが、出版の當時には世間はいまだ此の作の妙を認めざりしものゝ如し。近時の考査によれば、此の小説をして大名を博するに至らしめしには、獨の大詩人ゲーテの評與りて大に力ありきといふ。ゲーテはいたく此の作を稱美し、面白く巧みに物せられたるのみならず、こは實に不滅の物語なりといへり、其の不易の價值あるを稱へたるなり。げに、この作の長所は、その思想の僻せざる所におり。ゴールドスミスは、ジョンソンと同様の悲風慘雨を経來りしかど、その結果彼れに於ては剛愎の人を作りたれど、此れに於ては溫柔の人を作りたり、ゴールドスミスはジョンソンの如く失敗を経るごとに我強くはならずして、次第に薄志に流れたりし如し。さればゴールドスミスの作は、作者の意識したるまゝの意味にては、何程の内

Francis Burney.

容もなきことなれど、十九世紀に至りて、他人別に新釋を附し、大に作意を擴充するに及び、價值更に加はりぬ。ゲーテ率先して評すらく、こは人生のあらゆる迷路より人を救ひ出だすものなりと。

ゴールドスミスは、もと韻語詩人なるがゆゑに、散文の筆致ながら詩旨の飄渺たる叙記少なからず、并カー、オフ、ウエイクフィールドは、こゝかしこ優かに散文の詩として讀むに足る。

ゴールドスミスの外に、特に注意すべきはフランシス、バーチーなり。フランシス、バーチー女史は、一千七百五十二年に生まれて、一千八百四十年に逝りし、半は十九世紀にまたがれる女作家なり。後にダーフレイ夫人 Madam D. Arblay と呼ばれて、文名一世に震ひたり。當時女作家いと多かりきと雖も、サラ、フィールディングとチェーン、オースチンとの間に立ちて、男性作家と相伍して作家中に錚々たりし者は、此の『エヴライナ』(Evelina) の作者なり。女史は有名なる音樂史家ドクトル、バーチーの女なりき、其の著す所の小説は『エヴライナ』の外に、『Oecilia, or the Memoirs of an Heiress』、『A Picture of Youth』等あれど、今尙讀まるゝは、前にいへる『Evelina, or a Young

Lady's Entrance in to the World」と題したる小説のみ。此の『エヴライナ』は、女史が廿六歳の時世にいでしが、作せしは十何歳或はいふ十五歳との時なりき。はじめて世の中に立ち出で、種々の甘酸を閱歴せる年少女子の自叙説に取り做せる此の作を、はじめは名を隠して出版し、父母にすらも知らせざりしかば、Little Fannyの作たることは、暫らくは何人も知らざりしが、後に其の名の喧傳せんとするに先だち、博士サミュエル、ジョンソン之れを聞き知りて大に感ぜ、リチャードソンのにもはぢざる妙句あまたありと褒めたりへき。

さはいへ、十八世紀末葉の女作家、社會小説の作家中に、自然群を抜ける第一の俊才は、チェイン、オースチン女史なること、今は殆んど動かすべからざる輿論たるに近しと雖も、予は、講述の都合によりて、女史をば十九世紀の文壇に屬せしめ、一旦十八世紀の小説史を結收せんと欲す、而して若しオースチン女史の作を十九世紀の文壇に屬せしむれば、十八世紀の小説作家中、他に取りいで、いふべきは、Chrysal、or the Adventures of a Guineaと題せるスモーレット風の卑陋なる戯作に一時の虚名を博したりしチャールズ、ジョンストン。『Castle of Otranto』といへる傳奇風の小説

を作りて、傳奇派の中興とも見做さる、ホレリス、ウォルポール、スターンを學びて種々の沈鬱なる小説を作し、『The Man of Feeling』に今尙文名を傳へたるヘンリ、マック、ンチーなど、數名に過ぎず、要するに、皆第三流以下の作家也、十八世紀に於ける小説文學は、スモーレット、スターンに至りて一頓挫し、其の後數十年間は著き進歩無かりきと評すべし。彼のチェイン、オースチンとウォルター、スコットとが如何に此の沈滞を翻轉して一の新しき清流を聞きしかば、近世文學史のはじめに説かん。

第十一章 サミュエル、ジョンソン

十八世紀の前半と後半——風尚の平等時代と差別時代——ジョンソンが一代に翻たりし所以——ジョンソンの傳——其の著作——『英國大辭典』——『ラセラス物語』——文學會——『詩人傳』——ジョンソンの特質

十八世紀の前半は、言はば文學上の中央集權時代にして、英國の文運は明かに首都倫敦なる或詩社、文人社の左右するに委却したるもの、如く、所謂擬古詩風の最高潮に達するや、苟も詞壇に立つ者は此の風潮に逆ひては殆ど生存せんこと難く、想も、筆も、毎に中央文學の趨向によりて拘束せらるゝを例としたりき。これが爲に、

彼のライマール一輩の詩學論の唱へらるゝや、全國の月旦靡然として皆之れを準とし、アレクサンダー、ポープの詩王と崇めらるゝや、全國の製作翕然として皆彼れが作を師表となせりき。按ふに、こは必しも當代の作家等が特行自主の操志に乏しかりしが爲にあらず、詞客と詞客との交際(就中、主なる詞客間の交際親密にして、斷えず相往來して談論するの結果、知らず識らず異色を抹殺し、圭角を削除し、相感化する)こと著かりしかば、文致も、觀念も、詩學說も、修辭論も、次第に同準に歸着せざるを得ざるに至り、いつしか風尙を平等にし、同規同律の果を致したりしなるべし。

然るに第二期即ち所謂 **デモンソン時代** に入りては、此の風漸次に變移し來り、詞客の夥しく輩出すると同時に、其の自然の結果として其の相互間の交際は疎遠となり、中には一生相見ざりし程に疎遠なりし者も多く生じ、文學上の中央集權は日を追うて衰運に向ひ、好尙、詩風の統一も次第に破れぬいゝ思ひゝに想を凝らし筆を使ふとなり、竟に其の末年に及びては詞壇全く自由となり、幾多革新派の作家をさへ呼起すに至りき。此の前後二期に於ける著作風の差別は、さすがに其の文致、風調の上には未だ歴々たらざるともあれど、其の作意、觀念の、如何に前半

期は個々相似て、如何に後半期には相逕庭せるかを見れば、十八世紀の第二期が自由革新の太氣を漸次呼吸しつゝありし跡明かなるべし。前半期には、唯一人のスワフトを除くの外は、また大異彩あるを見いだすと能はざるのみならず、其の唯一の大異彩すらも、其の文致の上より見れば、決して大異彩たること能はざりしものなり。然るに、後半期の諸作家は之れに反す、例へば、フィールディングのリチャードソンに於ける、スターンのスモーレットに於ける、デモンソンのゴールドスミスに於ける、ヒュームのギッポンに於ける、同じ種類の作品を物しながらも、其の各自の特質は前後截然として相隔たれり、蓋し時勢の然らしめしところなるべし。之れを要するに、前半期は寡人政治的の文壇にして、後半期は民主政治的の文壇なりしなり。

ドクトル、サミュエル、デモンソンは、此の後半期中に盛譽を博して、殆ど文壇の霸王たる觀ありしが、其の實デモンソンが詞客としての資性、品質は、主として前半期に屬せしむべきものなり、彼れはいづれかといへば、尙古派の文士にして、其の批判眼の如きも、殆ど新派の美を觀取するに堪へざりしものなり。而も此の老博士が前後數十年の間、中央の詞壇に君臨して、あらゆる方面に威信を有せしは如何。他なし、其の

博覽精通の學、其のさすがに群を抜ける見識、其の多方面の詞才、其の富贖なる閱歷と常識、其の堅忍剛毅、自尊傲岸の性格、其の後輩及び社會に對する誠實、其の廉正謹嚴の行爲、これらの諸徳と諸長所とが相合して、深く儕輩を心服せしめしが爲なり。彼れは英國十八世紀文學の殆ど全範圍を代表するの資格を有しき。先づ雜誌氏としては、アチソン、ステールの次に位すべく、詩人、劇詩家としても第三流以下には下らざるべく、小説家としても相應の聲譽を博し、傳記家としても當代にもてはやされ、今尙幾分か愛讀せらるゝの價値を具へき。加之、英國の大辭彙は、ジョンソンの編せる者を以て其の最古の良字彙となすべく、シェイクスピアの註釋も、彼れの經營に係れるもの、他の同代のに比して遜色なし。而して批評家、修辭家としては、其の新派に對して不明なりしにも係らず、明かに當代の第一流たりしなり。其の雅俗に敬重せられて、一代に覇たりしこと偶然にあらざるなり。

Samuel Johnson,

サミュエル、ジョンソンは一千七百〇九年七月十八日(我朝寛永六年、新井白石五十三歳)に生れき、リッチフィールドの書肆マイケル、ジョンソンの子なり。幼にしてリッチフィールドの校舎に學び、一千七百二十八、二十九年オックスフォードの大學に入りぬ、されど、

そこのペンプロック校に在りしと僅かに十四ヶ月ばかりにして一旦退校し、同三十一年に至りてまた更に入學せしものゝ如し。同二年父みまかりて家計は艱難を極めたりき。爾後五年間の事蹟は詳かならねど、彼のヘイウッドにて暫時私學校の教師たりしは、正に此の間のことなりといふ。又『アビシニヤへの航海』と題せる抄譯物を某書肆の爲に物せしも此の間なり。それより二十年間は、彼れが生活的鬭争の時代にして、衣食の爲に俗書肆に役使せられ、鬱憤を忍び、不平を吞み、病を力めて筆を執り、而も屢、衣食に缺乏を感じたりし時代なり。彼れは倨傲にして怒り易く、加ふるに怖ろしき顔色して學童等を叱咤する癖ありしかば、教師としては悉く失敗し、著述家としても兎角に讀者受け妙ならざりき。其のころ自家よりも廿一歳ほど年長なりし寡婦と婚して、其の財産もて一時其の私塾を維持せしかど、これすら水泡に歸するに及びて、一千七百三十七年、僅かに二ヘンス半を懐にして、其の弟子ガリック(後に英の拍箋とも稱すべき名優となりしがリック)と共にロンドンに立ちいで、種々困苦の後『紳士雜誌』(The Gentleman's Magazine)の發行者エドワード、ケーヴといふ者の雇となり(一七三八)ついで『ロンドン』と題したる一篇の諷刺詩

を公にしき、こは羅馬の名家チユエナルの作を模倣せるものにて、之れに對する報酬は十ギニーなりきといふ。是れジョンソンの文名の世に知られしはじめにて、未だ所謂クラフ、ストリートの生涯を脱却せざりし頃の事なり。

一千七百三十九年より同四十四年までは、主と嘲世風俗の筆を揮ひし時代にて、彼の『Debates in Magna Lilliputia』と命題して時の國會の傍聴筆記を四年間『紳士雜誌』に物せしは此の間なり。其のころ詩人サエーと交はり、其の死を悼みて、同四十四年に『The Account of the Life of Mr. Richard Savage』を著しき。こはジョンソンがものせし傳記中の最長篇にして、且つ最も成功せるものなり、篇中逸事瑣話を挿むこと甚だ多く、辭々句々生動の妙あり。好傳記書に渴したりし當時の讀者が歓迎せしは論を俟たず、今に至るまでも讀書社會の珍重する所なり。さて、同四十五年にはシークスピアが『マクベス』を評論せる一小冊子を著はし、同四十七年には未曾有の英國大辭典編纂の案を起こし、テュスターフィールド卿にたよりて此の大業を成さんと欲して其の志を得ず、空しく八年を経過しき。之れより先き一千七百四十八年、ハムナチデッドに暫時閑日月を樂しみ、其の間に其の傑作の韻語『The Vanity of

Human Vishes』を作し、翌年に至りて出版しき。是れはチユエナルの諷刺詩第十を模せしものなれど、其の前作『ロンドン』に比すれば幾等か優り、且つ著者が博學と卓識とを窺ふに足る佳作たり。さもあれ單純なる諷刺と淺露なる句法とにのみ耳慣れたる當時の俗衆はこの詩に對して、恰も希臘語を讀むが如き困難を感じきといへば、作者の之れによりて名を成す能はざりしや論なし。

此のときに當たりて其の舊弟子ダギッド、ガーリックは其の名優たるの聲譽已に隆々として、今や首都に在りて有名なるDrury Lane Theatre(ドリュアリー、レーン座)の座主となり、彼れ其の舊師の未だ其の志をえ成さず不遇の境にあるを痛み、懇にジョンソンを勸諭して其の舊作脚本に若干の筆を加へしめ、竟に之れを時の劇壇に上せたり(一七四九二月)『マホメットとアイレン』と題したるものは是れなり。ジョンソンは此の作によりて、凡そ三百ポンドの潤筆料を得たりきといふ。後に此の劇を修正して世にいだし、改めて『アイレン』と名けたるが、こは脚色も單純、人物の性格も甚だおぼろげなる劣作なり。

今やジョンソンの名聲は漸く世に知らるゝに至りたり。彼れはアチソン、スチール

以後暫く中絶の姿となれりし定期刊行の社會的論文を發行せんと計畫し、一千七百五十年三月はじめて『Rambler』『逍遙者』といふ雜誌やうの定期物を發兌せり、こは同五十二年の三月まで續きぬ、其の間五冊を除くの外は悉くジョンソンが單獨の筆に成れりき。はじめは主筆の名を匿したりしが、其の文致の殊別なるが爲に、程もなく世に知られき。按ふに、ジョンソンが文は、總じて華に失し、巧に流れ、誇張に過ぎ、莊重に過ぎたり、而して其の雜誌氏としての筆は、此の『逍遙者』に於ては尤も拙く、重くろしく、後にホークスチオスが『冒險者』(雜誌)に寄せたるものに於ては軽く巧に、更に『アイドラー』『Tidier』の主筆たるに及びて漸く洗鍊の域に達せり。評論家としての彼れの最長所は人物評論なるべし。常に簡淨の筆を以て事實を狀寫し、その間に精刻なる分析を挿むが如きは、彼れが特得の長技にして亦『アイドラー』の光彩なりき。

さて、彼の『英國大辭典』の編纂も、此の間に於て徐々其の歩武を進めつゝありしが、一千七百五十五年、つひに二大卷となりて世に出でき。此の辭典の卷頭に添へたる二文章は、散文家としてのジョンソンの長所、美所の最もよく現はれたるもの

なり、就中彼のチェスターフィールドに與へし書の如きは、辭簡に、意切に、諷刺婉曲にして銳利なり、後年文學俱樂部に於て同人を壓倒せるジョンソンが談論諷刺の妙技は、夙にこの時に現はれたりといふを得べし。この篇は今も尙ほ諷刺文の上乗と稱せらる。一千七百五十八年四月『アイドラー』といふ定期刊行物を發兌し、頗りに社會、人物の評論文を掲げしが、幾ばくも無くして廢刊し、更に同種の小品をば『Universal Chronicle』といふ新聞紙に寄せ、同六十年の四月まで繼續しき。ジョンソンが小品は、到底、アチソン、スチールの輕妙に似るべくもあらねど、其の人物評、就中 Dick Nim の性格を剖析せる一文の如きは、其の觀察の銳利にして、人性の知識の深遠なりしを證するに足る。但し、同じころの作の最なる者は、彼の寓意小説『ラセラス物語』なるべし。此の作は一千七百五十九年に公にせられたり、然るに後僅かに三週程を経て、結構頗る相似たる『カンヂード物語』(佛蘭士の文豪アルテールの作)世に出でしかば、ジョンソン深く其の暗合を奇とし、かく相接近して世に出でずば、二者のいづれかが他を學びたりと見做さるべきにといへりき。されど、其の相似たるは皮相のみにて、着想も、文脈も、此れ彼れ全く相異なれる者なり。此の作の性質

と眞價とは、既に前章にいへる如くなるが、其の當座は大に世人にもてはやされ、忽ちにして七八版を重ねき。

さるほどに『英國大辭典』成りぬ、英國皇室は之れを賞して年金三百ポンドを著者に賜與せり、此れよりジョンソンが家計やゝゆたかになりぬ。彼れが安樂椅子に倚りて、文壇の先輩をもて目せられ、其の博覽と其の傲岸と其の謹嚴なる行實とによりて昂然衆詩文人に君臨せしは此の際なり。彼れは一千七百六十三年にはじめて其の崇拜者にして兼ねて其の忠實なる傳紀家となりしチェームス、ボスエルと相知り、同六十四年には有名なる文學會 Literary Club を組織しき、其の會員の主なりし者は、ジョンソンを首座として、レーノルズ、パーク、ゴールドスミス、ホーキンス及びバトリック、フォックス、ボスエル等なり。之れをジョンソンが最得意の時代となす。この文學會に於けるジョンソンの談論は、細大漏らさず新聞雜誌に傳へられければ、ジョンソンは暫く評論の筆を執らず、それより一千七百六十五年に至る九年間はシェークスピアの註釋を編むことにのみ従事したりき。かくて五年の後、政事論文“*The False Alarm*”を著し、翌年“*Thoughts on the late Transactions respecting the Falkland Island*”

を同七十四年“*The Patriot*”とその翌年“*Taxation no Tyranny*”を著しき。かゝりし程に齡六十歳に近づき、身心漸く衰老しければ、ボスエルの勧めに任せて漫遊の途に上り、エチンペラより蘇國の東海岸に沿うて北上し、蘇國を一巡して歸り、やがて更にウールズ北部旅行の途につきき。 “*Journey to the Western Islands*”はその折の紀行也。一千七百七十五年、オックスフォードの大學ジョンソンに D. D. (法學博士)の學位を贈りぬ。

一千七百七十七年、英國古今の有名なる詩人を傳論せんと志し、直ちに着筆し、同七十九年より八十一年までに全部の出版を了へき。題して“*Prefaces biographical and critical, to the most eminent of the English Poets*”とあり、現今“*Lives of the English Poets*”と題して坊間にあるものは是れなり。この書の價值はその部分によりて甚しき差等あり、概してミルトン、グレイなどいふ第一流の評論は拙く、第二流以下の品階には秀拔なるものあり。

一千七百八十四年十二月、あまたの知人に圍繞せられて、倫敦なるその家にてまかりき、行年七十五。

チンソンの文章は、ポーブが韻語に於て古學的なりしが如く、古學的なりき、又ポーブが一向に技巧の極を求めしが如く、技巧の極を求めき。彼れはその莊重なる思想を表はさんと欲して、更らに莊重なる文牀を構成しき。是に於て、悲劇も、評論も、傳記も、辭書も、皆等しく同一様の文調をなせり。ゴールドスミス嘗てチンソんに謂つて曰はく、貴下は小魚の耳語を叙するにだに長鯨の吼ゆるが如く物すと。彼れは、政事上に於ては熱誠なる王權黨にして、宗教上に於ては峻嚴なる新教徒なりき。於是、彼れはルッソーを惡みて厄病神の如く罵り、優人ガリツクの華奢なる服装を見てはその背に歩むことを厭ひき。常に謂へらく、著述の目的は教訓にあり、詩の目的はた娛樂のうちに教訓を遂ぐるにありと。かるが故に彼れはシェークスピアを論じて曰はく

『シェークスピアは詩興の爲めに道徳を犧牲にせり。彼れは教訓に注意するこゝ娛樂に注意するが如く深からず、彼れは何等の道徳上の目的もなくして筆を走らせしが如し。』
 (中略)彼れは善惡の領域を明確にするこゝなく、惡の竟に善に抗して成功する能はざる由を示さんともせざりし如し、云々。』

以て彼れが文學評論の立脚地を察すべし。

彼れは爲人自尊剛毅なりき、かるがゆゑに清廉硬直の譽あると共にまた傲岸偏固の毀ありき。さりながら其の平素の行實の謹嚴なる、其の思慮と注意との深き、往々にして淑女子の如くなりき。談話は其の最も得意とする所なりしが、機辯輕妙にしてその文の重々しきに似ざりき。彼れが名聲は今に日に衰へゆくかの觀われども、後の散文家にして多少チンソんに負ふ所あらざるものなしといふを以て見れば、其の人物の大見るべからずや。

第十一章 史傳家及び論文家

史傳の著者——ヒューム——其の略傳——『大ブリテン史』——『宗教の自然史』——ロバートソン——其の略傳——其の著述——ギッボン——其の略傳——其の著述——『羅馬衰亡史』——ボスエル——其の『アロンソン傳』——論文諸名家——パーク、其の他——香簡文

哲學者としてはベークリイ以後に世に出てし英國、否、歐洲思索家の最大なる者の隨一に列し、就中功利論の一導師として名高く、又歴史家としては兎も角も英國史學に一紀元を劃すべき第一筆と稱せらるゝは、千七百十一年に生まれて同七十六年に世を去りし、タギッド、ヒュームなり。蘇都エチンペラ府に生まれて、幼き

より讀書を好み、二十三、四歳のころ已に一大著に志し、一千七百三十九年に『人生論』(Treatise on Human Nature)前二卷を、翌年に至りて其の第三卷を世にいだしき。又同四十一年と二年との交に『論文集』二卷を公にせり。"Essays, Moral and Political"と題せる者は是れなり。ヒュームは、其の思索の方法に於ては、あくまでも近世風なりと雖も、其の政治を論ずる立脚地は、悉く保守的貴族的にして、常に民政主義に反對せり。其の文章は明達透徹優かに論文家の師表たるに堪へたり。一千七百五十年には"Dialogues on Natural Religion"、『自然宗教問題』を脱稿し、同五十一年には"Principles of Morals"、『道德原理』を、同五十二年には"Political Discourses"、『政治論集』を著しき。此のころより家計やうやく裕かに、其の無神論者たるが爲の故に、許多の敵ありしにも拘らず、名聲は尤頗る揚がりぬ。翌年其の名著『大ブリテン史』の稿を起こし、一千七百五十四年其の第一卷(チームス一世紀及びチャールス一世紀)を世にいだしき。この書の始めて出でしや、讀書社會は甚しき詬罵と非難とを以て之れを迎へたり、是れ職として著者が保守主義と無神主義とが讀書社會をして不快を感ぜしめしに因るならん。みづから當時の事を叙して曰はく、予は異口同音に難

せられ、毀られ、甚しきに至りては嫌惡せられき。(中略)英蘇愛三ヶ國中、苟も位階若しくは文字あるの徒にして予が著を忍容せし者は、殆ど一人だに在るを聞かざりき。かくて失意消望のあまり、一たびは姓名を變じ、長く祖國を辭して佛國に歸化せばや、とまで思ひたちしこともありしが、更に勇を鼓して、引きつゞき殘卷を公にし、竟に一千七百六十三年に及びて完結しき、而して世間また漸く其の價值を認め來り、史家としてのヒュームの名聲、一時讀書社會を震動するに至りき。

ヒュームの著は、之れを今日の史學的標準より評すれば、史材の選擇も精ならず、考證も粗漏膚淺なる所多く、事を叙述する法もまた宜しきを失したれど、史學尙甚だ幼稚にして、歴史研究法の未だ具はらざりし頃の著書としては、確かに特筆する價值あるものなり。按ふに、此の著の第一の長所は、其の玲瓏透徹なる文致なるべし、彼の幽玄深遠の哲理をすら平易明瞭に談論解釋するの自在を得し、此の著者のことなれば、歴史的著述に於ては、一段圓滿に其の得意の筆を利用し、はじめて歴史をして一種の玩讀すべきものとならしめき。其の文脈こそ同じからざれ、ヒュームが史を綴る時の目的は、彼のマコーレーの志にひとしく、事實を傳ふるのかたはら讀者

を娛樂せしめんとするにあり、而して此の二目的のうち、後者間々前者を壓倒して興味をゆたかならしめんが爲に、幾分か事實を曲寫し、或は疑はしき野史巷説をも濫引して、正史の尊嚴をそこなひし跡跡からぬは憾むべき瑕疵となすべし。就中、ヒュームが史の大疵とすべきは、其の政治上の偏見なり、彼れは王權を偏重して民權自由の説を蛇蝎視し、此の見解によりて史的事實を取捨推定せるが故に、殆ど正史の半面を埋没するに至りしこと是れなり、二つには、生中に哲學家然たる口吻をもて是非、曲直を辨折せるが爲に、定見無き讀者をして判断を誤らしむる虞れあること是れなり。さもあれ其の雅馴にして明瞭なる史筆は、慙くとも當代以前には未だ曾て見ざる所、英國史壇に一紀元を開きし率先者といふ榮稱は何人も彼れに否拒せざる所なるべし。

此の大著の印刷せられつゝありし間に、ヒュームは更に他の緊要なる一著に筆を染めたり、それは彼れが懷疑哲學の全豹を示せりともいふべき『**宗教の自然史**』(Natural History of Religion)なり。さて一千七百六十三年以後は、佛蘭西に移り住みて、三年餘はパリに駐在の英國公使が秘書官たりき。蓋しヒュームは本國に於てよ

りも、佛國人間に聲譽高く、且つ頗る優待せられき。後また英國に歸りて一千七百六十九年までは内務副秘書官たりしが、退職の後にはエヂンバラに住みて身を終ふるまで妻無く、相應に裕かなる生活を送りきといふ。懷疑哲學者としては今尙大思索家の一人として推重せらるれど、純文學の方面よりいへば、其の位置甚だ高からず、哲學的文章家としてもパークリーの熱火なく、歴史的文章家としてもギボンズの莊嚴と瑰麗とを缺く、所詮彼れの純文學上の特長は、其雅馴と平明となり。ヒュームにつぎて當代の史學壇に名高きは、ウィルヤム・ロバートソン(一七二一生、一七九三死)なり。彼れはヒュームを模倣せしにはあらねど、不思議にも其の氣脈を同うし、其の短長をも同うせり。蘇のミッドロシヤンに生まれて、一千七百四十二年、蘇國教會に入り、はじめはエヂンバラの政事界に民間の名士として知られたりしが、同五十八年『蘇國史』を世にいだすに及び、史家としての名突然として轟きたり。此の著の褒賞として、たゞちにエヂンバラ大學の總長とせられ、兼ねて蘇國修史官に任ぜられき。一千七百六十九年、『**チャールス五世朝の史**』を著し、ついで種々の史的著述あり、其のうち『チャールス五世朝の史』は古來筆力の供し

得べき尤もゆたかなる報償を得たりきと傳ふ。

四九八

ロバートソンの史も、考證穿鑿の精ならざるにヒュームのにひとし、故に嚴密に謂ふ正史的敘事は、到底彼れが著に望むべからずと雖も、其の文致の雅馴にして、或は景物を狀寫し、或は事件を叙説し、過去の事蹟をして粲然讀者の眸頭に現前せしむる筆力は、ヒュームに優るとも劣らざる妙あり、『チャールズ五世朝の史』が幼時のカールイルをして史を愛好する念を喚起せしめきといふも偶然ならんや。只揣摩臆測して、妄に過去を論斷し去る弊は、ロバートソン、ヒューム其の失を一にす。

ヒューム、ロバートソンに次ぎて、其の名と其の功と共に、二者に超ゆる者をエドワード、ギッボンとす(一七三七生、一七九四死)。苟も文學史を講ずる者は、多少の感動無うして此の名を口にする能はざるべし。そはひとり彼れの名の第十八世紀中に歐洲文壇の産出せし最大著の隨一に相伴へる爲のみならず、其の著者の性行が幾多過失の之れに附隨せるにも拘らず、眞に大文士たるの勇氣と熱誠とを代表して餘りあればなり。學に篤きと彼れの如く、誇衒の失なきと彼れの如く、修辭に忠なること彼れの如く、而して終生一日の如く専ら學文の爲に身を獻じたる彼

れの如きは、今古東西に見ると稀なり。彼れは智識の爲に生活し、且つ其の智識を百鍛千鍊し、以て不磨の鐵壁とし、之れを萬古に遺さんとして生活せしなり。彼れの學を修むるや、名の爲にせずして學の爲にせり、故に人知らざるも意とせず、名著れざるも憾まざりしなり。後進の類々として彼れを凌駕して讀書社會に虚名を知らるゝ時、彼れは致々として獨り古記録堆裡に埋頭して、未來の大著述に専念し、時勢の遷移にも驚かず、人生の頼むべからざるをも恐れず、其の業の過大至難にして成功の期し易からざるをも恐れず、泰然として徐ろに大成の機を俟てりき。其の大著に心を潜めしこと前後十五年、彼れ壽ならざりきと雖も、幸ひにも其の業を卒ふるを得て、ギッボンが『羅馬衰亡史』は永く史壇の貴寶となりき。若しヒューム、ロバートソンを以て英國史壇に新紀元を劃すべき第一筆を着けしものとせば、ギッボンが此の著は、更に一揮筆して全歐洲の史壇に新しき紀元を劃し得たるものとも稱ふべき也。

後に語るべき詩人クレイにひとしく、ギッボンは許多の同胞中たゞひとりのみ幸ひにして生存せし孱弱の見なりき。ロンドンのほとりなるバトラーに生まれき。

其の家は舊家にして、祖父の代までは豪商として知られたりしが、父の代に至りて資産蕩盡し、一家俄然として零落しき、されど古川に水涸れずして、流石に幾分の餘裕ありしかば、多病孱弱のエドワードも、醫藥の効によりて、辛くも生ひたち、齡十五歳の時、智力も學識も尙いと淺劣なりしが、幸ひにオックスフォードなるマグダレン大學に入學するを得たりき。大學に於ける經歷は、些も彼れを益せざりしもの如し。みづから曰へらく、予はマグダレン大學に十有四ヶ月を費やししが、是れ實に我が生涯中の最も徒爾にして何の裨益するともなかりし時期なりと。按ふに、當時の大學は、一種の精神的懶眠に耽るの處、徒らに死學を講修して靜坐默考のうち、生氣を鎖磨するの場たりしなり。

十六歳の時、感ずるところありて、從來奉じたりし新教を抛ち、俄に舊教の信者となりき。此の件に關しては、其の自傳(Memoirs)中に頗る詳密なる記叙を遺せり。按ふに、宗教に熱心ならざるギッボンにして此の事ありしは、彼れ自からも言へる如く、全く佛の名家ボッスニー(及びバスカル)が精嚴なる論理に動かされて、智の方面より改宗せしなるべし、情と信念とは曾て其の宗旨論に伴はざりし者の如し。さる程

に、新教信者たりし父は、かくと聞きて大に駭き、ギッボンに嚴命して之れを瑞西なるローザーンに逐ひ、その一牧師に託して更に新教に復宗せしめんと欲しき。一千七百五十四年に至りてギッボン再び新教に復宗し、尙ローザーンの地に止まると五年なりき。其の始めて文學を研讀せんの志を起こし、は此の瑞西寄留の間なり。まづ希臘、羅甸の名著を博涉し、更に佛國近世の諸名著に及び、默讀晝夜を舍てず、鑑裁はた宜しきを得たりき。さて、一千七百五十八年には英國に歸り、やがて募られて國民兵となりぬ。學業は之れが爲に阻礙せられしかど、此の兵事的經驗は書籍の供する能はざる新智識を彼れに供しき。彼れは兵職の身に適せざるを認めながらも、尙兵學に心を潜めて深く講究する所ありし結果は、其の兵戰を叙狀する筆の雄勁明透なるに現れたり。彼れ其の自傳中に叙べて曰はく、「ハムプンヤ」民兵の隊長も讀者或は打笑むならめど、羅馬帝國史の著者にとりて必ずしも無用ならざりきと。彼れは未だ民兵の士官たりし間に、其の處女作「Essai sur l'Étude de la Littérature (佛文)を著せり、文學研究論の義なり。一千七百六十三年に至りて兵役を免ぜらる、すなはち直ちに大陸に渡り、佛、瑞兩國を漫遊して伊太利に入るや、彼れ

が一生の大事業の考案は、忽然として其の念頭に閃きいでたり。みづから曰はく「正に是れ羅馬にての事なりき時に一千七百六十四年十月十五日、予は彼の大殿堂の廢跡の間に沈思しつゝ坐せりし時、彼の跣足の貧僧等がデビター神の堂内にて夕勤の頌歌を歌ひつゝありし時なり、羅馬衰亡の事蹟に關する一大著をなさん念の初めて我が心頭に躍出せしは」と。

さて、其の自傳中の語によりて案ずるに、彼れは英國に歸ると間もなく、史材の蒐集に着手せしものゝ如し、然るに此の時に至りては家計いよ／＼不如意となり、父子共に貧困に沈淪せり。かくて一千七百七十年までの事蹟は詳かならず、此の際彼れは或二三の断片的史的著述を試みしが功を成さずして中絶しき。父の病死せしや、地方を去りてロンドンの塙末に移り、獨身にて家を構へ、時の文學社會と交遊せん企圖なりしが、其の性交際に適せざりしにや、居ると年餘、尙何等の注目をも世間より牽かざりき。一千七百七十年より同七十三年まで、ギッポンは孜々として『羅馬衰亡史』前三卷の著述に従へり、而して其の信友すら此の著の大事業たるを夢にだに想ひ得ざりきといふ。みづから曰はく「稿を起すのはじめに當た

りてや、百事悉く茫々たりき、此の著書の標題すら、帝國衰亡の眞時期すら、其の緒言の限界すら、篇章の區劃すら、敘事の順序すら」と。かくて七年の後、草稿の成りたる分を悉皆焼き棄てんとせしことも屢ありき。ギッポンは其の修辭に苦心せしこと、眞に驚くべきものあり、後々の章はさもなかりきといへども、其の第一章の如きは三度悉く稿をかへ、第二、第三の如きも、あの一／＼二回づゝ稿をかへきといふ、而も件の劈頭の數章は、全篇中の尤も妙ならざる部分なり。文の體制を一定するの困難と冒頭落筆の至難なることとの證は、ギッポンの實例に於て之れを見るべし。

一千七百七十四年より同八十三年までは、衆議院議員となりて英國々會に在りしが、政治家としては特に記すべき程の功過無し。一千七百七十六年『羅馬衰亡史』の第一卷ロンドンにて出版せられき。世人は大喝采をもて歓迎し、男女争うて購ひ讀めりき。同八十一年、第二、第三卷出づ、第一卷に比すれば辭意双つながら優りたれど、讀書社會の歓迎は第一卷に劣りたりき、曲や、高うして俚耳の悦ばざるためし也。加之、第一卷なる最後の二章は、頗る僧侶をして不快を感ぜしめ、論難詬罵漸く甚しきに至りしかば、暫く續篇の筆を止めて之れに答へざるを得ざりしかど、彼

れもと論辯の術に長ぜず、隨うて敵者と闘ふの不利なるを感じき。さればにや、敢て前説を取消さざりしも、其の基督教に對する調子は、次第に穩和となり、中正となり、復た彼の有名なる第十五、第十六章の過激なる叙説を見ざるに至りき。此の苦心經營の間に、家計ますます不如意となりしかば、やがて首都なる其の家をすて、家財を提げて遠く瑞西なるローザンに移り、舊友アイヴルダマと共に住みて、専ら其の業に潜心せり。さて第四卷は英都發足の前に成り、第五と第六とはローザンにて物せられき。彼の人口に膾炙したる卷尾の數行を綴り果てしは、實に一千七百八十七年六月二十七日の月夜、其夜將に半ならんとせし程なりきとぞ。同十八年の夏、最終の三卷も悉くロンドンにて發售せられき。それより後のキッボンが身の上は、また特に記すべき程の事なし。其の身體の漸衰して、宿痼の再發せしと同時に、引き続き其の知友をも失ひ、剩へ佛國革命の擾亂の爲に倉皇瑞西を去りて本國に走らざるを得ざるに至り、一千七百九十四年一月竟にロンドンにて逝りき。時に行年五十七。終生妻を娶らざりしかど、其の最初の意中の人スーサン、テッケルに對しては、永くプレトリーの戀愛を持續せりきといふ。又交友に篤く、親

戚に忠なりき。宗教に關しては、自由思索家を以て目せられ、或は懷疑家と稱せらる。又歴史家としては、前にもいへる如く、ヒューム、ロバートソンに優ること幾段なり、蓋し他の二家の今尙史家として文學史上に推重せらるゝは、むしろ文章上の功績に由れるなれど、キッボンは然らず、彼れが大著は今も尙信憑すべき史として讀まるゝなり。フリーマン曰はく。

近世の考證の爲に(史理以外に)排除せられざる、若しくは排除せられんさせざる十八世紀の史家は、ひゞり彼れあるのみ。(中略)彼れが結構(考案)は、百科全書的(周到普遍)にして、之れを實施するの鹽梅は、た精確周到、成心僻見の弊無く、考證悉く據る所あり、彼れが著は永く史家に重んぜらるべし。

と『羅馬衰亡史』は、このづから三大部に分かる、卷初よりコンスタンチンまでを第一部とし、コンスタンチンより羅馬滅亡までを第二部とし、さてそれより東羅馬の首都コンスタンチノープルの陥落までを第三部となさば、更に穩當なりしならん。實に是れ古今有數の大歴史なるを、十年一日の如く、些も倦める色無く、竟に之れを完成せし勇氣と手腕とは、眞に推服すべきものたり。さて彼れが文致につきては、其の妍媸殆ど何人にも瞭然たるべき筈なるに、不思議にも批判は今尙一定

五〇六

せず、されど嚴密に評すれば、其の雅健と流麗とは人皆の認めざるを得ざる所也、又其の些事を叙狀する筆の動もすれば莊重華麗に過ぎて、兎もすれば波瀾變化に乏しく、洒脱快活の趣致に貧なる、是れはた敵味方の認むる所なるべし。さもあれ、此等文病は重に第一卷に於て認めらるゝ所、卷の進むに隨うて筆もまた頗る進めるが故に、全躰より評すれば、ギッポンが史筆は此の莊嚴なる大歴史に相應したるものといふべく、氣力あり、威嚴あり、精嚴また瑰麗、永く史筆の表極たるに稱へり。

さて、史家としては、十八世紀の文壇また以上の三名家を匹すべき者なし、されどここに個人の詳傳を著してマコーレーには傳紀家の王と稱せられ、隱然英國の文壇に傳紀の一紀元を劃したる者あり、ジェームズ・ボスウェル（一七四〇生、一七九九年死）是れなり。波れは其の爲人よりいへば、屑々たる小人のみ、才器必すしも俊秀なるにあらず、學識はた尋常なりしが如し、而も其の名の人口に膾炙し、其の筆に成れる一部の書は今尙愛讀すべき十八世紀文學の遺物中に數へらるゝは、そもくま何故ぞといふに、其の理二つあり、一は彼れが才の特に社交的現象を觀察し、銘感し、叙狀するに秀絶なりしこと、一は當代第一の名家ドクトル、ジョンソンに心服し、全

力を傾けて其の言行を録せしが故に、其の叙説せる事柄其の物が讀むに足り、隨うて其の穿細なる苦心も現末の讀書社會に認められ、名聲を永く後世に傳へたるなり。

按ふに傳記は英國にては最も晚く花を着けし詞林の一枝なり。之れより先き、ウォルトンが『ドーン』及び『ヘルバルト』、スプラットが『カウリー』、オルチースが『ローリー』傳など、事柄の上よりも、文章の上よりも、ほゞ讀むに足るべき傳記已に乏しからず、出でたりしが、それらは皆舊牒の傳記にして、近世に謂ふ詳傳に近きものは、一千七百七十五年に上梓せしウィルヤム・マソンが著『Life and Letters of Gray』を嚆矢とす。此の『グレー傳』とても、尙甚だ不完全の著述なりしを、ボスウェルが特得の枝倆はそれを摸範として能く出藍の名著を成せり。ボスウェルがはじめてジョンソンに見えしは、其の二十三歳の時（一千七百六十三年五月）なりしが、彼れが彼の博士を景仰せしは、勿論此の時にはじまりしにあらず。一千七百六十八年には、其の著『An Account of Corica』といふを世にいだし、同七十三年にはジョンソンの推薦にて、文學會に入り、同年の暮には夫子ジョンソンと共にスコットランド地方を歴遊し、日々の聞睹および夫

子に關する日常の些事を録すること詳細綿密を極はめたり。同八十五年に至りて『Journal of a Tour to the Hebrides』と題して出版せしは、此の旅行の日記なり。その後六年(一七九一)其の傑作『Life of Samuel Johnson, L.L.D.』『法學博士サミュエル・ジョンソンの傳』成りぬ。サー・ジョン・レイノルツに獻呈すと記したり。世界の讀書社會は此の著を激賞して、今尙古今東西の史書中に於ける尤も面白きもの、五六部中に算ふ。ジョンソンが一身に關する事實の其の坐臥、寢食、一舉、一動、一擧、一咳の末までも、目に睹るが如く叙説狀寫せられたるのみにあらず、英國十八世紀文壇の情況、否當社會の模様さへも此の書を鏡として髣髴するに足る。空前はいふを俟たず、絶後の褒稱すらも、恐らくは否拒し易からざる好著なり。

此の新傳紀の特質は、著者即ち傳する者の見解、褒貶、若しくは推測的論斷等を主とせずして、本尊即ち傳せらるゝ主人公其の人をして、及ぶべき限りは、みづから其の閱歷を語らしめ、以ておのづから其の性質を表現せしむるを旨とせる所にあり。こはボスエルの當時に在りては、マソンの不完全なる一著の外に相似たる先例もなかりしことゆゑ、甚だ大膽なる試験なりしを、彼れが特長は彼れを助けて古今稀

有の功を成さしめたり、若しボスエルにして更に廣く眼を放ち、當時の全社會を觀察して叙寫すること、此の『ジョンソン傳』にひとしかりしならば、其の功名は更に幾等の重きを加へ、十八世紀の文學もまた更に一大著を加へしならん、其の固有の特長のひとり一夫子の周邊にのみ徬徨せしこと、あたらしといふべし。彼れの談話を再現するや、殆ど今の速記者もしかじ、言々句々の間、談者の性癖宛として活動す。彼れは眞に企及し易からざる劇詩的筆力に富める者なり、措辭總じて平淡、其の師ジョンソンが文の誇大過重なるに似ず。

史傳の著者につきて、こゝに紹介せざるべからざるは、時の政事上及び學理上の論議文家なり。按ふに十八世紀は政治上にも、宗教上にも、黨派頻りに樹立して相軋轢せし時代たりしのみならず、上にも一たび叙し置きたること、人々各自自尊の念強く、何事につけても互ひに固く我見を執り、我意を張りてかりそめにも相下ることを肯んぜざりし時代なれば、自然の必要よりして、辯難駁議の筆鋒研鑽せられ、就中、政治界、神學界、乃至倫理學界には、許多の著名なる論文家を出だしたりき。先づ、哲學及び倫理學上の論士としては、上に擧げたるヒームにつきて、ハッチソン Hut-

chasonあり、ハートレーHarleyあり、リードReidあり、又神學上の論士には、監督チセフ
 パトラーにつぎて、ウラム、ペーレーPaleyあり、其の他所謂自然神論派の末輩、メソ
 チスト宗徒の後進中にも、多少注意すべき論客無きべからず、但し其のうちこゝに
 特筆すべきは特クエドマンド、パークあるのみ。

エドマント、パーク（一七二九—一七九七）は、口語上の雄辯家として英のデモ
 スゼニーズと推稱せらるゝことあると同時に、或は英國の最大論文家とも激賞せ
 らる。かゝる評は明かに溢美なりと雖も、其の當代に匹敵なかりしは勿論にして、
 苟も其の學問の該博と其の嗜好の多方面と其の識見の卓拔と其の筆力の縦横自
 在とを合味し得たる者は、所詮彼れが英國文學史中の一偉人たることを認識せざる
 を得ざるべし、但惜むらくは、其の文壯に過ぎ、華に流れて、間々ジョンソンが筆と其の
 病を同じうせり。パークが政事上の論文は、こゝに枚擧するに遑あらず、其のうち
 最も世に聞えて、今尙翫讀せらるゝは『佛國革命論』“Reflections on the Revolution in
 France”なり。又其の文藝に關したる論文は、有名なる『壯美と優美との討究』
 “Inquiry into the Sublime and Beautiful”にして、美學尙幼稚なりし當時の著述としては、

其の價值頗る大なるものなり。

パークにつぎて時の政論家中に錚々の名ありし文人は彼の覆面の文士ジョンヤ
 スJuniusなり。ジョンヤスといへるは、時の兵務局の書記官たりしサー、フィリップ、フラン
 シスが世を忍ぶ一時の假名たりしと今は明かに知れ渡りたれども、其の當時は何
 人も之れを知るものなく、第一流の烟眼家たるドクトル、ジョンソンすら所謂「ジョン
 ヤスの書簡文」をばパークが筆ならんと推測したりき。今日より見ればジョン
 ヤスが文の價值は、其の時事との關係を失へるが爲に、譬へば、殘肴冷灸の如く、其の
 旨味の半以上を遺失したり、按ふに、更に幾十年かを経ば、單に文壇瑣話の一例證と
 してのみ援引せらるべきものならんか。

十八世紀の末葉は、書簡文をしてはじめて一種の文學たらしめし時代なり。是
 れ畢竟政社詩社の盛んにして交際の頻繁なりし結果なるべし。而して此の發達
 に與りて最も力ありしは、グレイ及び其の友のウォルポールなるべく、つゞいては、チ
 スタール、フィールドの第四世の伯、フィリップ、ドオマー、スタンホープなるべし。伯が其の
 庶子に與へし許多の教訓書信は、今日に至るまでも文壇の珍什とせられたり。

第十三章 ヤングよりグレーに至る諸詩人

五二二

詩風の變移—ヤング—「夜思」—ヤングと同期の第二流詩人—トムソン—「四季の歌」—「懶惰城」—コリンズ以下の小詩人—グレ—其の諸作—「墓畔吟」

ポープが詩風の一世に冠たりしや、庸才の徒はひとへに其の蹤を追うてポープが摸擬をのみ力めたりしが、やゝ抱負ある後進は其の到底企及すべからざるを悟りたりしと、時尚のやゝあらたまりたりしとに由りて漸く其の着眼を一變しき、是れ英國の詩歌に近世に所謂自然主義の入り來たりし發端なり。一千七百二十六年にトムソンの「Winter」(『冬の巻』)世に出で、同五十一年にグレーの「Elegy」(『墓畔吟』)でしまで、其の間二十有五年、此の間にあらはれし主なる詩歌十篇餘り、それらは皆新詩眼に基きて成れりしものなり。概しては、詞意沈鬱にして、句々莊嚴、其の調子何となくゴシック風即ち中古風の氣脈を帯び、且ついまだちぼろげながらも、自然の現象を、自然の眞なるまゝに研究せんと欲するの傾向、其の詞句の間に隱然たりき。律格の上よりいふも、從來の諸作は其の眞面目の詩歌なる限りは、すべて彼のヒロイック、カプレットと稱する昂起格の一種をもて物する例なりしが、此の格いつしかに

Edward Young.

廢れて、當時の名作中「四季の歌」の如き「夜思」の如き「墳墓」の如きは没韻律語をもて綴られ、「The Castle of Indolence」(『懶惰城』)の如き「The Schoolmistress」(『女教師』)の如きはスベンシリヤン解もて「The Spleen」及び「Grogan Hill」の如きは八音格もて綴られたり。その他、クレイ、コリンズ等が壯年の作は、いづれも種々の新律格をもて試みられき。但し、一千七百五十四年に發見せしクレイが晩年の經營に成れる諸作の如きは、此の範圍に屬せざるものとす。

當期の詩人中、最も卓越せりし者は「墓畔吟」の作家グレーにして、之れに次げりしものはトムソンとコリンズとなり、而して當期即ち十八世紀の第二期詩壇と其の第一期即ちポープ全盛時代との關鎖となりて、ちのづから其の過渡を代表せる者を有名なる「夜思」の作者エドワード・ヤング(一六八一—一七六五死)となす。ヤングはオックスフォード大學の出身にして僧也、其の作あまたあり、「The Last Day」、「The Force of Religion」などいふ作の外に、劇詩に「Busiris」(悲劇にして舞臺に上せし)時の成功を博せしものあり。また「The Revenge」と題せる劇詩あり、Zangueといふムーア人を主人公として作れるもの、シークスピヤの「オセロ」と相觸れざる所ヤン

この技術にして“Businis”よりは優ると一等なれど、舞臺にては前作ほど好評ならざりきとす。尙其の他にも、諷刺詩、抒情歌など若干あれど、最も傑れたるは“Complaint, or Night Thoughts”『夜思』(一七四二—四四)なるべし。こは九卷に分かれたれ、没韻律語無慮一萬行より成れり、形式の上よりいへば莊嚴にして瑰麗なる所、頗るミルドンの面影あり、其の瑕は語繁きに過ぎて形容虚に流れ、動もすれば花多くして實乏しく、且つあまり長篇なるが爲に、處々巧拙の差甚しく、珠玉、瓦礫相聯なるの感あり、加ふるに、其の人生及び自然に對する觀念一向に悒鬱に偏したるが故に、所説間々中正を失し、此の教訓詩をして其の價値の幾分を減せしむ。されど、此の瑕失を補ふべきものあり、曰はく其の當意即妙の機才、曰はく其の落想の巧、曰はく其の筆致の威嚴と力、曰はく其の律調の流麗是れなり。ヤングについで一時名を知られしは“Pastoral”といふる作を『スバクタートア』にいだし、ザボン、バイロム(一六九二生、一七九三死)“The Spleen”といふるは、八百行の長篇を遺し、マッシュュー、グリーン(一六九六生、一七三七死)、ジョンソンに傳せられて後世に名を傳へし“Vanderer”の作者リチャード、サエージ(一六九八生、一七四三死)、トムソンの『冬』

の巻と同年に“Grougar Hill”を著し、ザボン、ダイヤー(一六九五生、一七五八死)“The Grave”と題したる凡そ八百餘句の没韻詩教訓詩をヤングの『夜思』と同年に(一七四三世にいだし、年壯にして世を辭し、或はヤングよりも優りたりと稱せらるゝロバート、ブレア(一六九九生、一七四六死)、以上數名に過ぎず。此の中ダイヤーはウエールスの人、ブレアは蘇國の人、皆第二流の詩人をもて目すべきものなり。一代の詞宗たるに叶へるはポーアの後、グレイの前、只一人の、ザエームス、トムソンあるのみ。トムソン(一七〇〇生、一七四八死)は蘇國名族の子、神學の學生としてエヂンバラの大學に學び、二十歳のころ已に筆を詩篇に著けき。一千七百二十五年、青雲を欲してはじめてロンドンに上り、衣食窮乏の間(同年の秋)“Winter”『冬の巻』一篇を作し、翌年三月に至り、知音の扶助を得て、世にいだせり、詩人マレット、脚本家ヒル等之れを激賞し、喧傳せしかば、トムソンが詩名たちまちにして揚がりき。一千七百二十七年には『夏の巻』で、其の翌年には『春の巻』同三十年には『四季の歌』完璧となりて發兌せられき。今傳はれるは五千五百行より成れど、初め世に出でし時は行

數はるかにすくなかりきといふ。蓋し版を改むる毎に修正を施し、且つ新たに話譚、感慨等を挿加せし爲め、竟に現存せるものゝ如くなりしなり。此の有數の作は、四季の人事、景物を叙寫するに於て、尠くとも空前の光譽を荷ひ得べきものなり、其の自然を描ける筆は、未だ後のウォルズオースほどに深遠なりといふべからざれど、人事と景物とを錯綜して叙狀し來たるや、讀者をして目に其の物を睹、耳に其の聲を聞かしむるの魔力あり、其の質にして實なる所、第一期詩壇の諸作と全然面目を殊にしたり。『冬の卷』尤も短く、又尤も清新の想像に富めり。而して『春の卷』は、以て作家の學識見を窺ふべく、『夏の卷』は、以て其の敘事の本事を見るべく、『秋の卷』及び其の卷末に添へたる自然の徳を頌するの歌 (Hymn to Nature) は、寫景詩としての趣味の外に、作家の人生觀を髣髴するの料たるべし。

『四季の歌』を著して詩名ロープを凌がんとせし時、トムソン正に三十歳なりしが、牧師某の息が附添教師 (Governor) となりて佛伊に漫遊せり、此の羈旅中の閱歷は、其の作 "Liberty" の資材となれり。但し、トムソンの詩才は其のころより次第に萎靡し、悲劇の作なども數篇ありしが、一千七百四十八年に物せし其の第二の傑作 "The

Castle of Indolence" 『懶惰城』の外は、取りいで、言ふべき價ひ無し。此の作は下二篇に分かれたれ、上篇にては耶らインドーレンスと稱する一妖賊が棲める城郭を狀説し、且つそこに捕はれたる醉生夢死の徒懶惰者の生活に及び、さて下篇にては Arts (技藝) と Industry (勤勞) とを代表せる某武士が、其の勇力によりて竟に此の妖賊を退治する事を叙せり。沈鬱と戲謔とを奇怪にも混合せる作にて、純然たる夢幻的物語也、譬へば、屋氣樓の虛靈にして美妙なるが如し。按ふに、トムソンの當時の詩壇に於ける勢力及び其の十九世紀の詩人に於ける感化は、頗る小少ならざりしに似たり、現にシェリーの如きも『懶惰城』に負ふ所尠からずといふ。而もトムソンの感化と勢力とは、其の及ぶ範圍廣からざりしゆゑに、其の中心詩宗としての名聲は、竟にロープほどに高からで終りたり。

トムソンとクレイとの間に名をあらはし、第二流以下の詩人は、曰はくリットルトン、曰はくクロムヰ、曰はくブラウン、曰はくガヨリツシ (優人)、曰はくウィルヤムス、曰はくウエプスター、曰はくウエズレー、曰はくシェンスト、曰はくホワイトヘッド (桂冠詩宗)、曰はくウィルヤム、コリンズ、是れなり。其のうちウィルヤム、コリンズ (一七二一—生、一

七五九死)は、チェスター市の製帽師の子なり、初めはウィンチェスターにて、次ぎにはオックスフォードなるマクダレン大學にて業を修めき。壯時ロンドンにいで、トムソン等と交遊し、著す所趣からざるなりき。生來多病なりしかば、二十八歳のころ故郷に退き、尙若干の作をなし、が三十歳以後宿痼漸く重り、つひには狂癲の症となり、詞友にだに忘れられて逝りにき。

コリンズの作は今日に遺存せるものいと甚し。専ら抒情詩に秀でたれど、其の作の尤も見るべきは短篇なり。"The Ode to Evening"(黄昏に與ふるの歌)及び"The Passion"などは尤ももてはやされたりし作なり。其の他 "The Ode on the Poetical Character" "Popular Superstitions" "Dinge in Cymbeline" など皆其の詩才の年と共に進みつゝありしを證するに足るといふ、故に近世の批評家中コリンズの夭折を惜む者多し。ヘッス氏はコリンズを評して曰はく、彼れが作には彫像師が刀の趣致あり、其の句々劃然として截然たり、大理石の如く清純なれども、亦た大理石の如く冷かなり」と。

詩歌の最悪時代と貶稱せられたる英國十八世紀文壇の汚名幾分を銷却する者は、

Thomas Gray.

當第二期の殿となれる大抒情詩家、有名なる『墓畔吟』の作者トマス、グレー(一七一六生、一七七七一死)なり。グレーとコリンズとは精査すれば、其の質痛く相異なれりと雖も、一見相似たる所も尠からず。二者共に作に乏しく、又共に抒情詩家たり、二者共に甚しく活喩法、諷喩法をよるこび用ひ、又共に希臘風なる精緻微妙なる筆致を鍊磨し、且つ當時は殆ど等閑視せられ、近年に至りて次第に重視せらるゝ外國文學例へば、中古文學、スカンデナヴィヤ文學、ケルト文學、などに精通したりき。もとより著者としても、個人としても、將た學者たるの點より見るも、グレーのコリンズに優れるや論無しと雖も、醇乎たる天然の抒情詩家としてはコリンズや、グレーに超えたり。コリンズの歌ふや、鳥の歌ふが如く、歌はざるを得ずして歌ふなり、グレーに至りては正に是れ韻語に於ける絶好技術家なり、天然の才資も元より乏しからざりきと雖も、博く學修し、精しく研鑽して、そをますゝ圓滿にせる概あり。要するに、二家各、其の長を殊にせるなり。

ポーブとウォルツオスとの間に立ちて、英文學史の一大詩人と見做さるゝトマス、グレーは、一千七百十六年、十二月、倫敦市に生まれ、イトンの學校にて教育せられ、同

三十四年イトンよりケムブリッジに移り、ペムブローク校に入り、後またピーターハウス校の准校友となれりき。即ち其の過半生をケムブリッジ校内にて過ごし、なり。其の未だ得業せざりしや、已に若干の羅旬韻語を物して之れを世に公にし、又一千七百三十八年には、古代文學中の妙句をぬきて、屢々絶好なる英國韵語に翻しき。同三十九年には、其の友ホレーズ、ウァルポールに伴うて佛伊兩國を漫遊し、其のはじめてアルプスを超えしや、古來の漫遊者が、風流の眼ある詩人すらも、只怖ろしとのみ詠めすてたりし此の歐南の山色のいと氣高く美しきを感銘し、其の友ウエストに書してアルプスの山景を報じ、且つ曰はく「斷岸や、飛泉や、巉岩や、一として宗教と詩歌との旨のみち／＼たらぬは無し」、「Not a precipice, not a torrent, not a cliff, but is pregnant with religion and poetry.」と。癸卯三年、一千七百四十一年に及びて、從來交誼厚かりしウァルポールと端なくも爭論して、友誼破るゝに至りしかば、相分かれ、別々に歸途に就きしが、同四十四年、幸ひにも亦舊盟を尋ぐを得たりき。歸國後二月にして、グレーは其の父を失へり、家事すべて紛然たり。同年冬ケムブリッジに歸寓す。此の年、著す所(一)トムソン風の悲劇詩の斷章『アックリッパン』(二)『On Spring』

(三) On a Distant Prospect of Eton College (四) On Adversity (五) Sonnet on the Death of W. G. (以上皆抒情詩)なり。『墓吟』(Elegy in a Country Churchyard)の稿も、はじめて此の年に起こしたりき。爾後五年間は、グレーが志氣沮喪せし時期なり、彼れは寂黙として、只管ピーターハウス校なる一室のうちに閉籠り、古文學の研鑽に世を忘れたる者の如くなりき。一千七百四十七年、一小冊子を公にす、所謂『Eton College Ode』(イトン學校を憶ふの歌)是れなり、而してこは何等の感をも讀詩社會に與へざりしなり。又彼の可憐なる小品『The Ode on the Death of a Favorite Cat』(愛猫の死を悼むの歌)を物せしも、此のころなり。かくて一千七百五十年までに、更に若干の作あれど、其のうち特筆すべきは『墓吟』なり、こは前後十有二年の彫琢刻鏤を経て完成し、同五十一年の冬、はじめて匿名にて世に出だせり。さてまた同五十三年には、其の既往の諸作に『A Long Story』と題したる新作を加へたる詩集『Six Poems by Mr. T. Gray』世に出でたり。以上をグレーが文學的生涯の第一期とす。第二期に於て、特筆すべき作は、希のペンダルの凱歌エヒニキヤに摸して、むしろ彼れを凌がんとするの抱負をもて作られし『The Progress of Poesy』同じくペンダルの摸して物せし

“The Liberty of Genius (今は只斷章のみ遺れり) 及び “The Bard” 『詩人』なり。『詩人』は一千七百五十四年の冬に起稿し、同五十七年の夏に脱稿しきといふ。同五十六年、故ありてピーター・ハウス校を去り、ベム・アローク校に移り、かくて世を辭せしまでそこに在りき。翌年、其のヒンダルの抒情詩印刷せられて世にいつ、而してクレイが詩名は忽然として揚がり、爾後當代の詩宗をもて目せられき。後數月、桂冠詩宗・コリー・シッパ―逝りしかば、當局者は其の後を襲はんことをクレイに勸めしが、固く辭して諾せざりき。同六十年、六十一年は、専らケルト文學即ち英國古代の詩歌を研究せり、蓋し古詩史を綴らんの心ありしなり。此等ケルト文學の研究は、同年の末に至りて彼れをして二種の『エッダ』^{Edda}がひの詩篇を作らしめき、其の一は “The Futh Sisters” にして其の二は “The Descent of Odin” なり。さてまた同六十八年、其の全集發見せらる。同年ケムブリヂ大學の近世史及び近世の國語の教授に任ぜらるされど、一たびも講説せしことなかりきといふ。かくて同七十一年、六月、ベム・アローク校なる其の居室内にて逝りしまでの彼れが身上の事件は、後進の詞客等と交りて、屢々夏期の漫遊を世に知られざる勝地に試みしと、及び “大學就職の歌”^{University Song} を物せ

し年(一七六九)の秋彼の湖水地方に旅行せしと、其の紀行を散文にて綴りしと、殆ど其の他には何の語るべき事もなし。クレイの如きは眞個平靜なる學者的生涯を過せし人なり。

論者或は、クレイが作の乏しきを咎めて、英國詩人中の第一位に置くを肯せざるものあり、されど詩文人の大小は、量によりて定むべからずして、質によりて決すべき者たり、又其の時尙の如何に詩歌に不利にして作家の神興を促すに適せざりしかをも察せざるべからず。クレイの作は、げに其の量をいへば少なりと雖も、其の詩想の創新と多様と其の意氣の新鮮と剛健とは、共に甚だ多とすべきものなり。

クレイは明かに十八世紀詩壇を結了せる作家たり、彼れは莊嚴なる『墓畔吟』に於てトムソン派の頂點を代表し、同時に彼の派の系統を一斷し、轉じて精巧なるヒンダルの詩風を興し、自然として第一期(オーガスタン)韻語の舊窠を脱して、後のシェリーの爲に新しき詩道を開けり。若し夫れ晩年の作『エッダ』又は彼の眞偽不明なる古詩人オッシュヤンが作に鼓吹せられて物せし小品の如きは、時尙に先だつこと更に幾十歩、明かに十九世紀の詩潮を先示せるもの、純然たるロマンチズム(中古

派又の名傳奇派の作に類す。クレイが精進の蹤以て歴々として徴すべし。オッシュンの事は左に直ちに下に語るべく、ロマンチズムのことは第十九世紀文學の劈頭に語るべし。

詩人にして博覽洽讀學識古今に涉り、遠くは希臘の古文學より、近くはアイストラッド文學に至るまで、苟も文學に關する限りは、之れを修めざるはなかりしクレイの如きは、古今甚だ稀に見る所なり。同代の名士某は彼れを評して、歐洲に於ける方今第一の博識ならん、といへりき、デーン、ミルトンの博學なりしも、或はクレイには一歩を譲りぬべし。クレイの學を好みしや、常人の色食に於けるよりも甚し、彼れは沈鬱不活潑なりしにも拘らず、其の智的勞力に精勵なりしと、其の發達の著大なりしと、眞に驚くべきものあり、されば、彼れ嘗ていへりき、事に従ふは大幸なり、(To be employer is to be happy)と、勉學はすなはち彼れが爲に慰鬱排悶の要具たりしなり。クレイが作のうち、論ずるまでもなく、第一位を占むるものは『墓畔吟』なり。もとより一部分の上よりいへば、此の作に優る句もあまた見ゆれど、全軀の精妙と圓滿とは、到底、此の作に及ぶものなし。其の着想は平明にして、特に奇抜なる箇所もな

けれど、其の語や、其の調や、精を極め、美を盡し、句々貫珠の如く、一字一言をも増減すべからず、恰も是れ古名匠の刀に成れる靈妙秀絶なる彫像と一般愛すべくして弄ぶべからず、崇むべくして狎侮すべからざるの致あり、此の故にスピンバイン氏は評して曰はく、此の作のみの譽にても、クレイは將來の諸代に對して奪ふべからざる無上の地位を占むと。『墓畔吟』は、夙に我が讀詩社會の熟知せる所、故に今多く論ぜず。

第十四章 グレイ以後の諸作家

十八世紀の末葉——副壇の沈滞——文學上の二大欺騙——チャタートンのロリー詩集——マックフライソンのオッシュン翻譯——オッシュン熱——其の他の小詩人——ゴールドスミス——其の傳——其の作——劇の作家——シエリゲン——當代の劇壇

ゴッス氏の所謂、デ、ン、ン、時代の未造は、トムソン、クレイ全盛の當時に於て一度幾分か銷却したりし、彼の散文時代といふ、貶稱を又もやいつとなく招還し來りし時代にして、恰も一小頓挫の期節なりき。詞壇大革新の機運は、隱然として切迫しつゝありしにも拘らず、クレイは漸く老い、ヤングは黙し、溫柔、コリンズの如きものも又

出でず、自然の研究に忠なることトムソンの如きものも再び現れず、爛鼻鼻を撲ち、陳彩眼を倦ましむる底の作は日に月に夥しかりしも、些の清新の氣に接觸するの機なかりしが爲に、詞壇は萎靡し沈滞し、讀詩社會將た甚しく倦怠して漸く睡眠に就かんとせりき。此の時に當りて、作家も、批判家も、世間の讀者も、稀有なる **文學** 上の **二大疑獄** によりて、其の懶眠を破られたり。二大疑獄とは、一はプリストルの鬼オトマス、チタートンが贗作に係る所謂 **ローリ詩集** の疑獄にして、二はスコットランドの私學教師 **デームス、マックフリーソン** が譯述に係る所謂 **オッシュン詩集** の疑獄なり。チタートン(一七五二生、一七七〇死)が驚くべき天一坊的欺騙は、幾ばくもなくして大岡越前にも比すべきクレイが爛眼に看破せられて眞偽瞭然となり、憫むべき童詩人^{童詩人}は、空しく鬼才の名を詞壇に遺して、飢えて倫敦の客舎に非業の死を遂げ、所謂 **ローリ** 問題は文壇の一時の珍瑣談として世に傳へらるゝに過ぎざりしが、**マックフリーソン** が **オッシュン** の翻譯に至りては、其の影響の波及せし範圍の、啻に英國にとゞまらざりしのみか、其の眞偽に關する疑議の如きは、今尙悉くは解決せられざる趣あるに似たり、加ふるに、其の十九世紀文學に於け

る關係も、また多少注意しおくべき價值あり、兎も角も爰に略説する要あるべし。**オッシュン** は紀元後第三世紀のころスコットランドに生まれたる詩人なりと稱せらる。其の父 **フィンガル Fingal** はスコットランド高地々方の慄悍なる酋長にして、屢々四隣と戦うて勝ち、勇武絶倫の名譽を博せりしが、**オッシュン** 亦た勇敢なること父に劣らず、數々從軍して戦功を樹てき、云々。所謂 **オッシュン** の軍物語歌は、此の從軍の間の見聞感慨を叙寫せるものと稱せられて、其の高地々方の風物の描寫、未開族が武強撲茂なる感懐の記叙など、兎も角も、時の讀詩社會には新しく又珍らしかりしかば、古代詩人 **オッシュン** の名は、忽ちのうちに四方八面に喧傳し、スコットランドの **ホーマー** を以て之れに擬するものもあれば、**ホーマー** との優劣を議する者さへ生じ、歐洲列國の文士等皆争うて **オッシュン** を翫讀し、竟には國として其の翻譯を有せざるは無きほどに至りたり。之れをこゝに **オッシュン** 熱と假稱す。さて其の熱の最も激甚なりしは、一千七百六十一年(即ち **マックフリーソン** がはじめて其の義譯を公にして世間に **オッシュン** を紹介せし年)より、同七百六十三年(即ち **マックフリーソン** が **オッシュン** 詩集を八卷に敷衍して再刊せし年)までなりしが、其の眞偽及び價值に關する評論の餘波は、其

の後十四年間收まらずして、尙こゝかしこに澎湃たりき。今日にありては、越くも聰明なる英國の讀詩家中には、決してかゝる賸物に驅せらるゝが如き味者もなければ、オッシャン熱猖獗の當年に在りては、獨の大詩人ゲーテすらも、オッシャンが眞偽を判じかねて、むしろ之れを珍とせし色ありきと聞えたる程なれば、彼の爛氣、陳彩に鑿き果て、何等かの新味を渴望しつゝありし、時の一般の讀者輩が狂喜して之れを迎へしは無理ならぬ次第なり。其の疎豪の風調と其の粗厲の着想とは、蕪雜生硬なりしにも拘らず、腐爛の舞古調に倦み果てたる新代の好尚に投合して、圖らずも詩壇に一波瀾を捲き起し、彼の監督バーシーが『古歌謠集』(Reliques of Ancient Poetry) (一七六五發兌) トマス、ウーントンが『英國詩歌史』(History of English Poetry) (一七七七發兌) などの感化影響と相俟ち、相助けて、詩風刷新の一大導火線となりき。オッシャン熱は、此の點より見て、文學史上の一の大なる現象と思惟せざるべからず。蓋し按ふに、彼の凡詩人マックファーソンが翻譯の筆にかゝる大魔力のあるべき筈もなければ、凡そ人の書を読むや、必しも其の書の固有本具の旨味をのみ鑑賞するものにあらずして、多くは自家の主觀の影を書中に追ふことを喜ぶものなるがゆゑに、時のオッ

シャン崇拜者が其の偶像に對せしもすなはち是れにて、彼等は皆心ありて(即ち未成形の新詩思ありて)此の粗大含糊なる(粗大含糊なるが爲に漠然、漠然たるが爲に何となう崇高げなる、又漠然たるが爲に如何なる解釋をも容るゝ)此の義譯詩を迎へたり、而して其の粗大なる風調の底に隨意に自家が絶叫の反響を讀み、其の含糊なる詞句の間に自家が感想の反映を捉へ、言はゞ自ら欺騙して、喝采激賞したりしなり。譬へば、二十六夜の月の影を三尊の彌陀と解し、木のうろの蜂の聲を目に見えぬ佛の讀經と聽きて、隨喜渴仰するものゝ如し。要するに、彼等は自家の主觀を客觀化して、之れが爲に謳歌しつゝありしなり。後年、獨のゲーテ、英のバイロン、佛のシャトー、アリヤンなどが歌謳せし所は、オッシャンが作に投射せられし此等未成形の主觀の本昧が形成せられ、醇化せられて、圓現せられたるに外ならざるなり。所謂オッシャン熱減退の後、時の文壇、また何の目ざましき事蹟もなし。作家の傳すべきものも、デロンソンが友ゴールドスミスと脚本家シエリグンとあるのみ、其の他は、あしなべて第三流以下の詩人なり、其の間多少の優劣はありと雖も、要するに爛氣、陣彩中の人、此の小史中に細説するの要なく、追なき也、こゝには只其の姓名のみを

紹介して直ちにゴールドスミスの傳に夥らん。

アケンサイド Akenside (一七二一—一七七〇死)。クランマー Crainger (一七二一—一七六六死)。スマート Smart (一七二二—一七七〇死)。アンステア Anstey (一七二四—一八〇五死)。フォート Foote (一七二一—一七七七死)。ホードリー Hoadly (一七〇六—一七五七死)。タウンリー Townley (一七一四—一七七八死)。ケリー Kelly (一七三九—一七七七死)。ロイド Loyd (一七三三—一七六四死)。ウォートン Waton (一七二八—一七九〇死)。ファルコナー Falconer (一七三二—一七六九死)。ダーキン Darwin (一七三一—一八〇二死)。

オリブリー、ゴールドスミスは、千七百二十七年、愛蘭の一小村なる一貧牧師の家に生まれき。オリブリーが閱歴は所謂クラフ街文士の面影を示すに足ればやゝ細かに叙説すべし。彼れは幼にして痘瘡に罹り、十七歳ダブリン大學に入りて給費生たりしが、性來懶惰放恣、不規律と不謹慎と教師に對しての不柔順と女性的惻隱心とによりて學友間に知られき。彼の、夜陰竊に街衢に出で、流行歌を聞き、やがて之を自作し、一作を五シルリンクに賣りて小遣錢を得しは、その頃のとより。

Oliver Goldsmith.

大學を出でし後、教師、僧侶、狀師、醫者とさまざまに試みしが、一も其の職を遂ぐる能はず、つひに獨歩故山を去りて和蘭、佛蘭西、獨乙、瑞西、伊太利を漫遊せり。發足の當時は懷中只一ギニーありしのみなりしかば、巡歴中の大半は乞食にひとしく、農家に就きて笛を弄し、夕餉と宿りとを請ひきと云ふ。『廢村落』の姉妹作として併せ稱せらるる『遊子』(The Traveller)と云へる詩は、この巡歴中に結構せしもの也。同五十六年本國に歸りしが、其の後八年間は尙糊口に苦しめられ、或は化學家の助手となり、或は私塾の助教となり、又其の自白せる所によれば、アックスレーンと云ふ處の乞食仲間の醫者となりしともありとか、活版所の校正係となりしも此の頃なれど、その最も長く従事せしは筆耕職なり、即ち或は學校用の教科書、或は小兒向きの物語類、或は書籍の緒言、索引等を綴り、又は種々の雜誌に投書し、かくして辛くも口を糊せりき。支那の一旅人といふ名にて著せる『世界の一市民よりの書翰集』(Letters from a Citizen of the World)、『ボーマッシュ傳』(Life of Beau Nash)及び一貴族が其子に與ふる手翰の跡にもせる『英國史』等皆此の際に出でたり。同六十四年『遊子』を出版し、同六十八年『ウェイクフィールドの牧師』(The Vicar of Wakefield) 翌年更に『好人物』(The Good

Natured Man 喜劇)を作しき。此の喜劇舞臺にては失敗せしかど、報酬は五百磅を得たりき。此の前後より其の文名漸く高く、隨うて其の収入も少なからざりしが、之れを右に得て直ちに左に散ぜしが故に、窮乏依然、常に錢に役せられて作しき『羅馬史』の如き其の一例なり。同七十年傑作『廢村落』を著す、詩名ますく高く、僅々三四ヶ月にして五版を重ねき。後三年喜劇『She Stoops to Conquer』成りぬ、好評噴々たりき。今やゴールドスミスの名譽は其の頂に達しぬ、其の交遊には名ある詩文人あり、美術家あり、政治家あり、就中博士ヂェンソンは其の信友なりき。さもあれ其の薄志と放縱との爲に生計の困難奮の如く、終始書肆の奴隸と一般、屢々劣作に醒醒たりき。『希臘史』の如き、または『History of Animated Nature』の如き是れなり。千七百七十一年病没しぬ、享年四十六なりき。

十八世紀の詩人中、ゴールドスミスばかり廣く愛せられたるはあらず。彼れは尊敬せらるべき作家にはあらず、但し愛憐せらるべき性を具せり。柔和、俠氣、厚情、輕忽、懶惰、放縱、小供らしき猜忌、名聞を好み、酒食に耽るの癖、等はれ其の性質のあらましにして、就中著きは婦女の慈と薄志となり。婦女の慈は其の生まれながら具へ

し一種の病にして、其の一生を貧困中に送りしが如きも、其の一因こゝに在り。其の貧民乞食に對するや、前後を顧ずして惠與し、爲に裁縫師の拂にすら窮せしと屢々ありき。其の逝りしや、朋友、愛讀者は更なり、貧民はた追悼惋惜しきと云ふ。又彼れは薄志なりし故に、常に浮世の束縛の堪へ難きを歎じ、靜に處りては動かんことを念ひ、動いては靜ならんことを求め、暫くも現在に安じ得ざりき。サッカレー評して曰はく、彼れは明日の事を空想し、若しくは昨日の事を歎じて今日を送り、必要迫らざる限りは現在を開却せりと。其の名作『廢村落』の如き、『ウェイクフィールドの牧師』の如き、皆過去を回想して今昔の感を寫せるものに外ならず。如上の性質に加ふるに、輕忽、稚氣、名聞等を以てす、人誰れか愛憐せざらん、また誰れか輕ろしめ笑はざらん。彼れは時の文學社會の寵兒たりしと共に笑柄たりき。さもあれ此の性の其の作に現はるゝや、美しき悲哀となり、優雅なる惻隱となり、柔和なる微笑となりき。さればレーノルズの妹某は曰へりき、『遊子』を讀めば、いかにしても其の作者を痘痕斑々の醜男子と思ふ能はずと。

『廢村落』は、作者が目を逐うて奢侈の風の旺なるを見て、いたく歎き、訓誡の意あり

て作せしものにて、處々に作者が經濟説ほの見えたれば、此の點に就きて或はゴールドスミスを咎めたるものあり。按ふに、此の詩をば訓誡として見ば、或はかゝる非難を加ふるも適當ならめど、詩歌として之れを見んか、經濟説の是非眞妄、豈深く問ふを要せんや。彼の詩を論ずる者は、専ら作者が田舎生活を愛する念の厚き、其の平民に對する同情の純清なる、其の同感の溢れて、或は豪商の驕奢に對する公憤ともなり、慷慨ともなり、或は窮民に對する愛憐とも慈悲ともなれる至切至誠なるを味ふべきなり。

ゴールドスミスは、其の作『世界の一市民よりの書翰集』中に曰はく、如何なる浮沈に逢ふも、如何に勞するも、如何なる所を流浪するも、再び故國に歸りて平和を得たしといふ希望は、吾れも人も有するものなり、生れし處にて死なんことは皆人の希ふ所にして、此の希望ありてこそ目前の痛苦をも暫時は忘るゝを得るなれど。蓋し再び故國に歸りて悠々自適以て老後を送らんの願は、平生彼れが心頭に往來せし希望なりしが如し。彼れ年齒四十三『廢村落』を作りし年、死前三年に達して、己に人生の大半を經過し、遍く浮世の辛酸を嘗め、人情の冷熱常なきを知りし時、身は倫

敦大都の紅塵中にありて、目前に生存競争の活劇を見ながら、中宵徐に往事を回想せしや、去來集散の常なく、榮辱得失の定めなくして、人事の夢の如きを感じ、人生の真相は果たして如何との問題に撞着し、寧ろ名利を抛ちて故國に歸らんの平生の希望の、更に禁ずる能はざるを感せしならん。而して其の故國なるリッソイの孤村を尋ねれば、滿目蕭條として、草笑ひ、水謠ひし昔日の儂をどゞめず、土地は悉く大地主の有に歸して、半は荒蕪に委し、質朴なる住民は姿をかくし、奢侈俗を成すを見る。是に於てか、舊時の故園を追慕し、質朴なる住民を愛するの情、奢侈を惡むの念は漏らすに處なく、遂に一篇の『廢村落』となりて現るゝに至りしなり。

按ずるに、ゴールドスミスは、詩學的好尚よりいへば、むしろアーバン時代に屬せしむべき者、即ち保守的傾向を代表す。されば、其の詩律の如きも、既に一旦廢れたりしヒロイク、カプレットを好みて用ひ、彼のトムソンが用ひたりしスペンシリヤン解及び没韻律語乃至クレー、コリンス等の用ひたりし句格の如きは、其の排斥せし所なりき。彼れは第二期、即ち自然主義の詩壇に其の名を著しながら、その詩統はポーブ一流に屬し、流麗と閑雅とを以て詩の第一義となせりき。ゴールドスミスの詩

名は近年に至り次第に沈落せり、但し、彼れが散文詩『ウェイクフィールドの牧師』ばかりは今尙廣く愛讀せらる。

散文劇脚本の作家として、エリザベス朝以後の有數作家たるリチャード・ブリンズリ、シェリダン（一七五二生、一八一六死）は、二十二歳の時『The Rivals』を題せる一の滑稽劇を作しぬ、是れ其の名を成し、はじめなり、ついで『The Duenna』を題せる滑稽劇を作し、倫敦全市の視聽を驚かし、尙引きつゞきて種々の作ありき、『A Trip to Scarborough』、『The School for Scandal』、『The Critic』、『The Rehearsal』是れなり。其のうち『The School for Scandal』は今尙廣く歡迎せらるゝ英國喜劇の絶好なるものなり。シェリダンが諸作は、一面より見れば當時普く悦ばれたりし佛の大喜劇作家モリエールの作に倣ひたるが如くにも見ゆれど、其の實はむしろ王政復舊時代の諸脚本即ちウイッチェリー等が作の美所を取りて其の醜所を除き去れるものとこそ評すべけれ。シェリダンが梨園詩人としての生涯は、僅々五六年間にして其の二十七歳以後は、むしろ政治界に名聲ありし時代なり。シェリダンが喜劇に成功せし時代は英國喜劇昌盛の期なりき。例へば、ゴールドス

ミンスの作には『She Stoops to Conquer』あり、リチャード・カムバーランドの作には『The West Indian』あり、アーサー・ムルフィーの作には『Three Weeks after Marriage』あり、ハンナ・バートン・ハンス Hanne Parkhouse (Mrs. Cowley) の作には『The Bell's Stratagem』ありて、いづれも佳作なりき。其の他、梨園よりいづれも作家には、彼の有名なるガリック、ガリックあり、フット・フォートあり（以上俳優）コールマン Colman（座長）父子あり、要するに、喜劇のみの上よりいへば、内亂時代の隆運に優るとも劣らざりしなり。さもあれ、當朝をして英國劇詩史中の頗る注意すべき一期たらしむる所以のものは、ブリンズリ、シェリダンあるが爲に外ならず。

第十五章 外國文學との關係

英國文學と大陸との關係——主客師弟の關係の顛倒——十八世紀の英國著述の佛國名士に於ける影響——獨逸文學に於ける影響——十八世紀末葉の風潮——個人と社會との關係——其の結果

英國十八世紀文學の史を結了するに臨みて、特に注意を要するは、其の歐洲大陸の諸文學に於ける影響なり。文學としての價值よりいへば、エリザベス王朝の文學こそ曾て英國に産出せし尤も偉いなる文學的所産なるべしと雖も、其の外國民の感想

上に於ける影響よりいへば、第十八世紀の英文學こそ尤も著明なる効果を成したるものといふべきなり。

按ふに、從來の英文學は、直接若しくは間接に、始終大陸の感化を受けにき。古くはチーサーの佛、伊の作に負ふ所ありしが如き、エリザ朝の諸名家のルキ、サンスの風潮に搖かされ、兼ねて伊佛の名著に私淑する所尠からざりしが如き、若しくは十七世紀、十八世紀の諸作家が佛國の劇詩及び詩學論、修辭論又は西班牙流の小説に動かされしが如き、いづれか英國が弟子。即ち客にして大陸が師。即ち主人たることを證せざりしぞ。然るに時運漸く變移し、第十八世の末ごろに至りては、局面いつしか轉換して、政治上に於ても、文學上に於ても、英國はやゝ師位に立ち、大陸は却りて弟座に下れり。例へば、彼の政治上の革命の如きも、英國まづ先導し、北米之れを擴大し、佛國其の餘響を受けて破裂し、其の餘波全歐に及び、竟に漲溢して全世界を振蕩するの洪濤となりにき。又純文學の上より見るも、ポーブが技巧的詩歌の譽は普く大陸に喧傳せられ、日耳曼の名家も之れに摸倣し、伊、瑞、和、蘭諸國の諸作家はた彼れが蹤に追隨しき。トムソンの如きも頗る佛人に感賞せられ、其の結果

Saint-Lambertといふ者牛耳を取りて佛にトムソン風の一詩派を起すに至りき。若しくはフィールザング、スモレットの作の同じく佛人に激賞せられ、就中、リチャードソンの諸作の彼のルッシーに愛讀せられて、其の『新エレナ』の模範となり、延いて獨の大詩人ゲーテの名作に影響せしが如き、若しくは史傳の方面よりいへば、ヒューム、ギッポンの新著作の普く佛、伊の諸家を驚かし、明かに歐洲に於ける史傳の新紀元を劃せしが如き、いづれも英國の文學史に於て未だ曾てあらざりし所なり。而して、此の關係を語るに當たりて、自然に念頭に浮びいづる著大なる大陸の三詞客あり、英國文學の大陸に弘布せられしは、蓋し、件の三名家の力に因るなり。

所謂三名家とは、第一、佛のモンテスキュー、第二、獨のレッシング、第三、佛のルッシーなり。彼のモンテスキューが名著『方法精理』(一七四八發兌)中に、英國々憲を激賞せる文あり、こはロックが學說及び思想に深く通じたる者にあらざるよりは、決して物し得ざるべき所なりといふ。蓋し、モンテスキューは、最も善く英國を解し、且つ深く英國的風俗を愛好せり、されば其の家在るや、庭園は之れを英の好尚に倣うて設置

し、書を讀めば常に先づ英國の諸著を求めき。若し夫れ **レッシング** が英の諸著に通じたりしは、モンテスキューにも越えたり、彼れは深く英國の劇詩に通じ、英國十八世紀の小品文にくはしかりき。彼れは英國美文學の偉大なることを唱破せし大陸最先の批評家なり。又彼の文豪アルテールも、其のシェイクスピアを嘲罵せしことあるにも係らず、また多少同じ方面に力を盡くせり。さもあれ、佛國の詞客中尤も英國文學の弘布に與りて力ありしは、彼の **ジャンヂヤック・ルッソー** なるべし。さて彼の燃ゆるが如き天才が、觸るゝに任せて溶解せし許多の維然たるあらがねのうちにて、第一の多量を占めしは實に英國十八世紀の諸名著なりき。彼れは、**ホッブス** に、其の他の無神論者に、**ロウク** に、其の他の政治論者に、**クラーク** に、**リチャードソン** に、或は結構脚色に於て、或は着想措辭に於て、負ふ所尠からざりきといふ。

さてまた、特に小説の方面より見るに、十八世紀英國小説の大陸文壇に於ける影響は更に一段著きものあり。そもく十八世紀の起頭に於て、英の讀書社會にもてはやされし小説といふは、佛の流行小説の孱弱なる模倣なりき。當時尤も好評ありし **Roger Boyle** (一六二一生、一六七九死) の **Dartloissan** の如きは、彼の佛の女作家の **Gen**

Levy の末流を汲める劣作にして、今の所謂小説を標準としていへば、殆ど齒牙にだにかくるに足らず。然るに、同世紀のなかばより、此の方面の文運は、すでに前にも叙したる如く、勃然として興隆し、**デフォー** いで、**リチャードソン** いで、**フィールディング**、**スモレット**、**スターン** の徒、頻々相ならびて、創新なる筆を揮ひ、翻然小説の局面を一變し、精微靈活なる一新體を開き、所謂寫實小説及び心理小説の基礎を置きにき。しかも此の空前の革新の、英の小説壇に興起せしは、他の大陸の小説壇が尙依然として舊窠を脱せず、陳套に安んぜりし時なりしかば、其の一たび海外に知られて『**ロビンソン・クルーソー**』、『**バメラ**』、『**クラリッサ**』、『**トム・ヂونس**』の普く大陸にて玩讀せられ、其の清新の致のよることばるゝや、かなたの著作界、讀書社會は、た靡然として其の好尙を一新し、延いて全歐の小説壇に於ける一大變遷を招致せしこと、蓋し異しむに足らざるなり。彼の **スコット** や、**ヂーマ** や、**サッカレー** や、**ヂッケンス** や、**トルストイ** や、皆其の遠祖を尋ね來たれば、**リチャードソン**、**フィールディング** 等に多少の血統を繋かざるはなし。

最後に哲學上よりいふも、十八世紀の英國は、鮮少ならざる感化を歐洲大陸に與へ

たり。ロック、パークリー、ホッブス、マンドビル、シャフツベリ、パトラー等は皆大陸の名家に對して、多少勢力を有したりしなり、就中勢力の大なりしはシャフツベリなり。佛にありてはチテロー、デルテール、獨に在りてはヘルデル、レッシング、キーランド等いづれもシャフツベリが徒弟たりき。而して彼等がシャフツベリに感服せりし點は、主として其の倫理既にありしに似たり。さて、這般思想上に於ける大陸と英國との關係は、今こゝに詳叙するの餘地無しと雖も、近世英文學を講ずるに先だち、全歐洲の大變、就中、其の思想、感情、上の趨勢を、聊かわきまへ置く必要あれば、予が嘗て他處にて講ぜし十八世紀末期の概論を引かん。其の論はいまだ悉さずと雖も、また以て其の趨勢の概を知り、兼ねては十九世紀英文學史に移る一假橋を作る材たるに足らん。

歐洲の思想海は、最近一百年間に於て、前古未曾有の大動搖を経たり。我が國人のみが近年の大動搖、前古未曾有の開化に驚愕せりと思ふ勿れ、彼等歐洲人も所謂學藝復興に於て一たび驚き、北米發見に於て再び驚き、佛國革命に於て三たび驚き、ついで最近百年間の急灘の如き思想海の潮流に、驚歎の聲を絶

たざりしなり。彼等は且つ驚き、且つ悟り、且つ絶望し、且つ希望し、七顛八起、遂に今日の文化を致せり。就中、最近百年の急思潮は、彼なたの思想海を震撼せり、恰も彼の山嶽を顛覆して江河となし、海洋を倒にして平地となせる概あり。所謂十九世紀の文物制度、即ち現世紀の諸文物は、悉く最近數百年間の産物なり、否、其の最も勢力ある諸思潮は、最近百年の所産といはんも、殆ど争ふと能はざるべし。見よ、彼の自由主義や、民権主義や、社會主義や、平民主義や、個人主義や、世界主義や、國家主義や、財政の整理や、憲法の確定や、女權論や、勞力者問題や、凡そ政治上、社會上、經濟上にあらはるゝ諸精神は、悉皆當世紀の結果ならずや。若しくは學藝にあらはるゝ所を見よ、驚くべき科學上の進歩、驚くべき哲學上の進歩、驚くべき神學上の動搖、驚くべき工藝上の進歩、彼の超絶哲學や、經驗說や、審美論や、社會學や、心理學や、進化說や、新器械や、新製造法や、寫實主義や、^{アーツ}專美^{オアーツ}派^{オアーツ}や、いづれか當世紀の所産にあらざる。然り、最近一百年は歐洲の全局を一變せる前古空絶の紀元期なり。

此の驚くべき大變動は、そも如何にして起こりしぞ。按ふに、近世史に通じた

る讀者は、此の答を聽くを要せざるべし。彼等は歐洲の十八世紀が如何に一大革新を促しつゝありしかを知らん、如何に十八世紀の全歐洲が腐爛の至極に沈滞して百事悉く非なりしか、如何に悪習慣が重疊して社會百般の事に累をなしか、政治上の悪習慣が如何に固着して王侯門閥の專横となりしか、宗教上の惡因襲が如何に殘敗して僧官等の墮落となりしか、如何に虚儀虚式の盛行して偽善矯飾のよるこばれしか、文學の如何に擬古に泥み、彫蟲をよるこび、塗飾是れ力め、濃厚是れ事とし、ひたすら纖巧にのみ流れたりしか、如何に悪習俗が全權を握りて各個人の志望を拘束せしか、如何に虚偽が跳梁して誠意を抑へしか、如何に人工が跋扈して天然を防げしか、要するに、不正なる習俗即ち當世の輿論、輿情、輿情習俗に反挑せる正直なる個人が、意思との間に、如何なる激烈なる軋轢ありしか、而して其の結果は常に**個人が失意**に終はり、天道是か非かの歎世を怨み、俗を憎むの聲、如何に全歐に充滿せりしか、これらは近世史に通じたる者の説明を俟たずして知れる所ならん。所詮、歐洲の十八世紀は偽善、矯飾、沒誠實の時世なりき、即ち假面の時代なりき。政治

家は表に公衆の利福を唱へながら、裏には私福是れ求め、僧侶は陽に天道の崇敬すべきを講じながら、陰には卑しむべき塵欲に耽り、言行背馳、而も恬として耻づる色なかりき。如何に當時の文學が諷刺嘲罵に富めるかを思へ、又如何に諷刺嘲罵を事とせる文學の世に歡迎せられしかを思へ。是れ豈當社會の腐敗せる好證左にあらずや。諷世嘲俗の文學を讀みて毫も發憤せざる社會は、自家を嘲けられて平然たるの社會なり、即ち虚偽に慣れて之れを怪しまざる厚顏の社會なり。彼の十八世紀の名家たるポープを見よ、スヰフトを見よ、若しくはボリソクプロークを見よ。又は轉じてルッソーを見よ。ヂルテールを見よ。やゝ降りてフィールディング、スモーレット、スターンを見よ。いづれか世を嘲罵し、俗を諷刺せしを以て、其の名を一世に博せざりしぞ。まかも彼等の行爲せし跡に見るに、ほとんど一人の行爲の其の言に副へりしものなし。チヌスターフィールドの其の兒に矯飾を庭訓せしを思へ。ルッソー、ポープ、スターン等の如何に俳優に似たりしかを思へ。彼等はた假面時代の兒にして、自家を諷刺して恬然たりし者なり。先聲尙然り、其の末流の腐敗は推して知るべ

きなり。全社會の墮落はます／＼悪習俗をして其の毒を逞うせしめ、たまたま正人君子あるも此の悪周囲と戦うて毎に敗れ、數奇不幸を歎ぜざるはなかりき。かゝる悪社會と正しき人との衝突、並びに其の衝突より生ずる幾多の弊害は到底看過せらるべきものにあらざ、こゝに於てや、十八世紀のはじめより其の末に至るの間に、激烈なる**社會對個人の激論**は沸騰せり、即ち社會罪あるか、個人罪あるか。罪は人にあるか、罪は習俗にあるかといふ疑問、自然に識者間に囂然たるに至りぬ。

まづ英にありては、哲學者ロック、夙に政治及び宗教の弊害を道破し、個人が固有の自由を唱へ、其の弟子シャフツベリ、ボリングブローク等、續いて頻に其の説を敷衍し、彼の有力なる自由思索家、トリアンド、モルガン、コリンズの徒、半無意識にして他面より之れに聲援し、ボンプ、スフフト等の諷刺家はた其の旨意を承けて、悪習俗を攻撃せり。試に英國十八世紀の文學を繙き見よ、其の最も傑出せる諸作家は、何れも皆聲を揃へて政治組織の流弊を攻撃し、教會及び神學の悪習を非難し、偽善を罵り、謬信を嘲り、不自然と不道理とを喝破せざるはなし。

而して社會の壓制即ち悪習俗の最も甚しかりし佛國に於ては、此の般の論難も竟に其の極頂に達せり。彼の『萬法精理』に悪制度を説破し、"Persian Letters"に悪習慣を罵倒せしモンテスキュー、嘲難家の大王と稱せられて、後の大破裂の緒を發きしデルテールの徒は、孰れもロックを愛讀せし論客にして、明かに當社會の勁敵なりき。若しくは『民約説』に一世を震蕩し、『新エレンナ』に鋭く醜俗を諷刺せしルソー、"System de la Nature"を著し、ドルバック、『精神論』を唱へしヘルメシオス、若しくはチデロー、グロムベルの徒、其の他所謂エンサイクロピヂストと稱せられし徒は、皆是れ多少社會對個人の疑問に對して新解説を與へんと試みし者也。若しくは『人權論』を著し、英のトマス、ペイン、若しくは『政治的正義』を著し、英のウイリヤム、ゴドフィン、其の他枚舉するに遑あらず。蓋し十八世紀の後半は、思索、討議の時代なりき、個人に罪あるか、社會に罪あるか、之れを明めんと力めたりし時代也。此の討議、思索の結果は、所謂**人間科學**、即ち人間を研究するの學をして、驚くべき發達をなさしめたり。心理學、社會學、政治學、經濟學などいふ、總じて新らしき學問にして、就中人間に關する者は皆此の思索間

に芽をいだせり。眞理を追求し、自然の状態を考察するの傾向は、すなはち此のときより盛んになれり。今日に所謂科信的精神、哲學的精神、人權論、自由論、平等論、自然論、平民主義、個人主義、社會主義、信仰の自由、學問の自由、研究の自由などいふ思想は、すべて此の間より生まれいでたるなり。而して其の結果は、すべて社會の惡習俗の非を鳴らし、各個人が薄運の不當背理なるを認定せり。更に前段にいへるを總括して略説すれば、十八世紀の後半におよび社會と個人とが軋轢の究極せんとせしや、社會と個人といづれか罪あるといふ疑問起こり、自然に討議の時代を醸し、所謂純理論盛行し、其の結果、個人に罪なし、社會に罪あり、人間其の物は本來善美なりといふ結論生じたり、即ち各個人には罪はなけれど、惡習慣、惡制度及び之れを代表せる當社會に罪あり、所詮此の惡制度、惡習慣の行はるゝ間は、個人の幸福を得るに由なし、個人の權利と自由とを伸ぶるに由なし、惡習俗は悉く蕩攘すべし、惡制度は悉く破壊すべし、所詮大改革必要なりといふ結論生じたり。彼の革命の煽動者として知られたるブルテール及びルソーの二人が、共にパスチル破壊前にみまかりながら、ふたりな

がら大革命の方に旦夕に逼れるを豫言して逝りしを以ても、此の潮流の勢ひの轉急なりしを推定するに足るなり。(下略)

第五編 近代の文學

第一章 歐洲近代の革命思潮

精神上、物質上の變動——英國社會の進歩——佛國の大革命——獨逸の勃興——思想上の二大潮流——フランス——其の畧傳——其の諸作——文致と好尚との革新——クーバー——其の特質

第十八世紀の末より第十九世紀の始めへかけて、歐洲に思想上、物質上の大革命起り、政治上、社會上の大變動を呼び起し、其の大變動の餘波として新文學勃興として興りたり。かゝる大變化の如何にして起りしかば、前章にほゞ叙べたる如し。蓋し物極まれば必ず變ず、第十八世紀に至りて爛熟に達せし文物は、其の末に及びて一轉化し、靜勢は俄然として動勢となり、引きしほりたる強弩の機をはなるゝが如く、突飛の勢ひ當るべからず、先づ政治上に於ては、自由主義大いに起り、**政治的革命**成就せられ、有形、無形の諸拘束一時に除かるゝ有様となりしかば、國民の眼界忽然として擴大し、思想も感情も急激に開發せられ、學術、技藝はた頻りに發暢し、諸般の事業悉く前代未聞の觀を呈するに至りき。

英國のみに就きて見るも、多年蘊蓄せられたりし學術的研究の結果、今や實地に應用せられて、或は蒸氣機關の發明となり、或は紡績器械の發明となり、處々の都會は盛んに之れを利用して殖産、工業を助けたり、加ふるに耕作法の進歩するありて、收穫従前に幾倍せしかば、能く劇増せる人口を養ひ、需要増し、供給加はり、輸入の額前年度に三倍すれば、輸出もまた六倍となり、生活の路隨うて開け、上流はいふに及ばず、細民は九時間と金錢とを娛樂、教育、讀書、旅行等に費すの餘裕を生じき。是に於てや、彼の新聞紙の如きも、其の始めて出でし時(千七百九九年)に僅に掌大の紙面にして、當年の發刊高は諸雜誌を合して數千號にも満たざりしに、一千八百四十三年にて至りては、七千一百萬號と注したるのみか、中には危然たる大冊も夥多ありき。諸般の事業のかゝる進歩擴張の狀にありしと同時に、嘗て小數の専有なりし諸特權は、今や公衆の有となり、町人、職工の如き、昔は我が徳川期の商工にひとしく、無學小心、只管社會の習俗にのみ盲従せりしものも、今は其の才と力とを以て任意に好位地を作るを得しかば、皆爭うて社會の本舞臺に現はれ、他の名門顯族と共に優勝劣敗の活劇に手腕を試ることゝなりき。

以上は英國に於ける當代の概況なるが、此の大反動の時勢は、政治的革命の中心たりし佛蘭西に於ては更に一段甚しかりき。例へば、彼のナポレオンが部下の諸將の如きは、概して皆賤家の子なりし也。要するに、千八百三十年の大革命は、佛國民に取りては、名譽財寶を賭せる、全庶民が智力上、勞力上の大競走たるに外ならざりき。更に注意すべきは、社會外部の變化と共に、人々の内部即ち精神界もまた、制止すべからざる、自然の大勢によりて、著く變化せられしとなり。始め政治的革命戰爭の先づ佛國に起こりしや、之れに因縁して列國各々兵を起こし、戰雲一時全歐の天を掩ひ、從來隔離せりし英、佛、以、獨は此の戰爭に媒せられて相接觸し、而して相互の文明は其の衝突する毎に光を加へ、思想の範圍は自ら膨脹し、孤陋狹隘なる個國的思想の如きは漸く跡を絶たんとせり。從來爲すなかりし獨國は、眠獅の俄然として覺めたるが如く、猛然一吼して革命的旋渦のたゞ中に突入し、社會的制度の革命を成就せる佛國と共に、**精神的革命**の主動者となりぬ。むかしは爐邊に喫烟して讀書に餘念なかりし此の質朴なる人種が、今や新思想の先達となりて、他國民の企及し得ざる深遠なる思索に従事したり。彼等が求むる所は宗教の儀禮

にあらざして其の精神にありき、作文の法則にあらざして詩美の本相にありき、脚色結構にあらざして批評法の真理にありき。要するに、絶對の眞善美を追究する傾向は彼等を経て近世の思潮となりき。

かゝる時運の大勢は合して自由主義と哲學思想との二潮流となり、一は佛蘭西に發源し、一は獨逸に濫觴し、やがて滂湃としてドーヴァー海峡を越えて英島に押し寄せたり。さもあれ英國國民の着實沈毅なる本來の特性は、堅固なる堤防となりて、しばらくは此の潮波の侵入を許さざりき、而も氾濫の大潮勢は到底長く支ふべくもあらず、蟻蝮の穴はこの水を導いて先づ文田を浸さしめ、テースの所謂ローマン派及び哲學派の二流を生じ、彼の擬古文學の殘壘を掃蕩して藝術の風尚を一變するに至りたり。

最初に此の潮流にたゞよへりしものを蘇國の農民ロバート・バーンスとす。

ロバート・バーンスは千七百五十九年スコットランドの寒村に生れき。彼れは此の天然不幸なる瘠地に於て、赤貧洗ふが如き窮迫の間に成長し、十二歳にして父の農事を扶け、十五六歳に至りては全然一個の勞働者たりき。幼時に於ける、かゝる

Robert Burns.

激烈なる勞苦は、痛く其の身軀を殘害し、此の天才をして終生心臓病と不眠症とに苦ましむるの種子を醸しき。かくて其の父の老いゆくにつれて、家計いよ／＼困難となりしかば、バーンスは人に傭はれて苦役に従ひしが、運はます／＼拙くして、先づ父を喪ひ、次に戀に消望し、失意落膽の間更に幾春秋を送りぬ。多感多情にして功名の心燃ゆるが如き青年詩人が、かゝる逆境に立ちたる時の感想思ひやるべし。窮乏の極覺に心を決して西印度島に出稼ぎせんとしける折から、會々扶助する人ありて、其の詩篇出版せられ、僅かに數ギニーの財を得しかば、辛くも出稼者となるの不幸をまぬかれにき。さもあれ滿腔の功名心は常に其の満足を得ざるを憤りて懊惱し、彼れは幾度か其の身の卑賤なるを歎せり、而も不義と卑劣とは其の敢てする能はざる所、彼れは所詮器械的に勞働して其の生計を爲さざるべからず。然れども詩歌は其の理想、これ將た捨つるに忍びず、こゝを以て、日々に農車を押しながら常に其の愛する詩集を讀みぬ、就中蘇國の古謠を玩味し、夜に入れば家に歸りて破窓の底屢々これを回讀して、靜かに其の詩思を凝らし、其の詩形を琢けりき。彼れはかゝる境遇にかくの如くにして人となりしかば、後に社會に立つに及びて

富豪權門を畏敬せずして常に弱者賤者に同感し、之れを保護するを以て任となし、且つ全力を盡くして悪習俗を攻撃し、教會を批難し、又所謂文明的生活を罵りき。其の筆鋒の鋭利なる、往々にしてルッソー、ゾルテールを凌がんとせり。かくて絶對の平等主義を主張し、人生の尊卑は其の位階にあらずして本性にありとなせり。其の有名人の句に曰はく、如何やうなる有様にありとも、人は人なり、美服は裁縫師之れを造り、官爵は式部寮之れを製る、所詮位階は貨幣の印章、人こそは黄金と。彼れが平等の同情は、畑の鼠、路傍の雛菊にさへ及びき、否、彼れは悪魔をすら不幸なる同僚をもて視、若しくは形相の醜き豎子と見做しき。

一千七百八十五年“Jolly Beggars”を公にす、是れパインズが傑作の隨一なり。種々の乞食の亂醉戲謔せる言動、描き得て睹るが如く、筆々躍動す、シェイクスピア以後稀に見る所の劇詩的神筆と稱すべし。パインズが作は尙單純なる抒情詩中に一讀三歎すべきもの夥多あり、而も其の筆致は何れもよく、其の天真朴直なる精神を現じ最も創新を以て勝る。按ずるに、十九世紀の後半期より古法、舊格を準繩とするゝ次第に廢れ、一に誠實なる自家の情感を本とする風起これり、而してパインズの如

きは實に先づこの方向に馳騁したる隨一人なりき。彼のウィルヤム、ブレイク、ウィルヤム、クーバー等の如き亦た然り。パインズの詩は、自由に野語、俚言を混用し、殆ど日常の會話と一般、最も嚴格なる思想の間にも滑稽の文字を雜へ、最も悲哀なる處にも間々卑俚の語をまじへたり。

以上革命思想の誘導者としてのパインズが生涯の大畧なり。テーヌは曰はく、時運に先だつものは常に悲境に陥るを免れず、パインズは實に其の人にして、時世は未だ彼れに及ばざること四十年なりしなりと。而してカーライルは曰はく、パインズをして若し相當の家に生れて相當の教育を受けしめば、彼れは立ちどころに英國文學の趨勢を一變せしならん。カーライルが此の語はパインズを過重せる嫌あり、而も彼の時代の力を過重して個人、人の力を輕んじたるテーヌが前説の短を補ふに足るべし。パインズは中ごろ大に名を知られて一時は好地位を得たりしかど、又忽ち地位を失ひ、貧困の中に其の生を終へき、時に一千七百九十六年、齡僅かに三十八なりき。

當時英國に於ては保守主義尙依然として勢力を有し、專制的政治も尙深くは思ま

れずして、むしろ國民の保護者として歓迎せられ、一般の人民は政治界に事なくして天下の太平なるを謳歌したりき。彼の教會の如きも其の積弊小少ならざりしにも係らず、尙ほ道義の支柱として多數の國民に尊奉せられ、未だ遽に瓦解すべくも見えざりき。されば所謂自由平等などいふ革新主義は、輿論の嫌惡撥斥する所なりき。彼の聰明なる宰相ピットの如きすら、政略上の理由ありきとは雖も、痛く革新の風潮に抗し、佛蘭西革命を目して、宗教を滅絶し、社會を破壊する暴舉なりと語りし程なれば、俗論の之れより甚しきものありしこと推して知るべし。

状態かくの如くなりけれども、世界の氣勢は到底長く拒む可からず、革新の氣運はいつしか變相して英國に潛入せり。固より佛蘭西若しくは獨逸にての如く、全國を振盪する底の勢力をば、醸さしりきと雖も、最初先づ文學に入りて其の文致と好尚とを變動し、文致、好尚の變化すると共に、思想上、感情上、道念上、風俗上に於ける其の他の革新を促し來たれり。蓋し、社會上、政治上に自由と革新とをほし、いままゝにする能はざりし不平は、隱然破裂して文學上に於ける革新となりしなり、故に近世に於ける詩學上、文學上の改革は英國を以て最先となすべし。さて、所謂文致上の

革新はそも何れの邊よりか行はれし。左に先づ第一にこの方面に力を盡くし、一抒情詩人の閱歷を略叙せん。

文學に平等の主義を持して革命思想を鼓吹せしものは、已にパーンスあり、而して文致の上に舊檢束を解脱して自由創新の躰を起すことの第一着歩を進めしもの、之れをウィルヤム、クーパーとす。

ウィルヤム、クーパー或はカウパーとも稱呼すは一千七百三十一年に生れき。爲人小膽多病にして物に感じ易き性なりしが、六歳母を喪ひ、早く世の辛酸を味へり。さて、さらぬだに悒鬱なりし彼れが性を、更に甚しく殘ひしものは、其の幼うして入りし學校なり。當時の學師等は學童を罰するに、毎に鞭撻を用ひ、且つ年長の生徒等は常に幼弱を虐遇せりき。クーパーの小膽にして多感なるや、此等虐待の爲に痛く神經を刺衝し、やがて精神病を惹起し、習ひ性となり、終生懊惱としてまた樂むこと能はざりき。長じて後、伯父某の傳手によりて上院の書記官たりしが、彼れ其の勤務にえ堪へずして煩悶苦惱し、就中其のはじめ試験場に立出でんとせし折の如きは、恐怖厭嫌の餘り、殆ど自殺せんとなしきといふ。其の後、牧師アン・キャン夫妻

の厚意によりて其の家に寄寓せしが、素より行ひに露ばかりの表裏なき小心謹直のクーパーにれば、深くアンソンの妻女に愛せられ、交誼殆ど眞の姉弟の如くなりき。されど悒鬱は暫くも去らず、無垢清浄なる身心をも自ら責むると極めて厳しく、常に我が罪障の深きを畏怖し、神に愧ぢ、神を怖るゝこと、彼のペンヤンと相似たりき。かゝる性質なれば、其の詩歌を作るや、譬へば悒鬱の爲に琴を奏し、繪を物するに同じく、概してその悶を散せんが爲のみ、功名の念などは絶えてなかりき。且つや彼れが滿腔は悉く是れ詩歌の雅情、詩神は常に其が頭に宿りき、遠く題を求めて思を構ふる要なかりしなり。テースはクーパーが作を稱へて曰はく

これに由りて、これを觀れば、吾人はもはや希臘、羅馬に旅行するを要せず、古詩歌を研究するを要せず、詩歌に美なる材料は全く吾人の周圍に充滿せり、宇宙の萬物は盡く美なり。之れを認むるものは心なり、唯夫れ心なり、故に吾人はもはや舊法格を墨守する要なきなり。是に於てヤクーパーの作の如きもの起る。

と。蓋し、模せず、飾らず、單に「誠」を以て優る者はクーパーが詩歌の特質にして、サウシーをして、此の詩篇に比ぶれば、如何なる名作も天然の山水に比較せられたる庭園の如しと激賞せしめたるものは是れなり。

彼れは又一一定の理想若しくは主義を立て、之れによりて進退するやうのこともなく、只ありのままに其の感想を叙せしのみ、求めずして湧き出づる自然の感想を抒せしのみ。是れ其の詞句の活動せる所以也。彼れは英國に於ける一大柱、園派の詩人なり、但し嘗て敢て論辯して自家の主義を唱道せしことなし。否、思想上よりいへば、彼れは寧ろ保守的なり、改革の主義など抱きしものにあらず。詩歌は「誠」を旨とすべし、法格に泥むべからずといふことを、表だちて唱へしは、所謂ローマン派、就中湖畔派の詩人、すなはちサウシー、ウォルヅテオス等にはじまる。

クーパーが作のうちにて最も名高きは『タスク』と題する長篇の詩なれど、可憐なる佳什は間々其の小品の中にもあり、例へば彼のアンソン夫人の家にてものせし滑稽の作『ジョン・ギルピン』の如きは永く愛誦せらるべき佳什なり。蓋しクーパーは悒鬱の性を有しながら、不思議にも滑稽の才を具へたりき。

第二章 ローマン派

ローマン派の由来——新思潮の二大派——史詩派の特質——其の代表者——サウジの諸作——スコット——其の諸作——韻語——小説——スコットの長短

さる程に文學革新の機運漸く熟し、一千七百九十三年の頃に至り、所謂ローマン詩派英國に興りたり。此の派の由來、主義及び影響は、その長所、弱點と共に獨逸、佛蘭西の同派に類似せるものにて、其の興起せし初めに於ては、詩界の異端をもて目せられき、されど彼等は少しも屈せず、盛に作し、大膽に論じ、親密に結托して舊派を駁撃せり。按ふに、此の派の起りしは、當社會の固陋腐爛、到底頼むに足らざるを憤慨せしに基く、されば其の結果の文學上にのみ顯れしに拘らず、社會の非を攻むるの意彼のルソーが非文明主義の議論に髣髴たるものあり。されば其の主唱者の一人たるサウソーは、其の新主義を實行せん爲めに屢、激烈なる政黨員と交り、『ワット、タイラー』といふ劇詩を作しては、暗に革命を鼓吹しき。又同じく其の一人たりし、『ルリッヂ』は、口に筆に、之れを唱ふるをもて足れりとせずして、進んで同志と共に亞米利加に航し、國王、僧侶の專横を受けざる一理想的共和國をさへ建立せんと空想し、遂にはユニテリアン教會に入りて一種の神祕説を唱説するに至りき。後には隱君子と見做されたりしウォルツオスだに、其の尙壯なりしや、此の氣運に煽られて革命を鼓吹し、國王を罵つて“scathed child of clay”と激語せりき。然れども英

國は所詮英國にて、着實を主とする國柄なれば、革命の急潮も早晚抑止せらるゝに至らざるを得ず。年壯氣銳なりし三詩人すら、いつしか前説の行ふべからざるを覺りて、次第に着實に戻り來たりし程なれば、其の他の追隨者は自然に其の勢ひ挫けたりき。

されども、此等革新思潮の爲に、慙くとも文藝上の賞玩力は著く進歩し、彼等は明かに十七八世紀の作に模倣するの愚なるを知り、遠く學藝復興時代と中古時代とより其の醇粹なる模型を取らんとせり。是に於てや、盛に埋没せる俚謠、俗歌を研究し、諸外國の古詩、古謠を蒐集し、其の清純なるを激賞し、其の無邪なるをもてはやし、漸く詩風を革新し來たりぬ。彼等は戮力して貴族的纖巧と能辯的綺麗とを攻撃し、卑言、俗語豈に忌むべけんやと唱へたり。されば其の調格、韻律の如きも、或は十三世紀の韻律に依り、或は十六世紀のを用ひ、而してコールリッヂ、サウソーの如きは純然たる新式を創造しき。此の大紛亂は竟に二大詩派を生じたり、一を(テューヌに從ひて)歴史派ヒストリカル・スタイルとし、一を哲學派フィロソフィカル・スタイルとす。歴史派は彼のローマン派と同じ流れにして、哲學派は其の支流なり。前者の著なる者をサウソー及びスコットとし、後者を

代表せるものをウォルツォオス及びシエリーとす。而して此の二派の起りしはひとり英國のみならず、佛、獨共に同様の詩潮を現じ、時勢の然らしめし所なり。

史詩派（ローマン派）の或は意識して陽に、或は半無意識にして陰に主唱せし所に曰はく、理想は時代と共に變遷す、今日の理想は到底明日の理想にあらず、將た昔日の理想にあらず。今日見て醜となすものは、古蠻人若しくは封建武士の見て美となし、ものにあらずや。されば古へを描かんとする者は、自ら古人とならざるべからず、彼れ等と共に無知ならざるべからず、彼れ等と共に殺伐ならざるべからず、彼れ等と共に情に脆からざるべからず、彼れ等と共に鬼魅を畏信せざるべからず、彼れ等と共に熱帯に住し、或は城堡に籠らざるべからず。豫め理想を設けて寫描の上に古人を左右するは大なる誤謬なり。外國人を寫す亦然り、要はたゞ己れが一時一處の理想を尺度として人を裁斷せざるにあり。古人愚なり、蠻人野なり、而も竟に其の事實たりしを奈何せん。詩人の筆は過去を現寫し、異境を直狀すれば足る、是非の沙汰を加ふべきにあらず。汝の成心を没却せよ、汝の主觀を没却せよ、これ眞を寫さんが爲めなり、以て汝の見識を損ずるにあらずと。

史詩派の主義の實現せらるゝや、考古の風あらゆる美術の上に流行せり。彼の獨の大詩人ゲーテが作の如きは實に此の派の率先たり、彼れの想像の普遍にして平等なるや、描寫今古に涉り、同感東西に通じたり。さもわれ第二流以下の諸作家は、只徒らに往時を回顧し、風俗、人情の擬古を事とし、臆斷穿鑿、却りて詩の眞に背けるもの比々、こゝに於て讀詩社會漸く倦み、以爲へらく、所謂史詩は到底古記録の質實なるに如かず、擬古の俗謠は所詮眞成の古謠に如かず、過去を知らんとせば、須からく詩人を去りて史家若しくは批評家に聽くべきなりと。

此の派の中に著かりしものを擧げんか、佛人に似て快活なりしトマス・ムーアあり、古劇を復興せんとせしチャールズ・ラムあり、批評家、思索家にして詩人を兼ねたりしコーリップチあり、教誨の旨を歌ひしカムベルあり、中にもサウジの如きは其の率先者の隨一人なり。ロバート・サウジは天資穎敏少うして幾多失行あり、蹉跎落魄を経て名を詩壇に著し、所謂貴族的虚飾體の勁敵となりぬ。學博く、作多く、想像に富み、議論に長ぜり。其の詩論の斬新なると、毎に作に序して辯論すると、其の奇異なる事物を寫すに巧なるとは、稍々佛の詩人ユーゴーに似たり。案ずるに

ローマン派に属せりし英才はサウシー以下數十人を數へ、その其の質を殊に
 すと雖も、畢竟、皆史的詩人、或は太古に、或は中古に、或は印度に、或はヘルシヤに、材を宇
 宙の八隅に求めて、縦横に描破を試みたれど、概ね皆皮相の模寫、要するに燦爛たる
 極彩色に俗眼を眩せるのみ、眞眼ある者は竟に其の擬作たるを看破せざる能はず。
 彼等の表はし、光景は、樂劇、オペラ能く之れを代表す。但見る、正面の舞臺金碧燦
 然、魏々乎たり、ゴッス風の大殿堂、うるはしきかな、淡紅の玻璃窓は夕陽と相映ず。彼
 方を詠むれば、紅紫妍を鬪はする後園に、噴き出づる玉泉、夏尚秋の如く、此處に蓮歩
 を移す楚々たる麗人の一群、今や愀然として登場す。忽然として現はる、國王、何
 の意ぞ、虐遇かくの如く、殘なる、已にして一個の烈婦あり、突如王を斃して自ら刎ね。
 劉曉たる系竹、金石、或は離れ、或は合し、哀しむが如く、訴ふるが如く、觀る者夢みるが
 如く、醉へるが如し。幕竟に下る。何等華麗の光景ぞ。目爲めに眩し、耳しばらく
 聾して、場を出づれば、其の心裡に殘る所は何物ぞ。宛然我が淨瑠璃劇を觀たると
 一般、邯鄲の一睡、俄然として驚き、身の夢幻境にありしを知るのみ。是の如きは是
 れサウシーが『ラ、ルーク』さらば『ロテリック、ゼ、ラスト、オブ、ゼ、ゴッス』を始めとして、

當時の諸史詩が讀者に與ふる印銘なり。而して英國讀者の實を悦ぶや、かゝるた
 ぐひの史詩を讀むにだに多く考證を欲せしかば、史詩家は次第に邪路に入りて、お
 のの考證に力を盡くし、遂には其の作に註脚して夥しき典據を援引するに至れ
 り。甚しきに至りては、殆ど詩歌の本領を忘れ、詩によりて正史上又は地理上の知
 識を與へんと企て、事件、性情の發展を餘所にして、徒らに穿鑿考證の精を誇りき。
 テーマこれを嘲りて曰はく

自家を全く史詩中に置きて自ら過去の人間なるは、史詩に成功するの要件にして、ロ
 マン派の本領實に此處に存す、バイチの印度を描き、ゲーテの希臘を寫して成功せし
 は、全く此の妙機を得たりしに由る、而もこれ傲慢にしてひゞり自國のみ美なりませ
 る英國人の爲す能はざるまゝ云々。

と。サウシーと共に此の派に屬して其の著なるものと見做さるゝは、史的詩人兼
 史的小説家ウォルター・スコットなり。

ウォルター・スコットは小説家、歴史家、批判家及び詩人を兼ね、其の作全歐に愛
 玩せられ、一時其の名聲ヲルテールを凌ぎ、殆ど散文のシェイクスピアをもて目せら
 れき。一千七百七十一年、八月、スコットランドなるエヂンバラに生まれき。生まれ

て十八月にして右足跛となりければ、療養の爲め地方の親族に養はれて三年を過
 ぎし、齡八歳に至るまでは學舎に入らずして田圃の間に年月を送りき。此の間、日
 々歴史上の物語を聞き、若しくは俗謡を誦すること耽りき。後ち高等小學に入
 り、中學に轉ず。學舎にあるも、常に他の課には心を留めで、専ら史談を貪讀し、夙に
 フリオスト、サルヴンテス等、古作家の傳奇に通ぜり。後ち法律を學び、十九歳にし
 て父を助けて公務に従ひしが、暇を得る毎に史跡を探究し、蘇國の舊地を跋涉せし
 こと前後七回、北蠻が凶暴の跡、英雄が苦戰の蹤を詳にせり。是れ皆な後年に至り
 て彼れが史詩歌の材となりき。一千七百九十六年始めて獨の名作二篇を翻譯
 し、續いて數篇の自作あり。一千八百五年、公然創作家として文壇にあらはれたり。
 此の年 “The Day of the Last Minstrel” を著す、之れを其の世に知られたる史詩の處
 女作とす。同八年 “Marmion” 世に出で、同十年には “The Lady of the Lake” 出で
 たり、何れも彼れが韻語の名作なり。同十一年より十七年に至るの間 “The Vision
 of Don Roderick” “Rokeby” “The Lord of the Isles” “The Bridal of Triermain” “Harold the
 Dumbless” の五篇、何れも韻語を作せしが、一作毎に萎靡の姿あり、就中『ハロルド』の

如きは著く、氣魄の銷耗を示せり。此の時に方り、バイロン新に大陸より歸り、英氣
 勃々、續々雄勁の作を著し、名聲旭日の上るが如く、就中其の名作『チャイルド、ハロルド』
 いで、後は殆ど全詩壇に覇たりき。これが爲にや、將た他に事情ありてか、スコッ
 ト筆を詩壇に絶ちにき。かくて一千八百十四年はじめて史的小説に筆を著け、忽
 然として未曾有の功を成しぬ。傳によれば、此の事たる偶然の些事より起りしもの
 の、如し。曰はく、此の年春、スコット何がな好詩材を得んと欲して、ふと手箱を探り
 けるに、古き反古の中より一千七百四十五年中に興りし氏族ケランの由來を覺え書きに
 せる物を得たり、是れ彼れが數年前の日記にして、完結するにも及ばず、打棄て置き
 しものなり。之れを回讀するうち、偶々興來たりて禁むべからず、乃ち之れを種と
 して散文の物語を綴る、六週にして首尾悉く全し、すなはち “Waverley” (又の名「最
 近六十年物語」)と題して試みに世に出だしけるに、江湖の歡迎殆ど空前とも稱すべ
 かりしかば、また直ちに “Guy Rannering” “The Antiquary” など、陸續同躰の物語
 を著し、引續き同十六年より十年間に於て、都合十七篇の作を物したり、云々。
 然るに、一千八百二十六年に至り、彼れが關係せる出版會社倒産し、無慮十一萬餘磅

の負債を生じぬ、義理がたき彼れは之れを償はんとて、晝夜精勵、四年にして“Woodstock” “Anne of Geierstein” “The Fair Maid of Perth” “Count Robert of Paris” “Castle Dangerous” 『ナポレオン、ボナパルト傳』等を著し、其のうち七萬磅を償還しき。されど驚くべき精根もこゝに盡きて、もはや筆を執ること能はず、すなはち其の身神を養はんが爲めに大陸の漫遊を企て、一千八百三十二年の夏、時の政府の特に彼れが爲めに仕立てし船に上りて以太利に遊びぬ。されども時既に晩くして恢復を望むべからず、彼れはた死期の近きを知りぬ、同じくは故山の土とならんとて急に本國に歸り、後二ヶ月靜寂なる秋の日の傾くと共に、家族に圍繞せられて靜かに他界の人となりぬ。齡六十二。

スコットは好古の作家なりき、起居衣食住、遊戯嗜好、殆ど皆其の好古癖に因せざるはなかりき。其の畢生の目的は封建的家族の祖となるにありて、其の著作に従事せしも一分は此の史的生活の理想を實現せん爲めなりき。されば其の作によりて得たりし財もて或は封建風の第宅を營み、或は此所に客を集めて屢々封建風の盛宴を開き、或は共に山野に獵しき。即ち文學は彼れに取りては第二位のものたるに

過ぎざりしなり。アーノルド曰はく、革命思想の全歐を振蕩せし時に方り、スコットの獨り之れに冷然たりしは、彼れが常識の豊かなりしと好古癖の盛なりしと社會的改良よりは家庭的和樂を重んぜしとに由ると。

『湖上佳人』 『マリー・オノン』 『島の君』 『以上韻語』 “Fair Maid of Perth” “Old Mortality” “Ivanho” “Quentin Durward” の如きは、何れも皆彼れが名作、時人は、上下内外を問はず、争うて之れを繙讀し、爲めに寢食を忘れしものあり、殊に佛國に於いては其の發賣高百四十萬部の上に出できといふ。然れども、今の進歩せる讀書眼を以て嚴密に之れを品隲すれば、此の大史詩家の諸作とても、只はづかに過去の皮相を寫せるものと稱すべし。服裝、地理は精確なりと雖も、人物の動作、言語はた概して佳なりと雖も、最も肝要なる感情、理想は、往々にして封建期の蠻風にはあらで、動もすれば近世的文明の思潮を暗示す。蓋し、スコットはゲーテと異なり、過去と同化して其の神を捕へ得る底の作家にあらず。彼れの尤も好みし所は過去の風俗なり、出來事なり、武士の氣風なり、古雅の器具なり、其の過去の天地を描いて其の神に入る能はざりしは、亦た止むを得ざる結果なりき。